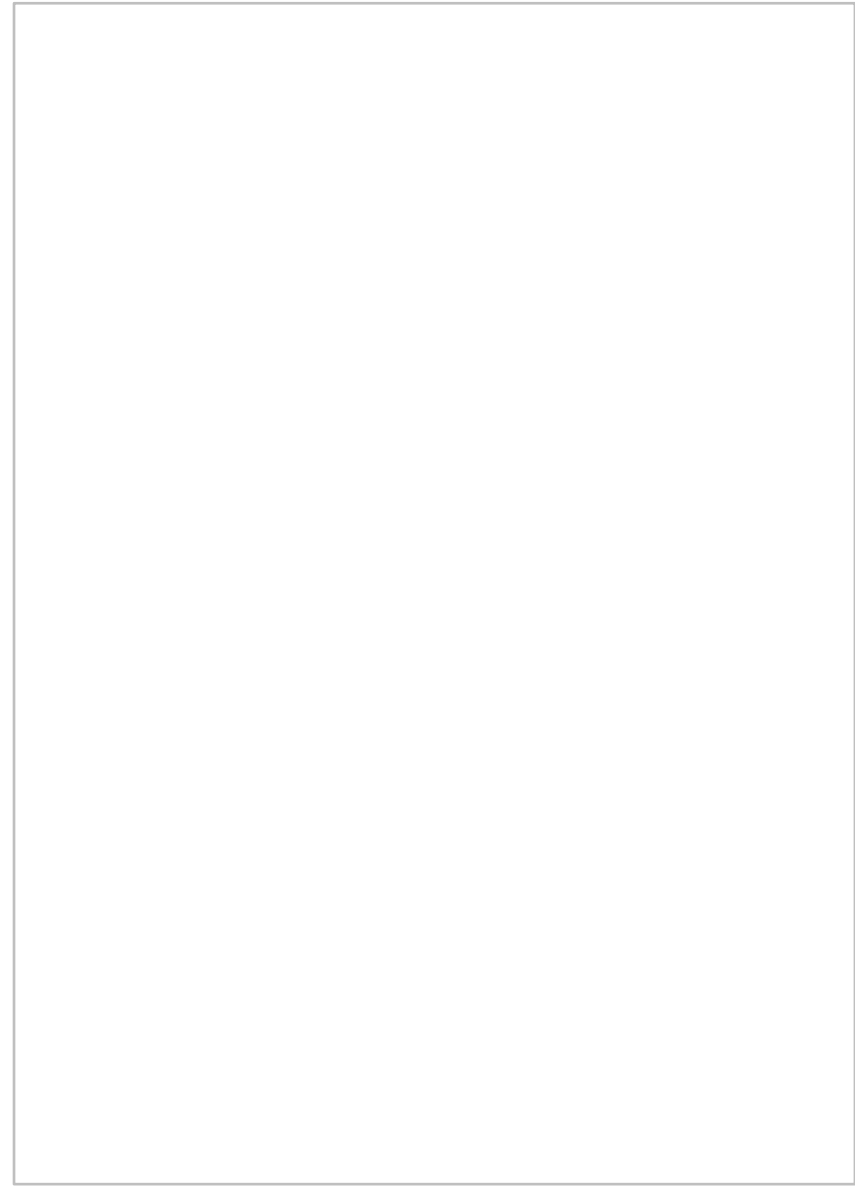
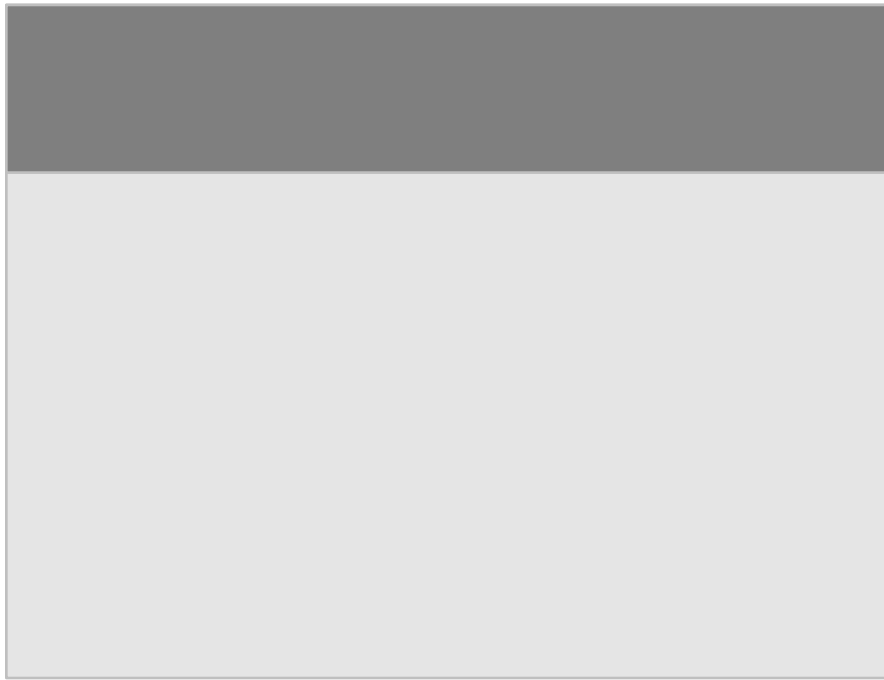


サキュバスバスツアー
～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）



プロローグ

童貞を殺す服と呼ばれる服装がある。

今が初夏だという事は御構い無しに、目の前の女性は夏場着るには少々暑苦しい『童貞を殺す服』でその身を包んでいた。

フリルが各部に取り付けられた白い長袖のブラウスに、ハイウエストコルセットタイプの紺のプリーツスカート。膝丈までを覆う、スカートからすらりと伸びた美脚は、これまたフリルの付いた黒のニーソックスに包まれている。

色々な意味で、重装備なコーデインेतだ。

ふかふかのベッドの上で猫のように四つん這いになり、ゆっくりと動き回る女性。

お尻をフリフリと揺らしながら、赤ちゃんの様にハイハイをしている。

ブラウスのボタンが弾けそうな程、ミチミチと布を張り詰めさせている豊満なバスト。そのGかHカップはあるだろう乳房は、彼女が歩みを進める度にゆさゆさと揺れる。

女性の胸元とお尻は、ほどよい重量感を感じさせるゆったりとしたラインを描き、服装の幼さとのギャップに思わず目眩がする程だ。

その場で伸びをしたり、ゴロゴロと横に転がったり、まるで本物の猫がそこにいるかの様。しかも時折、蠱惑的な視線を送り手招きをして微笑みかけてくる。

チラリとスカートが翻った瞬間に、陰部を覆う純白の下着が視界に入った。

それだけで動悸が激しくなり、視線が下腹部に釘付けになる。

女性はそれに気付いたのか、スカートの裾を持ってゆっくりと持ち上げ、チラチラとパンツを見せつけてきた。

スカートをたくし上げたまま背を向け、パンティラインがしっかりと肌に食い込んだ、肉感たっぷりのお尻と太ももが露わになり、白と肌色のコントラストが網膜に焼きつく。

流し目でこちらを窺い、女豹のポーズをとって迫力満点のヒップをゆらゆらと揺さぶり、早くおいで？と言わんばかりに執拗に前後左右に動かすと、そこからフェロモンが溢れ出ているかの様に、呼応して男根が硬くなっていく。

こちらの反応を知ってから知らずか、女性の口角が上がり、指で太ももから臀部にかけて揉みしだき始めた。

勿体つけた指使いは、ぶるぶるの尻肉を震わせて、その柔らかさを存分に伝える。

お尻を揺らしながら、するするとパンツの裾口をまくり上げていき、Tバックになる様に形状を変化させると、肌色と言っているのか戸惑うほどに真っ白な桃尻が現れた。

水着を着用しても日に焼ける事のない肌面が、透明感のあるシルクの様な艶を放っている。全ての女性が憧れる様な、非の打ち所がない肌の輝き。

色のコントラストこそ、女体を彩る為の重要な要素であると物語っていた。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

魅惑的なパーツは勿論尻だけではない。

くると反転し体を思いつき反らし、豊かに実った双球でブラウスをぱつんぱつんに張り詰めさせ、その上からむにゅむにゅと揉みしだく。

ブラウスから透けて見えるブラジャーは、乳房によって内側から目一杯膨らまされており、尻肉のむっちり感とは違った張りによって、布からはみ出した肉をプルプルと波立たせていた。

細長の指が、ボタンを一つ一つ外していく。

布と布が互いに力一杯ボタンを引っ張っている為、一つ外すたびにぶるんと胸が弾む。ゆっくりと露見していく肌色が、すべての視線を吸い込む魔性の谷間を形成していた。

指を差し入れれば二度と抜け出せなくなり、快感の虜になってしまいそうな深淵に、男性であれば心を奪われる以外の選択肢はなかった。

美乳、無乳、巨乳など、様々な乳形が各々に持て囃される中、ソレは巨乳の枠を少しだけはみ出す実り切った房と、一流の画家が筆を走らせた曲線を持ち、尚且つ誰もが触れる事を躊躇うような潔癖さがあつた。

一つ一つの拘束から解き放たれた胸部は、先よりも豊かに弾み、流れる様に揺れる。

またしても、女豹に擬態した女性は、左右にぶるんぶるんと乳房を揺らしながらゆっくるとこちらに近づいてくる。



男に産まれたからには、必ずこの肢体に欲情すると言い切れる。

絶対的な破壊力で脳を殺す肉体美、それは黄金比と寸分の誤差しかない芸術品。

しかも背の高さは男性の平均身長を超えず、プライドも損なわない。そんな、女体芸術の完成形が目の前にあつては、どれほど低下した男性機能もたちまち復活するだろう。

「見ているだけで、こんなになつちやっただけですか？」

ベッドの上、ボクサーパンツを力強く突き上げる逸物を、艶っぽい眼差しで見つめられる。気恥ずかしくなり慌てて陰部を両の手で被うと、女性は顔を上げて微笑んだ。

頭の中を覗きこんでいるかのような様なまっすぐ突き抜ける視線。動揺して目を泳がせてしまふと、こちらの余裕のなさを楽しんでいるかのように、女性は目を綻ばせた。

「ちゃんと、私を見てくださいね？」

勿論見たい、見たいのだが、目の前でしっかりと行動を観察されながら視姦をするのは、中々に酷なのではないだろうか。

先までの遠くから眺めていた時とは感覚が違い、対面すると注視できなくなってしまう。それ程に、対峙しているだけで物凄い緊張感が走る。

「見返されていると思うと遠慮しちゃいますよね、少しの間目を閉じていますからゆっくりと視姦してくださいね」

そう言つて女性が両目を伏せると、先までの慌てぶりは何処へやらという位に、すぐに唇に目がいった。

ふるふるしていて、歯を立てれば弾けてしまいそうな瑞々しい果肉の様だ。唇を合わせるだけで射精できるのではという位に、脳が触れたいと頭の中で叫んでいる。

自然と、自分の左手がパンツの上から男性器を擦り上げ始めた。

それだけの価値がある極上のおかずが眼前にある。身体が動かない方が健常でないと見えるほどに、性欲を刺激する強烈な魔力が溢れている。

口元に吸い込まれそうになるのを抑え視線を下ろすと、先ほどまでたわみ揺れていた、齧つた者を生涯虜にしてしまいそうな悪魔の果実があつた。

視界に入った途端、喉がゴクリと大きな音を鳴らす。

微かな身体の震えでさえ、胸をゆつたりと揺らしてしまう程に大きい。それほどまでに、大きな肉房が胸板に堂々とぶら下がっている。

白のブラジャーが天使を想起させるとすれば、それに包まれた彼女の豊乳は悪魔を彷彿とさせる。肥大化した魔の化身が清純な天使の皮を食い破らんとし、墮天使として人間を欲の下僕に墮とそうとしてくる。

視線を感じたのか、女性がお腹の前で指を組み、胸を寄せる様に下に腕を伸ばした。

ぐにやぐにやと、二つのゼリーがグラスの中でお互いを押し合う様に、深く刻まれた谷間の筋が波線状になり何度も波打った。

ブラのカップから溢れ落ちそうになるほどに上乳が盛り上がり、光を反射するソレはきめ細かな白肌を備えている。さながら巨大な大福の様で、頬張れば口いっぱい甘さが広がりそうな気がした。

生唾がどんどん口内に溜まっていく。喉がカラカラになって、目の前のおっぱいに吸い付きたいという人間の口唇期的欲望が、思考を停止させて身体を前に前にと動かす。いつの間にか自分の左手が男根の先端部を指で弄り始め、後少しのところでパンツをずり下ろし直にしがいてしまいそうになっていた。

「はいっ、もう慣れましたか？あなたの視線を感じてしまって、ちょっとドキドキしちゃいました……」

自慰を見られる寸前で、弄る手を止めて股間を両の手で隠す様に構える。

急な開眼に心臓がドクドクしているのはこちらの方だ。

脳内で先ほどの彼女の言葉が反芻する。

実際のところ、ドキドキなどしていないだろうと邪推してしまうが、女性が少しだけ顔を赤らめてもじもと肩を振った結果、低かった信用度もくると掌を返した。

その幼い少女の様な仕草と、さっきまでの妖艶な雰囲気とが混ざり合い、危険なアンバランスさを醸し出して男心を上手に操り続けていく。

挙動の一部始終を見て、身体の一部がこれでもかという位に硬度を増した。

余裕なく周りを見渡していると、細く綺麗な指が、なおも膨張し続けている男根にゆっくりと近づいてくる。首を傾げながら、可憐な乙女の様な初心な表情を向ける彼女。

「——さわってもいいですか？」

そんないやらしい要求を言葉にしているのに、痴女の様に開けっぴろげた様相はなく、処女の様な初々しさの中から、滲み出る色気が微かに渦巻いている。

一瞬身体が強張ってフリーズしかけるが、二度、三度と顎を引き無様に頷く。

元より、拒否するという考えが浮かぶ筈もなく、どのような問いに対しても無抵抗に受容してしまいそうな危険な隷属感があった。

口をパクパクさせながら、これから自分がされるであろう事に大きな期待を抱く。

か細い指で包まれたら、上下に擦りあげられたら、あの大きな胸を押し付けられたら、唇や舌を絡ませたら、そんな煩惱が何十も浮かび、ぼうっと呆けてしまった。

挙動不審なこちらに気がついたのか、女性の目元が慈しみを湛え優しい表情になる。

さわさわと、下から上に軽く持ち上げる様に、彼女の指が下着の上をなぞった。

「すっごく硬くなってますね……」

触られた瞬間、びくんっと体が跳ねた。

ペニスの上を指で円を描く様に擦ったり、柔らかく摘む様に持ち上げたり。

もどかしいソフトタッチでも、じつじつと快感を与えてくる。

「おっぱいが気になりますか？」

肌蹴たブラウスから覗く胸元を凝視していたことがバレていたらしい。

彼女の纏う『童貞を殺す服』と、それを張り裂かんとする大きさのバスト。

それらが組み合わせあって産み出された異様なアンバランスさが、倒錯的な魅力になって否が応でも視線を釘付けにする。

しかし、そんな邪な視線を嫌がる素振りもせず、煽るように胸をぎゅっぎゅっと寄せたり、左右にふるんふるんと揺れる様に動かしてきた。

「触りたいんですよね」

またしても、喉が大きく鳴った。

目の前にいる彼女にも聞こえるほどに、口の中に湧き上がった唾液を飲み下す。

本能が虚勢を張らせる事を許さず、またしても壊れた人形のように首をカクカクと前後に振った。

「いいですよ」

両腕が掴まれ、自分の意志とは無関係に胸元まで引つ張られて、両手にやさしく添わせてくる。瞬間的に、幸福中枢が壊れるかという程の脳内物質が溢れ出た。

その感触は、今まで触れたことのないモッチリ感と、ふわふわしたマシユマロの様な柔らかさを感じさせ、あまりの気持ちよさに掌が異常な量の汗を掻きながら震え始めた。

「うん……駄目ですよ、そんなに強く握ったら、優しく、ね？」

力強く触った覚えは無かったのだが、どうやら知らず知らずの内に力が入ってしまったていたらしい。慌てて、あてがわれた掌に合わせて指を動かす。

「んっ……そう、その調子です……」——女性の身体が、急に耳元に近づいた。

それだけで、ぞわりと全身の肌が粟立つのを感じる。止まっていた呼吸が再起し、次第に早くなり、心臓もそれに合わせる様に鼓動を段々と早く打ち始める。

女性の呼吸が耳元を擦り、たまに子供の悪戯の様に口をすぼめて耳に息を送り込んでくる。擦ったそうに身体を振ると、それを見て嬉しそうに頬を緩めた。そして、

「なまでおっぱいさわってみますか？」

びくんっ、と身体が跳ねた。

耳元でなんて事を囁くんだこの人は、こんな事を何度もされたら心臓が持たない。

魅惑的な言葉が鼓膜を打つ度に、クラクラと脳が揺れて世界が振動する。

一旦手を下ろし、女性はブラジャーのホックに手を掛け、ゆっくり一つ、二つと外していく。

男心を相当に熟知しているのか、外さないで乳首が見えない様に当てがった。

ブラジャーに押し上げられた北半球が、実に見事なラインを描いている。

視線が胸部に吸い寄せられ、瞬き、呼吸すらも忘れて没入せざるを得ない。

「ほら、はやく?」

ブラが胸から滑り落ちて綺麗な乳首が晒され、煽るようにゆさゆさと乳房を左右交互に揺らす。白肌と桃色のコントラストが網膜にこれでもかと焼き付けられる。

言われた通りに、それでも葛藤しつつもツンと指で弾くように触れた。

先の、ブラジャーの上から触った時とは違い、乳房が指に吸い付くようにまったりとした触感を与え、更にもう一度突くとグニグニと指を包むように変形した。

今まで女性とそういう関係になった事が一度だけあったが、その時はテンパりにテンパって曖昧にしか記憶に残っていなかった。しかし、今は少々舞い上がりながらも、脳に直接ガリガリとフオークで引っ搔かれる様な感覚がある。

何度も、プリンをスプーンで突くように、人差し指を立てて胸に埋めるように押し込んでいく。

「ふふっ、なんだか子供っぽい触り方でかわいいです」

そんな、消極的なボディタッチも優しく受け止めてくれる女性は、掌を上から重ねてそのままぐにゅぐにゅと胸を深く揉み込ませた。

勿論、プニプニとした乳頭部が掌に触れており、柔らかさの中にあるその硬さが、『生乳を揉んでいる』という事実を意識にハッキリと植え付けてくる。

「優しく触られるのもいいですけど、もっと乱暴にしてもいいんですよ?」

悦を感じながらも笑顔を作る彼女は手を自分の背中に回し、貴方のご自由にどうぞと言わんばかりに胸を強調してきた。勿論、左右に小刻みに揺らすのも忘れていない。

あからさまな挑発をされて、今まで受け身だったメンタリティが一気にサディスティックに変化し、欲望のままに力を込めると指と指の間に乳房がみっちり溢れた。

しかし、掌を凌駕する大きさの乳房はこちらの攻撃をもともしない。柔軟に形を変えて、すべての力を受け止め霧散させる。

「……そんなにいっぱい触られると、ここが切なくなっちゃいます……」

そう言って彼女は、親指と人差し指を使って乳輪付近の肉を丸く摘み上げた。

ここに向かって口を差し出してくださいと言わんばかりに、寄せられた桃色の乳頭は吸い付いて欲しそうにヒクヒクと痙攣していた。

誰もが舌舐めずりをするであろう、艶々とした肉蕾を前に口の中が唾液で溢れかえる。舌先で先端を突くように刺激したい、乳輪をねちっこく舐め回すのもいい。

乳飲み子のように欲望のままに吸い付き、彼女が快感によがり嬌声をあげるのを聞いたら、どれほどの愉悦を味わえるのだろうか。

「さあ、どうぞ存分に味わってください……」

唇が開き、舌が伸び、首を傾け、接吻をするように先端部に口をつける。

口に含んだ瞬間、舌先に違和感を与える程の不味が一気に駆け巡った――、

「だあああああああああああああああああああああつ」

夢見心地から一気に興奮めし、頭部を覆うモノを剥ぎ取りベッドの上に叩きつけた。

《VR・ヴァーチャルリアリティ》、視野を全て覆い、特別なカメラを用いて撮影した映像を視界全てに映し出す事によって作り出される、仮想空間。

偽りの世界で、理想の女性とエッチな事ができるといふ夢のVRマシン。

中々の支払いをして手に入れたシステムで、今頃は楽園にいる予定だった。

しかし、挑戦した結果は見るも無惨で、早速その幻想を打ち砕かれたところだ。

股間への手を使った接触は、なんとか自分の指を意識から切り離す事で擬似的な快感に繋げることに成功した。だが、さすがに存在しないおっぱいを揉むことは不可能だ。

一瞬、自分の胸を揉んで誤魔化すことも考えたが、体型が痩せている為に却下。

そこで、おっぱい型のジョークグッズをかうという選択をしたのだが、舌で触れる際のデメリットを考えていなかった……、VR映像自体は素晴らしいものだったが。

ただ、最新技術で作り上げられた叡智の結晶体は、そこそこリアルな感触ではあった。

目が覚めた時に、膨大な自責の念が心を押し潰した事は言うまでもない。

「それにしても、鏡子さん、可愛かったなあ……」

超人気AV女優『杏奈鏡子』あんなきょうこ。先ほどまで、目の前に映し出されていた幻であり、平々な人生を送る唯野優司ただのゆうじの、たった一人の想い人だ。

AV女優に想いを馳せるといふのも、夢のない話ではある。

しかし、本気で杏奈鏡子という、言わば一流の芸能人に出会う為の努力だけは積み重ねてきたつもりだった。（犯罪紛いな事を除いて）

一流芸能人になるといふ選択肢は、自分の才能とビジュアルを加味して予め削除。

簡単な話、AV女優になればいいのだが、それが中々上手くはいかなかった。

生まれつき体力がなかった事も理由の一つにあがるが、演技の経験がない事や、性的持久力が高いわけでもなく、男根も滅茶苦茶大きいという訳でもない、THE普通。

男優として生きる為の素質がない事は元より、面接は全て失敗。

最後の望みの綱であった、素人物AVの募集も抽選で落ちた。

神が、男優にはなるなと言っているのしか思えないほどに見放されている。

そうして、最後に辿り着いたのが『VRAV』、それでさえ夢を叶える事はなかった。（……もうこれ以上打っ手が無いぞ）

溜息を零しながら、小綺麗なフォトフレームに仕舞われた一枚の写真に視線を送る。

実は、一度だけ彼女に会った事がある。

それはショッピングイベントでの握手会。

彼女のイベントは今ままで一度しか行われた事がない為、それが最初で最後。

今でもその時の記憶は鮮明に思い出す事ができる。

それは、『デビュー作の発売日』を飾る催しとして執り行われた。

大学に入ったばかりの頃に遡る——、近所にビデオレンタル屋がある事を知った

俺は、それまで律儀に遠ざけてきたAVの世界にゆっくりと浸かり始める。

当初は、有名所は全て押さえるほどの雑食っぷりで、一時期はデビュー作位なら暗唱できるくらいには、アダルトビデオの世界にどっぷりと全身で飛び込んでいた。

そんな大量にあった作品の中で、物凄い運命を感じさせる作品を偶然見つけた。

『杏奈鏡子、デビュー』

今の彼女より少しだけ幼げに感じる容姿。最近では美麗な赤茶色に染まっている髪も当時はまだ黒く、純粹さと危うさを併せ持った、不思議な雰囲気醸し出す美貌。

しかし、美しい容姿だったからというだけでは、そこまで運命的な物を感じる事はなかったかも知れない。

杏奈鏡子は、高校生の頃に恋をしていた同じ高校の先輩によく似ていた。

高校時代、卒業式の日に仲が良かったというだけで性行為に及んでしまった、淡くて心が苦しくなるそんな関係の女性。その日以降、連絡を取る事も憚られた異質な交わり。

当時は、慌てて周囲の知人に確認をとった位で、もう結婚して子供もいるという話を聞いて、ガツカリした様な安心した様な、妙な感慨に浸ったのをよく覚えている。

憧れの先輩がAVに出ている《実際には違うのだが》様に見える。それは、普通の女優達とは一線を画する興奮を俺に与え、その時の快感は今でも思い出す程だ。

話は戻りイベント当日、少し大きめのアダルト系書店で行われたイベントは、日頃閑散としている筈の店内とは違いほぼ満員で、整理券を貰う長蛇の列が形成されていた。

何とか券を確保し握手会の開始を待っていると、イベント慣れしていそうな書店のスタッフと、本日の目当てであった杏奈鏡子がスタッフルームから登場した。

主賓が現れた瞬間、静まり帰っていた店内が活気と驚きで満ち溢れる。

多数の大柄の男性が視界を遮っているせいで、隙間から少しだけしか見えなかったが、間違いなくそこに彼女がいるのだと分かった。

マイクテストをして、スタッフが咳払いをするとざわついていた会場が静まり返る。

『今日は、お忙しい中お集まり頂き誠にありがとうございます。私の話はここまでとさせていただきます。』

いよつ、という景気のいい掛け声上がり疎らに拍手が打たれると、袖で控えていた彼女がゆっくりと壇上を登り、ようやく顔だけしっかりと見る事ができた。

マイクを手渡されて、少しだけ戸惑いながらも杏奈鏡子は話し始める。

『皆さま、本日は私のデビュー作の発売日イベントに集まって頂き、本当にありがとうございます。整理券が手に入らなかった方も、よろしければご購入お願いしますね』

あまりの可憐さに、声を聞いている間呼吸するのを忘れてしまった。

挨拶が終わりお辞儀をすると、店内が沢山の拍手の音で包まれる。

今まで、紙や映像という媒体を通してしか見た事がなかった、芸能人の様な存在が目の前にいるという事も、高まり続ける高揚感を後押ししていた。

一言で言えば、『理想の女性』がそこにいる。

可愛らしさと清潔さを兼ね備えた、アダルトビデオに出演しているとは全く想像できない、まるで売れっ子若手女優の様な淫刺とした空気を持っていた。

事前にアップされたサンプル映像で彼女の痴態を見ている筈なのに、その女性と一致しない位にはイメージとかけ離れている。

それ程までに、穢れを知らない無垢のままの杏奈鏡子がいた。

勿論、そんな奇跡の結晶体、全男性のアイドルとなった彼女はデビュー前から騒がれており、今回のイベントも無名でありながら大所帯のファンを集めた。

会場にいる全員が下心を持っていたにも関わらず、彼女の透き通った目に見つめられた瞬間に、下卑た視線を送っていた人達は無邪気な子供の様にはしゃぎ始める。

整理番号順に呼ばれ列を形成していく。

割と最後の方だった俺は、あまり焦ることがなく、時間潰しに整理券に書かれた握手会の手順についての説明を読むことにした。

その握手会は、購入した枚数が増える毎に特典が増えるタイプのもので、一枚で握手、三枚で写真、五枚でコスプレ撮影会参加と、最終的にかなり豪華になる。

できれば五枚といきたい所ではあったが、まだアルバイトも始めていない時分だったので、そこは諦め、しかし少しだけ贅沢をして写真を撮らせて貰う事にした。

コスプレ撮影会、言葉の響きだけでもとても淫猥な想像が捗る。しかし、今しがた目にした杏奈鏡子の清らかな姿を見て、なぜか申し訳なく思ってしまう気もした。

列が進み自分の番が近づくにつれ、心拍数が上がり身体中がぶるぶると震え出した。今から会うのは、ただの初めて会う女性ではない。

運命を感じさせ、自分をここまで導いた人。

平凡な人生を送りながら、変化を期待して入った大学でも広がらなかった世界。そんな閉塞した現状に、新しい風を呼び込んでくれそうな人。

次が自分というタイミングになってようやく震えが止まる。一安心していると、間仕切りで閉ざされた空間に通された。外に警備の人間はいるが二人きりの様な対面になり、何か話そうと思うが、緊張して言葉が中々出てこない。

どぎまぎして、口をぴくぴく動かしながら、頭をぐるぐると回し思考して――、

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

『買ってくださって、ありがとうございます!』

満面の笑顔を讀えた彼女は、女の子らしい柔らかな両の手で包み込む様に握手をし、可愛らしく丁寧な口調で話した。

緊張してガチガチだった身体中の筋肉が、その瞬間だけ少し緩んだ気がする。

やはり先輩とは別人なのだという感情が浮かんで、しかしすぐに目の前の女性の圧倒的な魅力にそんな雑念は吹き飛ばされた。

『三枚ご購入ですね、一緒に撮りますか?それとも、私を撮りますか?』

一緒に写真に写るという選択は考えてもいなかったが、自分が写っていない方が部屋に飾りやすい様な気がして、一緒に撮るのは諦める事にした。

『えっと、どんなポーズにしましょうか』

ぱっと浮かばなかったが、笑顔の彼女がとても魅力的に見えたので、自然体のままでもお願いしようと伝えた。

『はい、では合図をお願いします』

パラロイドカメラを手渡され、ファインダーを覗くと先程よりも輝く様な笑顔を浮かべる彼女がいた。カメラを向けられる事で、女優としての顔が表に出てきた様な感覚。

その眩い煌めきを真っ正面から受け止めた瞬間、シャッターを押すだけのそんな軽挙が終わるまで、時が止まったかのように感じるほどに惚けてしまっていた。



思い返せば、杏奈鏡子のこれからの活動を見通させる様なオーラを感じさせたひと時。その後、彼女はその予想を裏切ることなく、すぐにスターへの道を歩み始めた。

一本のホームビデオを見返す様に、何度でもその記憶は思い出す事ができる。

それほどに、その時間は人生の中で大切なひと時として刻まれていた。

棚から一本のDVDパッケージを取り出し、じつと表紙を見つめる。

当たり前だがあの時のままの彼女が、にっこりと恥じらう様に笑っていた。

そんなきっかけで俺はこの作品と出会い、サンプルの状態から何度もおかずにする。

そして、握手会のおかげというべきか、より一層感慨深いものになった。

いつの間にか、初恋が上書きされる程には彼女に魅了されていたのだ。

ファンとして応援をしていく日々は、それまで何かに夢中になった事がなかったからか、とても充実したものになる。

ただ、仕方のない事だが、それからの生活は追いかけるだけの日々が続いた。

作品が売り出される度に購入し、一線で支え続けていこうと決意していた。しかし、デビュー作を本人から受け取ったあの瞬間を超えるものはなく、胸の中の炎が小さくなってきているのを感じ、ゆつくりと年月が過ぎていく。

(もう、二度と会う事はできないのかな……)

『絶対にまた会いたい』という決意があったのはいつまでだろう。

最近ではそんな思いもゆつくりと小さく弱くなっていった。

あの時、手を握りあってからずっと、眩しいほどの笑顔を見てから今まで、次に会った時に伝えたいと思っていた言葉が、一語一語、消えていく、失われていく。

——カチカチ

集中力が完全に切れてオナニーどころではなくなってしまい、服を着直してVRプログラムを終了させる。仕事を終えて最速で帰宅し、夕飯を食べるのも後回しにして視聴していたので、見終えた瞬間に疲労感がどっと溢れた。

画面に映し出された、衣装を半脱ぎの状態でこちらに向かって口づけをする杏奈鏡子の姿が掻き消える。

普通のAVとしては間違いなく名作だと思うが、VRという期待が大きすぎた。

柔らかな唇や胸、何度触れて見たいと思ったか分からない、美しい艶姿。

AV女優とエッチがしたいという考えは、男なら当然一度は浮かべるものであるし、それを実際に叶える企画モノ(真偽はわからないが)は存在し、さらにVRもそれに続いた。

しかし、そういう憧れは歳を重ねる毎に消失していくものだし、現実を見て風俗で対価に見合った女性との接触で満足するものだと思う。

それでも俺は、どうしても諦める事ができずにいるのだった。

もし偶然会えたとして、言葉を交わす事以外に何ができるといふ訳でもないのに。思考がひと段落し、溜息をつく。

今まで、その想いを成就させんと邁進してきたが、それに縛られる事が果たして正しかったのか、少しずつ自信が持てなくなっていた。

ただの憧れが、いつの間にか生きる目的に摩り替わっていく感覚。そのゆっくりとした変化が今思い返すと恐ろしい。

自分にはそれしかない、盲目的に、闇雲に人生を歩いてきてしまっているのではないかと、これまでの道のりを疑ってしまっている。

(——もしかしたら、これはいい機会なのかも知れない)

杏奈鏡子の追っかけとして生きてきた自分に区切りをつけるチャンス。

(新しい人生を始める……、べきなんだろうなあ……)

——ピピピピッ

スマートフォンがメールの着信を知らせる。

内容の確認は後回しにして、この転機に何かをしなければと思う。

彼女への未練、それが今の自分に踏ん切りを付けさせてくれないのは確かだ。

だとしたら、今所持しているコレクションを全て捨てれば、その思いを抹消する事ができるだろうか。

綺麗に陳列した、杏奈鏡子の作品達を見る。

そんなの、捨てられる訳がない。一つ一つに思いが籠っているし、彼女が努力し、輝いた時間の結晶をゴミとして扱う事など、今の自分にはできるわけがなかった。

——ピピピピッ

メールが二件続いたので、さすがに何らかの連絡の様な気がしてくる。

スマートフォンを手に取り、片手ですいすいと操作した。

メールフォルダの一番上、気になる件名が目に入りタップをすると、それは、『杏奈鏡子を愛する会』、ファンクラブの会報だった。

現在進行形で未練を断ち切ろうとしている女性の、それも今となっては少しだけ恥ずかしく感じるグループ名に、落ちていたテンションが更にぐっと下がる。

いや、ファンクラブも抜ける可能性があるし、丁度良かったのかも知れない。

最近では苦手な人が増えてきた事もあり、あまり参加もしていなかった。

嫌な記憶と一緒に蘇ってきたせいで、気分がドン底まで落ち込む。

仕方なく文章を流し読んでみると、どうやらオフで飲み会をするらしい。

居酒屋、座敷、コース、様々な情報に目を通していく、何ら変哲のない普通の飲み会

……、今回も不参加でいいか——、と思っていると——、

最後の文章に、心臓を強く打つ言葉の羅列が存在した。

【杏奈鏡子に会えるかも!!】

という、一文が目釘付けにし、心臓を強く刺した。

「嘘、だろ!!」

思わず、口から声が飛び出る。

詳細を確かめようと慌ててメールを読み直すも、特にその事について触れられている文章は存在せず、その一文だけ後から付け足された様な浮き具合だった。

寸前まで諦め掛けていた事が、急に目の前に転がり込む事態となり頭が混乱する。

しかし、冷静になって考えてみればそう簡単なことではない。

デビューしたての頃ならまだしも、超一流の女優にまで成長した彼女を、ただのファンクラブが果たして呼べるのだろうか。

いや、『呼ぶ』とは書いていないから、何か別の方法があるというのか。

まず、情報の真偽が定かではないし、言ってしまったえばガセの可能性が極めて高い。

それでも、その文字の並びは穏やかに刻んでいた心拍を激しく小刻みに変調させる。

頭に濃度の高い情報がぶち込まれたせいで、脳が痛み、くらくらと揺れていた。

落ち着いて、少し整理しよう。

まず、杏奈鏡子のファンを辞め、ファンクラブを抜けるのか。

次に、飲み会に参加して、不確かな情報を信じるのか。

そして――、彼女に会うという夢を諦めるのか。

彼女と出会ってから今までの自分が嫌いではないが、違和感を感じている。

彼女を好きになった事を後悔したことはないが、満たされない感情がある。

何かを変えないと、何か行動しないといけない予感があった。

多分、これは最後のチャンスなんだと思う。

もし、彼女に会う事ができるなら、そんな可能性のない賭けに乗ってみてもいいのか

も知れない。例え会えなくても、それで未練は断ち切れる筈だ。

PCを起動し、メール画面を開く。

少しだけ文面を悩みながらも、書き始めるとすらすらと文章が流れ始めた。

そうして一気に書き終わり、送信し、ため息を吐く。

正直、無駄骨に終わる未来が見えているが、それでいい。

（もう少しだけ追いかけてさせてもらってもいいですか？鏡子さん）

初夏の爽やかな風が部屋を通り抜ける。

もやもやしていた心が、スツキリと晴れてくるのを感じた。

明日、明後日仕事をして、土曜日にはオフ会が開かれる。

それまでに少しでも服装を着飾ろうと、通販サイトで洋服を漁る事にした。

第一章「異変」

運命の日はすぐに訪れた。

鏡を確認すると、青色のシャツを羽織り、黒色のスキニーパンツを履いた自分がいる。気合いを入れてお洒落をした事のない人間の、最大限の努力。

しかし、何度見直してもいつもの自分でしかない事に愕然とする。

清潔感だけは保とうと、歯は十二分に磨き、朝シャワーで汚れを落とし、爪を切り、鼻毛を抜き、ヒゲを剃った。これからデートにでも行くのかという気の入れ様だ。

飲み会の時間までは友人と喫茶店で過ごす事になっていた。

自転車で駅に向かい、仕事では使わない電車に乗り込む。

扉窓に映る姿を見て、ガセネタを思い切り信じている自分が少しだけ微笑ましかった。少年の頃の様なワクワクが止まらない感覚。ずっと、静かに心が高鳴っている。

喫茶店には少しだけ早めに着いてしまったが、外は身体に厳しい暑さで、『先に入っている』とメールをして店に入った。

冷房の効いた店内で頼んだアイスコーヒーをちびちびと啜っていると、友人の田中が手を上げて現れた。

「あつついなあ、今日は……」

財布でパタパタと顔を扇ぎながら、笑みを湛えてどかっと前の席に座った。

長身痩躯のイケメン、服装は可もなく不可もなくという感じのラフなスタイル。

それでも、気合いが空回りして一周したファッション（笑）よりは決まっていた。

「唯野久しぶりだなあ。最近オフも来てなかったみたいだし、一年ぶり位か？」

「田中久しぶり。大体その位かなー、何せ仕事が忙しくてさ」

実際は予定が埋まっただけで行けなかったのではないが、説明が面倒で誤魔化した。

田中は小学校の頃からの親友で、高校卒業後一度疎遠になったのだが、『杏奈鏡子を愛する会』でまさかの再会を果たすという、妙な縁がある男。

慣れ親しんだ友人が所属した事もあり、ファンクラブでの居心地が以前よりも良くなったのだが、少しだけ素を曝け出すのが恥ずかしくなった。

そして、『杏奈鏡子の素人物作品』に参加したという人物が現れ、壮大な自慢話を聞かされた時に、あまり楽しさを感じなくなってしまった。

周りの人達は自分が体験したかの様に喜んで聞いていたが、俺はそんな気持ちになれず、何故自分がそこにいなかったのだらうと心底嘆き、嫉妬心が一気に爆発した。

その記憶が呼び起こされる度に、オフ会に参加しようという気持ち擦り減る。

ただ、それでも田中とは杏奈鏡子の最新情報が公開される度にSNSで会話をしたり、新しい作品の品評をし合ったりなど、ずっと交流を続けていた。

「それにしても、あれ、本当だと思うか？」

「半信半疑と言いたい所だけど、十中八九ガセだと思う、俺は」

「俺も。そう簡単に会えてたまるかってんだよなあ……」

「会えないと思っっている二人が、これからそのオフに参加するという可笑しな矛盾。

この様子だと、今回のオフ会は全員が参加していてもおかしくはない。

「そう言えば唯野、最近出た鏡子さんのVR作品見たか？」

「見た見た、でもやっぱりVRでも本物の鏡子さんには叶わないかなーって」

「出た、本物に会った自慢……、俺もデビューから知ってさえいれば」

後発ファンである田中に対してのいつもの切り返し。

悔しそうな田中の表情を見ると、少しだけ優越感に浸れるのは性格が悪いだろうか。

「VR作品つてもそうだけど、最近まじで男優との絡みがないなー、鏡子さん」

「もしかしたら、あの噂は本当なのかもな」

杏奈鏡子について、この界限で密かに囁かれている話題がある。

それは、杏奈鏡子のAV女優引退疑惑だ。

男優との絡みがある作品の減少、レズジャンル作品の増加、バラエティ番組の出演。

意図的に、そういう路線を通っていると思われるも仕方がない変化。事務所の売り方

が変わったという事なのだろうと、その疑惑を否定気味に見てはいるが。

「でもまあ、男優に嫉妬するよりは、今の方がいいかも？」

「唯野の嫉妬は普通のファンの比じゃないからなあ……」

「その言い方だと、俺が異常者みたいだな」

いつもの様に、田中と杏奈鏡子についての雑談をしながらコーヒーを飲む。

趣味の合う人間と楽しく話していると時が早く経つもので、いつの間にか飲み会の集

合時間まであと三十分というところだった。

「もうそろそろ出ようか、さすがにコーヒーだけで長時間居座りすぎだ」

「まじか、外あつつそうだぞお……ギリギリまでいようぜ……」

確かに、夕方になったからと言って暑さが簡単に和らぐ事はなく、ガラス越しに見え

る歩行者達は手で顔を仰ぎ、ハンカチで汗を拭いながら歩いていた。

その人混みの中に一人恰幅のいい男性が見えた。赤のポロシャツに黒のハーフパンツ

を身に付け、暑そうな素振りを見せず一人誰かを待つ様に佇んでいる。

「あ、あれ会長だ、久しぶりだし先に挨拶しておきたいな」

最近顔を見ていなかったが、以前と変わりなく元気そうで安心した。

「へいへい、いきなり飲み会で顔を合わせるのもバツが悪いだろうし、行きますか」

「田中、悪いね」

会計を済ませ扉を開けると、日が落ちかけても尚むせ返る様な熱気が満ちていた。

会長とは最初の握手会で知り合った。

元々AV女優が好きで活動的に色々なイベントに参加していて、杏奈鏡子に出会ってから一筋になったという経歴の持ち主。

人の良さ与人脈の広さで会員からの人望は厚く、杏奈鏡子の活動の最新情報を常に拡散し続け、新作の購入枚数は確定二桁と、まさしくフアンの鏡だ。

ファンクラブや、オフ会といった活動に後ろ向きな自分が、当時参加しようと思ったのは、この人がいたからというのが大きい。

嫌な事もあったが、色んな出会いを与えてくれた恩人。田中との再会も、遠回りではあるが会長のお陰と言っても良いかも知れない。

「会長お久しぶりです。唯野です、覚えていらっしゃいますか？」

「ただの君？おー、同志唯野じゃないか、元気にしてたかい？そうか、幹事から来るとは聞いていたが、今思い出したよ」

ハッハッハと豪快に笑い飛ばす大肉大背の男性こそ、「杏奈鏡子を愛する会」の会長だ。

実は、全員が会長と呼んでいるせいで本名は誰も知らないらしい。

HNで参加していたとしても誰も聞いたりはしないし、会長という呼び名が余りにもしつくりくるのでそのまま定着してしまった。

もちろん年齢も不明で、今年五十にはなるのであろうかという中老の男性。

にも関わらず、パワフルでバイタリティ溢れる立ち振る舞い。体型は少々ぼっちゃりとして見えるが、脂肪の下には鍛えられた肉体が関取の如く備えられていそうだ。

「あのメールを読んでしまったのは、不参加という選択肢を取るわけにもいかなかったろう。うんうん、私も情報をよこした同志に慌てて返信をして問い詰めたもんだ、ああ」

深く何度も頷く会長を見て思わず頬が緩んだ。

「あのメールは会長が発信しているんですよね、ということは情報は間違いなかったという事ですか？」

早速真偽を確かめる機会を迎え、すぐさま答え合わせを求めた。

今日のオフ会の本題であり、それ次第で飲み会のテンションが大いに変わるのだ――

――、最悪不参加帰宅もありえる。

「ハッハッハ、相変わらず同志唯野は鏡子様に関しては真っ直ぐだ、なあ同志田中」

「普段は人畜無害そうな顔してるのに、本当に鏡子さんに関しては譲りませんよねえ」
がつつき過ぎてしまっていたのか二人に軽くからかわれる。

確かに、少しだけ必死さが滲み出てしまったかも知れないが、それが目的でここにいる自分としては譲る事ができない部分ではあった。

「まあまあ落ち着きたまえ、同志唯野。今回の件、五分とでも言っておこうか」

会長は手の平を開き前に突き出した。五分というのは五十パーセントの事だろうか。

いきなり不安な数字が現れ面を食らうが、会長の表情から察するにどうやら勝算があつてのことらしい。

俺は自然と訝しむ様な視線を送っていたらしく、会長は困った様に苦笑いをした。

「ほんつとすいません、こいつ鏡子さんの事になるとすぐガチになっちゃうんすよ……」
空気が悪くなったのを察してか、田中がヘラヘラと笑いながら間に入った。以前から

田中は、こういう険悪なムードになった時には率先して場の空気を戻してくれる。

田中は小学校の頃から、場の空気を読むのが上手かったなと思いつ返した。

「いやいいんだよ同志田中、私の説明がわかりにくかったのだろう。そうだな、君達なら話していいかも知れないな」

会長は笑い、何やら思案をした後に口を開いた。

「さつきも話したが、同志の一人がとある情報を入手した。彼によれば、今日私達が飲み会をする会場で、鏡子様の出演する作品の顔合わせ兼前打ちが行われるという事だ」
顔合わせ、前打ち、具体的な単語が出てきた。しかし、その飲み会の情報を流すことは違法とまではいかないが、あまり良くない事だとも思う。

与えられた情報を整理する。もし打ち上げをするとしたら個室やワンフロアを貸し切つて、一般人の目に触れる事はない様に取り計らう筈だ。

それならば、部屋に入るまでの数秒間は杏奈鏡子を見る事ができる。

これがメールに書いてあった『杏奈鏡子に会う』方法か。

「わかりました、俺達は何も知らない一般人として先に居座り、入り口から現れる鏡子さん達に——一応、会う事ができるって事でしょ？」

誰にも迷惑をかけず、自分たちを満足させる事ができる方法、少しでも非合法的な気もするが、そこに苦言を呈しても誰も得をしないので黙るのが得策か。

「理解が早くて助かるよ同志唯野、それが五分という言葉の真意だ」

「なに二人して頭のいい会話してんのさ、俺も混ぜてくださいよお」

一人だけ何もわかっていない様子の田中が喚いたが、そこまで大した話ではない。

「まあ、簡単に言うのと踊らされたって事かな？」

「同志唯野、その言い方はあんまりじゃないか。ハッハッハッ、確かに書き方に悪意があったのは認めよう、だがこの折角の機会を同志達と分かち合いたかったのだよ」

必ず会えるとは言っていないし、決して会えないというわけでもない。

元々、百パーセント信じていたわけでもないのだし、会長を責めるというのも筋違いではある。まあ、それでもしてやられた感じがしないでもないが。

「よくわからないんだけど、会えるんだよね？」

「会える、と言えば会える……ね、会長？」

困り顔をより一層深めた会長を見て笑っていると、釣られて田中も笑い出した。

暑さを忘れて談笑していると、いつの間にか待ち合わせ場所には十数人の人だけだかりができていた。

多分、「杏菜鏡子を愛する会」の面々だろう、見覚えのある顔も何人かいる。

「もうそろそろ集合時間のようだ。さあさ二人とも、まずは飲み会を楽しもうじゃないか、酒を飲み、飯を食らい、たっぷりと語り合おうではないか、ガツハツハ」

会長にぐいぐちと力強く背中を押されつつ（この人やっぱりスポーツか何かやってるだろ）、通りを行き交う大勢の人波を掻き分けていく。

流れに身を任せるように肩の力を抜くと、ふと昨日まで抱いていた感情が想起された。区切りをつけようと思っただけで参加したオフ会。

待ち受けていた展開は少しだけずれていて、この後どう答えを出すのか、結論をどうしようか、最後は自分で決断しなければならぬ。

初めて会った時から、これまでずっと会うことができなかった。

そして、これからその日以来の邂逅をすることができるのかも知れない。

もしも出会えたとしても、それで何か決定的な物を得ることはないだろう。

それは生涯手に入らない偶像で、それを追い求める事は身を滅ぼす事と同義だ。

これ以上続けてはいけけないのだと、今更になって理解し始めている自分に呆れる。

神様が、これで終わりにしろと言っている。

——これ以上高望みをするのはやめなさいと。

「今日は目一杯飲もうか」

「唯野、お前酒そんなに強くないだろ」

むしろ、ビール一杯で泥酔できるレベルで弱いけど、そういう問題ではなかった。

「そういう気分なんだよ、田中も付き合ってくれよな？」

「よっしゃ、それじゃあ俺の隣でゲロるのだけはやめてくれよ？」

「いい心構えだ二人とも、それでこそ我らが同志」

会長はガツハツハと声を上げて笑い、二人の肩に腕を回した。

暑さもピークを過ぎたせいかわずらしか少しだけ涼しくなったのだが、熱と汗を纏った腕に首を絞められて一気に体感温度が跳ね上がる。

「会長暑い暑い、やめてやめて」

暑苦しさはあったが、少しも悪い気がしないのは会長の人柄のせいだろうか。

モチベーションが上がったり下がったりと忙しいが、本日の締めであるオフ会は楽しいものになる予感がした。



到着したのは居酒屋のチェーン店、予算もお手軽な飲み放題付きコース料理。参加人数は二十人と、ファンクラブメンバーの大体半数位になるだろうか。

四人掛けの机を五つ繋げて、フロアの八分の一程度を陣取っている。

必ず会えると書いてあれば全員参加待ったなしだったのだろうか、あの書き方では半数位はガセを嫌って参加を避けるだろう。まさに五分。

会長が上座につき、その周りを運営補佐の会員が囲み、それ以外は各々グループごとに纏まるという感じがいつもの席配置。

俺は田中と二人で下座の端に腰を下ろした。お通しが運ばれ、続いて十本ほどビール瓶が机に置かれてので、それぞれがコップに注いでいく。

全員分のビールが準備されて場が落ち着いたのを確認すると、会長は咳払いをした。

「それでは、VR作品への初出演と、今後の彼女の活躍を願って、乾杯！」

「乾杯！二」

会長の音頭に合わせて一斉にビールを煽る面々。杏奈鏡子という名前を出さなかったのは、店員や一般客に聞かれないようにする為の配慮だろう。

定刻通りに始まった飲み会は急なキャンセルも無く、ずらりと席を埋めていた。

焼き鳥を口に運びながら少し全体を見渡してみると、上座に座っている会長や補佐の面々は食事に手を付けないで何やら話し込んでいる。

その他はいつもと同様に、自分の持っている限定グッズなどを自慢しあったり、好きな作品の美点を言い合ったり、最新作の良し悪しを語り合ったりという様相。

勿論、愛が多分に含まれているのは言わずもがな。

そんな慣れ親しんだ光景に胸焼けしつつも、少々の居心地の良さを感じるのは、まだこの場所に親しみを覚えているからだろうか。

「唯野、お前あれだけ言つといて、ビールをちびちび飲んでるだけじゃねーか」

「いやー、やっぱり飲み始めるとそんなに飲めないって身体が訴えて来てさ」

実際にどれだけ頑張ろうが大した量は飲めないもので、やはりいつも通りが一番良い。色々な料理を少しずつ摘みながら、喉が乾かない程度に潤す。

田中が雄弁に語る様に相槌を打ちながら話半分に聞いていると、段々と心の底にある欲望が焦れてきているのがわかった——、早く彼女を間近で見たい。

「鏡子さん、引退しちゃうのかねえ……」

「最近色々な噂が流れてるよな、俺たちが最前線なのにどうなってるんだよ」

「事務所も何考えてんのかわかんねえよなあ、SCVの看板女優だぞ、鏡子さんは」

SCVとは、杏奈鏡子の所属する事務所。

『SEXY&CUTY、VENUS』の頭文字を取ってSCV。もちろん所属女優は揃いも揃って女神の様な美貌を持っており、事務所名に劣らない精鋭揃い。

多数の有名女優を擁しており、実は所属女優の映像作品も製作している、芸能事務所兼、アダルトビデオメーカー『SCV』。

「辞めて欲しくねえなあ……」

大勢が溜息を吐きながら酒を煽る中、それに同意しつつ軟骨の唐揚げを頬張った。

「あの事件位からじゃねーか？ 男優絶頂気絶事件」

「おいッ、あんまり大きい声で言うな——」

大体の話は聞き流していたが、その話題になった途端に耳がしつかりと声を拾おうと意識が集中する。それが、ファンクラブでは特に好まれない話題だったからだ。

簡単に説明するなら、杏奈鏡子の芸歴の中で唯一の傷とも言える事件。

それは、杏奈鏡子作品の一つ『白目を剥くほど気持ちがいい、杏奈鏡子の生セ〇クス』

の作中で、本当に男優が気絶していたのではないか、という心底どうでもいい噂話。

彼女ほどの人気女優になると、一般男性なら一度はレンタルしている位の普及率で、ネットで話題になってしまったのも知名度からの弊害と言えるだろう。

実際に作品を見た人の意見は、『最後の男優だけ気絶の演技が過剰だった』というのが多数。俺もその意見には賛同はせずとも、確かに何かしらの違和感を覚えた。

問題のシーンについて、ネットではかなりの炎上騒動になり、事務所に対する抗議や、男優の安否を証明しろという、野次馬根性の塊の様な声が溢れ返る。

そして、それがきっかけとなって店頭在庫は全て回収され、商品にプレミアな価値が生まれたり、オークションでは物凄い高値で売られるなど（結局は取り下げになったが）、業界とインターネットを駆け巡る騒動となったのだった。

しかし、それも長い間続いたという訳ではなく——、その男優が健康そのもので、後々の作品にも元気に出演しているというオチがついたのだが。

週刊誌などにインタビューと写真記事を載せ、自分の演技が波紋を呼んだことに驚いた等のコメントが飾られると、炎上は一瞬で鎮火する事になる。

ただ、そんな一時のゴシップが、杏奈鏡子の活動の方向性を大きく変えてしまう事になるとは、その時はファンの誰しもが考えなかつただろう。

まさか、男優と絡む作品が一切発売されず、情報さえ出てこなくなるとは。

深夜のバラエティ番組のゲストとして、割とセクシーな衣装で登場した時は心が踊ったが、それが続くとファンの間では『引退』の二文字がチラつく様になった。

久しぶりに発表された作品は今までは一切なかった『レズ』ジャンルで、ようやく現れた新作に喜ぶファンも多かったが、男性の絡みを望む層は離れていく。

VR作品、これは男性向け作品としては優れた価値を発揮したのだが、逆に『男性とはもう絡みません』という意思表示にも見えてしまい、『杏奈鏡子は男嫌いのレズ』などと言う噂も流れるほどに、ネットで荒れる結果になってしまった。

その波紋が広がり、どこもかしこもネガティブな話題で埋め尽くされた。

杏奈鏡子の活動はトップレベルではあるものの、今では業界の異端児としてのポジションに落ち着いてしまっている。それでも俺はファンを辞める事はなかったが。

しかし今となっては、理由は違うが自分も杏奈鏡子のファンを辞めようとしている。そうになると、彼女の今後の活動を支えていくのは誰なんだろうか。

ここにいる面子でさえ、彼女の活動に不安を覚えているし、一般の層は段々と別の女優に乗り換えを始めている。

多分、会長は応援し続けるのだろう。

自分にも、それと同等の熱い想いはある、いやあった。でもそれは、ありもしない見返りに夢中になって、闇雲に走り続けたからこそその結果であり、結末だ。

今では、現実をしつかりと視野に入れて、考えを改めようとしている。

だから、彼らのマイナス思考を理解できるし、プラス思考に至る事ができない。

「みんな景気の悪い話ばかりだなー、鏡子さんのファンとして恥ずかしくないのか」

「言ってるお前も、新しい女優に手を伸ばしてるみたいだけど？」

田中は最近、杏奈鏡子の後輩に当たる『綺利恵』^{きりえ}という新人女優のファンを掛け持ちしている。人気も急上昇していて、杏奈鏡子の後釜との呼び声も高い期待の星だ。

それ自体が悪いと言う訳ではないが、一本気のファンとしては少し歯痒い。

「まあ、唯野にとっての運命の人が鏡子さんなら、俺にとってのそれが綺利恵ちゃんだった、それだけの話よ」

「なるほど、運命の人が被るはずはないからな」

完璧に本命を乗り換えた田中の清々しさにニヤける。

しかし、自分はその本命を諦めてしまっているので心からは笑う事ができなかった。

以前の自分であれば、自信を持って言い切れていたはずなのに、今の自分はそれを言い切る事できない。

その中途半端さに少しだけ嫌気がした。

「何だよ唯野、いつも歯切れが悪いな」

「田中、そこまで察されると親友だとしても、少し気味が悪いんだけど」

さすがにこの場で話す事は憚れたが、またいつか時間があつたら相談してもいいかも知れない。

杏奈鏡子という繋がりが無くなっても、田中とは長く付き合っていきたいと思う。

会が大体一時間過ぎた。

必ず来るとわかっているにしても、俄かに疑いの念が強くなり、高揚していた気持ちが少しずつ冷めてきている事に気が付く。

そして、それは周りの人間も一緒だった。

必ず会えるという言葉を使っていなくても、絶対に会えると思っ
て来ている会員もいたようで、会場の雰囲気が少しずつ悪くなつて来
ていた。

大きな声ではないが、小さいまとまりで愚痴やら文句が飛び交
い始める。

『本当に、メールのアレはガセだったのか……』

『会長も人が悪いよな、あんな言葉釣られるに決まってるじゃ
ん』

『今後、飲み会の参加控えようかな』

会長から直接話を聞いた身としては、もう少し待ってみてはと
言いたくなる。

しかし、歯痒いと言えない約束だ。

次第には、会長の悪口まで言いだす輩が現れ、胃がキリキリと
し始める。

ここにいる全員が、今まで会長提案の催しで楽しませてもらっ
てきた連中だ。

やり方は少し悪かったのかも知れないが、そこまで言わなくて
もいいじゃないか。

（――やはり、ここに来るべきではなかったのかも知れない）

このファンクラブは会長が作った素晴らしい居場所だが、自分
の私腹を肥やしたいだけの自己中心的人間が段々と増えてきた。

そんな人達と美味しく酒が飲めるわけではない。

杏奈鏡子には会いたかったが、代わりに気分が悪くなっては本
末転倒だ。

余り周りの話は聞かないようにして、時間まで適当に過ごし
ていよう。

『会長も、良い年してAV女優の追っかけとか終わってるよな』

張り詰めていた糸が、ブチッ、と千切れる音がした。

自分の好きな人を全身全霊で支えて生きている会長に対して、
何を言った？

俺が怒るべきではないのはわかっているが、これ以上言われるの
は見逃せない。

身を乗り出し今にも食ってかかろうとする――、

「唯野、気持ちわかるけど今会長の肩を持つても仕方ないぞ」

田中が、肩を掴んで浮きかけていた腰を下ろさせた。

相変わらず、人の事を良く見ているし、喧嘩が起ころる前に
止めるのも上手い。

「こいつらの気持ちが分からないわけでもねえよ、会長の事を
悪く言うのは許せんが」

そう言うと、田中は「ちよっとお前ら」と、小声で周りの人
間を集めた。

「大きい声じゃ言えねえがな、実は今、鏡子さんはこの会場
に向かっているんだよ」

小さい声だが、わずかな歓声が上がる。しいーっと、田中は
指を立てて黙らせる。

『おい、ホラじゃねえだろうな』

『それにしても、会長からなんの情報もないぞ』――その時、

「団体様のご来店です、いらっしやいませ〜！」

『いらっしやいませ〜！』

威勢のいい声と共に、ぞろぞろと大勢の人が店内に雪崩れ込
んでくる。

杏奈鏡子と、その関係者達が現れたのだ。

余りにも大所帯なせいで足音と布ずれの音が店内に響き渡り、店中の客が揃って入り口からの通路に目を向けた。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

あの中に、鏡子さんが、本物の鏡子さんが、あの日以来ずっと思い続けて、叶わなかった、その姿が――、あった。

『お、おい、あれ、まさか』

会員の一人が堪え切れずに小さく言葉を漏らした。

その場にいる会員、全員の心の声がシンクロしただろう。

――ああ、変わらないな。変わらない、本当に、あの時と一緒にだ。

服装は、作品で着る様な男ウケを狙った際どいものではなく、落ち着いた色のサマーセーターとミニスカート、全体的に大人しい印象を受ける。

変装用なのか野球帽を被り、メガネを掛けていて、髪型はロングヘアを結ってポニーテールにしていた。

隣にいる女性と話しながら、ゆっくりと店の奥に向かっていく。

変装していても隠しきれないオーラが、店内中の男女の視線を引き寄せている。

他の客は芸能人か何かだと思っっているのだろうか。

ちらり、こちらに一瞬顔が向いた瞬間に思わず会員達が歓声を溢れさせた。

周りの客は、飲み会の盛り上がりによる騒がしさと捉えただろう。

その唝りが、単なる自己満足の高揚であると気づくはずはなかった。

ファンクラブのメンバーが、揃いも揃ってその女性が現れるのを待っていたのだから、それだけの声が漏れるのも仕方ない様な気もする。

大袈裟に騒々しくなってしまう周りの客からの視線が厳しくなると、会長がそれを制するかの様に大きな咳払いをした。

一斉に静まり返る一同。

余りにも咳の音が大きいせいとか、もう一度鏡子さんがこちらを少しの間見返した。

またしても声を上げそうな会員達は、口を手で塞ぎ何とか耐え忍んでいる。

会長が修羅の様な形相を浮かべていたせいだ。

ただ、気になったのは彼女の表情が少し暗い様に見える。

気落ちしている様な、ぼうっとしている様な、そんな気の抜けた表情。

会長に視線を移すと親指を立ててニカリと笑う。その笑顔に誘われて思わず頬が緩む。

「唯野見たか、お前らも見えたか、どんな格好しても、くうくうっ美しいいねえ〜」

田中は、ドヤアと腕組みをして踏ん返り返る。周りの不平不満を言っていた連中も、何を思ったかそんな田中にハハア……と頭を下げていた、この酔っ払い共め。

先ほどまでの空気とは打って変わって、和んだり、活気が出たり、いい方向に飲み会のムードが変化しつつあった。

あれだけ非難された会長に対しては――、

「ちゃんと説明してくれたら良かったのに」

「確かに会えましたけど、これは……」

「シャッターチャンス逃したじゃないですか――って、いや冗談ですよ冗談」

等々、色々な言葉が飛び交う。しかし、誰も彼も笑顔で、それだけ杳奈鏡子を見れたことが嬉しくて、皆少しの時間でも幸せな気分になれたのだろうと思わせる。

まだまだ、彼女を応援しているのは一人じゃない。

「もう、思い残す事ないな」

「何だよその、もうファンを辞めるみたいな発言は、もしかしてさっきの――」

「実は、そのつもりなんだ」

先に言われる前に答えると、顎をあんぐりと開けて田中が無言になる。

「まあ、そんなリアクションになるのもわかるけどさ」

ここ数年、熱い想いをずっと交わし合ってきた仲だ。田中が新しい女優を追いかけ始めた時も、同様のリアクションになった事を思い出す。

それでも、こちらは表情を崩さずに真っ直ぐに田中を見返した。

すると、こちらの意図を察してくれたのか、喜怒哀楽様々な表情が目まぐるしく入れ替わり、そして元のキリツとした精悍な表情に戻った。

ほんと男前だなこいつ、なんでAV女優の追っかけやってるんだ。

「お前の気持ち固まってるのはわかった、じゃあ今日はマジで飲もうなっ、付き合え」
空になったグラスに並々とビールが注がれる。

「じゃあ今日は、唯野の新しい門出を祝って、かんぱーい！」

カチンとグラスを合わせて一気に煽ると、冷たい液体が喉から胃まで流れ込む。

クーラーの効いた部屋で飲む夏場のビールは最高に気持ち良く、酒類がそこまで得意ではなくても、この快感は人を病みつきにさせる魔力を持っている事がわかる。

アルコールが入ってからは喋りも食も進みに進み、いつの間にか机の上の料理は綺麗に平らげられ、ビール瓶もグラスも空に。

どれだけ時間が経っても追加注文をしないのは、皆会話を夢中だからだ。

「てやだのおく、にょんでえるきゃー」

「お前さーいつも思うけど、あれだけ飲ませるキャラしてたら普通、もう少し酒に強くないか？」

田中は飲むペースを間違えた訳でもなく、いつも通り通常運転でべろんべろんになっ
て机に突っ伏していた。オフ会の回数イコール泥酔していると言っても過言ではない。

ただ、田中以外にもグロッキーになっている会員は多い。管を巻いているのか議論を交わしているのか判断できないが、容易く潰れないのは恐ろしいバイタリテイだ。

会長達運営組は簡略的な会議をしつつ酒を煽り、余った料理をパクっている。飲み会が始まる前と様子に変化がないあたり、年長者恐るべしだ。

そんな、まったりとした空間でのんびりと酒を飲んでみると、ふと、神経を逆撫でするような声が聞こえてきた。

心臓がぎゅっと縮み上がり、恐る恐る振り返ると予想通りの姿が遠目にあった。

「会長、何か頼んでいいですか？」

その男は、当たり前のようにコース外の注文を要求した。

「同志柳か、君には礼をしなければなるまい、好きなものを頼みなさい、私が全て持つ」
そして、それを咎める事なく言われるがままに許可する会長の姿を見て、何か裏であったのだろうと察する。普段なら大笑いして突き返している筈なのに。

細身かつ長軀、黒髪を長く伸ばし、悪相だが田中とは違ったタイプの男前。タンクトップとハーフパンツという、コンビニでも行く時のようなラフな格好で、柳は現れた。大声で店員を呼びつけて、矢継ぎ早にメニューを注文して行く。会長の自腹で食うというのに、遠慮の無い頼みっぷりで見るこちらの胃がキリキリとする。

やれやれという風に首を振る会長。金額については痛く無いだろうが、『礼』という単語が少し気にかかった。礼、借り、何か心当たりがある様な、モヤモヤした感じ。

「いやー、こちらの会は辛気臭くてしようがないっすね、マジで」

女つ気がないのは当たり前なのに、それをわざわざ口に出す無神経さが癩に触る。

「やにやぎい、おみやえにやにしい、きいてやんでやあ……」

「田中、お前何言ってるか分かんね」

酔っ払いがヤンキーに絡みに行くという地獄絵図が生まれた。

顔見知りという事もあってさらっと流されるが、『杏奈鏡子を愛する会』の中でも異分子に位置する柳の存在が、穏やかに流れていた空気を変質させる。

「そんな睨まんくださいよ皆さん、誰のお陰で生鏡子を拝めたと思ってるんです？」

ざわざわと、会員たちの間に動揺が走った。

『会長の計画じゃなかったのか』、という声が点々と漏れ始める。なるほど、会長が誰かから情報を得てこの企画を立ち上げた事は聞いていたが、柳からの情報だったのか。

もし、そうと知っていれば絶対参加する事はなかったのに。

そんな、自分が歓迎されると思っていた場所で、アウエーの様な扱いを受けた柳は、それでも怯むことなくニヤニヤと笑い続けた。

「いいんすかね、そんな態度取ってて。俺が、どこの席から移動してきたのか、わかってんの？まあ、わかるわけねーか」

ズキン、と心臓が何かに刺されたかのような痛みを発する。

「どうもー、この度『杏奈鏡子の素人宅訪問』に出演させてもらう素人Aでっす」

静まり返っていた会場が沸き立つ。それもそうだろう、久しぶりに発売される男性の絡みのある作品、それは全会員が待ち焦がれていたと言っても過言ではない。

しかし俺だけは違う。脳から引っ張り出された記憶に腹のなかをかき回され、痛みが全身に広がり、眉間に浮かび上がった皺が深まり続ける。

ファンクラブに嫌気がさした理由、その元凶が爆弾を抱えて目の前に現れた。

以前、杏奈鏡子の素人作品に出演し、ファンクラブで自慢の限りを尽くした人物、それもこの『柳』だった。しかも二度目の当選、何やらきな臭い物を感じざるを得ない。

しかし全てが繋がって行く。

柳は素人作品の募集に当選し、会長に飲み会の場所をリーク。

そして参加できることを会員に自慢し、羨ましがる会員を尻目に優越感に浸る。

そんな馬鹿げた事の為にこの場所をわざわざセッティングしたのかと思うと、怒る事を通り越して呆れ返るしかない。

もう、この場所にいる理由が本当になくなってしまった、帰ろう。

「会長、会費今払わせてもらっていいですか、申し訳ないんですが先に帰ります」

「すまない同士唯野、同志柳がこの為に場所を教えたのだと見抜けなかった」

申し訳なさそうに謝る会長を見て、貴方が謝る必要はないと伝える。

この後も、奴は武勇伝を語り続けるのだろう。

もし興味津々に聞きたい奴がいるとすれば申し訳ないが、そんな与太話を聞いている程自分は暇ではないし、聖人でもない。

会費を支払い、酔っ払った田中には伝えても覚えていないだろうから放置し、周りの人に軽く挨拶をして店を出ようとした、その時――、

「おい唯野、さすがに鏡子に会えるとなると、お前みたいなレアキャラでも釣れるんだなあ、ハハハハハッ」

耐え続けていた、貯め続けていた怒りが腹の中で爆発する。

今、俺の事を呼び捨てにしたか？

いつ、俺がお前の友人になった？

俺の愛する人を呼び捨てにしたのも腹立たしい。

これ以上好き勝手されてたまるか、一発ぶん殴ってやらないと気が済まない。

相手の腕っ節？そんなもの知った事か。

柳に向き直る。

「なんだその態度は、俺はお前にそんな悪人面で見返される覚えはねえぞ、むしろ感謝してもらわねえとなあ」

（……黙れよ）

柳に向かって早足に歩く。周りの人間は関わるまいと、そそくさと離れて行く。後少しで、顔をぶつ飛ばせる間合いに入るといふ所で、足に何かが引つかかった。

「ちゃあだやのお、きえんきやわだめえあだあ……」

管を巻き過ぎてもう何も話せなくなっている田中が、どこから湧いているのかわからない程の強い力で足を握っていた。

普段は力仕事でもしているのだろうか、それともスポーツ経験者？

ぐだぐだになった田中のだらしない顔を見て、先まで張っていった怒気が霧散する。

確かに、ここで騒ぎなんて起こしたくないし、そもそも暴力は犯罪だ。

ニヤニヤしている柳を一瞥し踵を返す。今日の事はなかった事にして忘れよう。

ファンクラブも退会して、これからの事も考えないといけな。

（……お前には俺の悔しがった顔は見せてやらない）

「待てよ唯野、俺にそんな悪態をつけて謝罪もなしか」

聞こえない。もう関わりのない人間と、話す事はもうない。

「まったく、俺が何の為にここに来たか分かってんのか、お前の為でもあるってのによお聞こえない。為にならない事しかなかったのに、何を言っているんだ。

「お前も——、鏡子とやらせてやるって言ったらどうだ？」

今、この瞬間ほど自分という人間が嫌になった事はない。

理性が、『止まるな』と何度も命令を下しているのにも関わらず、いつの間にか足が止まって、その場から動く事ができなくなっていた。

その行為の恥ずかしさに、誰の顔も見れなくなるほどの羞恥心が湧いた。

「ククク、唯野オあんまり自分を責めるんじゃないやねえぞ？自分が抱きたい女を抱けると言われて、それを無視できるやつなんていやしねえ、いたとしらそいつは男じゃねえ」

当然の反応がこの体たらくなら、今ほど自分が男である事を恥じた瞬間はない。

足が重りを付けられたかのように動かさず、前に進もうとしても震えるだけだ。

「なんと、この俺が指名した人物二名を、作品に出演させる事ができてしまうのです」目の前で、子供の様にはしゃいだ手振りで説明した柳は、ニヤついた顔で笑い出す。

周囲の会員は、その二名の枠に入れてくれと柳に媚びへつらっている。

「どうだ、今ここで床に額を擦りつけて謝れば、さっきの態度は水に流してやるが」

「……もしそれが本当だとして、お前がその約束を守るとは到底思えない。それに、俺はもう鏡子さんのファンを今日限り辞めるつもりだからな」

動かなくなつた足の代わりに、口で徹底的に反論する。

冷静になって考えてみれば、その真偽がどうであれ、信用に値しない言葉を鵜呑みにする方が間違っている。

そもそも、そんな形で彼女と関わってとして、何も喜べる事はない筈だ。

咄嗟の言葉に動揺したが、落ち着けばただの挑発でしかない。

「っなんだよ、つまんねえなあ……前に鏡子とヤツたつて教えてやった時は、いい顔で悔しがってたつていうのに、とんだ玉無しになっちまったなあ」

それでも、柳は俺を煽る事をやめないようだ。

「それで結構、これ以上お前に付き合っている時間はないんだ、それじゃあ」

「チツ……DVDが発売したら、てめえの家に送りつけてやるから楽しみにしてな……」
ふざけた捨て台詞を吐いた柳を尻目に、踵を返した。

世の中にはこういう困った人間が幾らでもいる。

そいつらは、周りに迷惑だけをかけたり、逆恨みをして人の足を引っ張り続ける。

だから、関わらないという選択肢が選べるのなら、できるだけ避けるべき——と、その時、物凄い悪寒が急に背筋を駆け抜けた。

一瞬、風邪でも引いたかと思つたが汗をかいているわけでもなく、冷房が効き過ぎていたという事もなく、それはただ尿意を催しただけだった。

トイレに寄ってから帰ろう——、という中々に格好のつかない考えが浮かぶ。

もし、帰りにすれ違いでもしたら死ぬほど恥ずかしいなと思いつつも、それでも尿意には逆らえず、フロアの奥まった場所にあるトイレにコソコソと向かう。

静かに扉を開けると、個室トイレが二つあり片方には誰かが入っている様だった。

もう片方の個室トイレに入り、今日飲んだ水分をゆっくりと吐き出していく。

「うう……、ううぶ……、えおええ……」

隣の個室から、嗚咽の音が聞こえてきて思わず肩がびくつと跳ねる。

微かに聞こえる声から察するに女性だろうか、嘔吐している様で独特の臭気がこちらの個室まで漂ってきた。

用を足し終わり扉を開けると、未だに隣の女性は吐き続けているらしい。

あまりにも長く吐き続けていると脱水症状の危険もある。これは、店員さんと呼んだ方がいいだろうか。

しかし、勝手に店員を呼ぶのも本人として具合が悪いかも知れない、一度確認をしてそれからでも遅くはないだろう。

「あの、店員さん呼びましょうか?」

声を掛けるも返事がない、もしかするとかなり重度の泥酔状態なのかも知れない。危機感を覚え、少し焦り気味にトイレを抜け出そうと体の向きを変えると——、

「すいません、それは少し待っていただけですか……」

慌てに慌てた声が聞こえ、進みかけた足がピタッと止まった。

「は、はい、大丈夫ですか?」

喋れるのがわかって少しホッとするも、それでも少し不安は残った。そして、その声に聞き覚えがある事が、心の何処かに引っかかる。

「……………、あの、お気になさらず……………」

二度目の声を聞いた途端、個室の中身が透けて見えるかの様な感覚になった。

（鏡子さんが、この中にいる）

声だけでその人がわかる程には、彼女の作品を閲覧していた。そこだけを聴くと気味が悪く感じられるが、好きな人の声を思い出せない人間は余りないだろう。

その人の危機ともあれば、手助けをしないわけにはいかなかった。

「あの、水を貰ってきますね」

多分、体調が悪い事は間違いない、自分の顔が割れる事を恐れて人を避けている。

それなら、水分補給だけでもと思い提案した。

「……………、すみません、お願いします……………」

応じてもらえた事に安堵しつつも、すぐにトイレを離れて飲料水の確保に走る。

知り合いに見つからない様にコッソリとキッチンに向かい、水差しとコップ、ついでに、汚れた顔や服を拭う為のおしぼりを店員から受け取る。

「持ってきましたけど、どこに置きましょうか」

「……………う、つと、扉開けてもらっていいですか……………」

トイレに直置きするのは不衛生だし扉を開けて直接渡すのが無難だが、顔バレは大丈夫なのだろうか。

「……………、あなたを信用しますから」

まさかの言葉に、心の中が幸せで満たされる。好きだった、憧れの人にそんな言葉を掛けられた事が嬉しくて、さっきまでの暗い感情はいつのまにか霧散していた。

「すみません、失礼します……………」

扉に手をかけてゆつくりと扉を開くと、呼吸がしばらく止まるほどの衝撃が走った。

見紛う事のない、麗しく流れる鳶色の髪。

スカートから伸びる健康的でしなやかな足。

音に反応して、こちらを向いたその秀麗な顔。

しかも、口元から吐瀉物が垂れており、そういうジャンルのAVの一幕のようで、色気とは違った蠱惑的な表情をしていた。

じっと見てはいけないと思いつつも、どうしても視線が外せなかった。

「……………杏奈鏡子さん、ですか？」

何も知らない第三者として振舞うべきだったのに、気がつくとも名前を呼んでしまった。

「……………、人違いです」

芸名を突然呼ばれたせいか、ビクッと一瞬だけ彼女の身体が跳ねた。

有名なせいで、一般人に気付かれる事が恐怖でしかないのだろう。

「水、飲んでください、脱水症状になってしまうので」

気まずい空気を変えようとコップに水を注ぎ渡すと、少し躊躇いながらも受け取ってゆつくりと口をつけてくれた。

あまり見られたい姿でもないと思うので、できるだけ視線を送らない様にする。

「……………」、あの、もう一杯いただけますか？」

流石にあれだけ吐き続けると体内の水分が全然足りないようで、ごきゅごきゅと喉を鳴らして飲み干していく。

水を煽る姿を妙に色っぽく感じるのは、自分が彼女の事を好きだからだろうか。

想いをずつと寄せてきた女性が目の前にいるだけで、心臓がバクバクと鳴り続ける。

「づつ……………」

何かを喋る事もなく、顔を全力で洋式トイレの便座に近づけ、胃の内容物を吐き出し続けた。水を一気に飲みすぎたからかも知れないが、できるだけ吐いた方がいい。

体内のアルコール濃度を少しずつ下げてやれば、段々と楽になる筈だ。

息を激しく切らしているが、中々全てを出し切れてはいない様だ。

「良かったら、おしぼりを貰ってきたので、これで顔を拭いてください」

口元に付着した吐瀉物の残りを、トイレットペーパーで拭こうとする鏡子を制止し、まだ熱気が籠ったおしぼりを袋を開けて渡す。

「……………」、ありがとうございます、何とお礼を言えればいいのか……………」

初めて会った時と変わりない、とても丁寧な言葉遣い。

汚れを丁寧に拭き取った彼女は、ようやく満面の笑みでこちらに視線をくれた。

苦しさを押し殺しているのか少しぎこちないが、プロ根性の一片を感じる。

「後は大丈夫ですから、このお水も後で返して……………」、づつ……………」

吐き気は尚も止まらず、それからも何度となく水を飲み、嘔吐し、を繰り返した。

個室内だけではなく、部屋全体に嘔吐したモノの匂いが充満している。

その淀んだ空気を吸い込み続けるだけで、自分にも酔いが回りそうだ。

どうにかして、身体を楽にしてあげたい。（どうにかして、その身体に触れたい）

「……………」背中を摩りましょうか？」

彼女から返事はない、相当に参っているようだ。（それなら、好きにすればいい）

手で背中に触れると、鏡子はビクリと身体を震わせてこちらを見た。

唐突に何をされたのか確かめるような、疑惑に満ちた視線。

ゆつくりと上から下に撫でると、激しかった呼吸が段々と落ち着いていく。

「あの、もう、大丈夫、ですから……………」

少しだけ気分が優れたようだが足りない。（もっとしっかりと彼女に触れたい）

「服を着ていると苦しくないですか？」

「そうだ、衣服を脱がせてあげればいい。（服を脱がせて、生肌を味えればいい）」

「——、本当に、結構なので……」

こちらを信用しきった顔をしていた筈が、段々と曇り始めていた。（もつと強引に）好きな人の身体に触れている事で精神が昂り、身体の一部を次第に硬直させる。

「遠慮しないでください、本当に楽になりますから」

許可も取らずに、いきなりサマーセーターを捲り上げる。（背中が艶かしい）

「——、ふざけないで下さい……、大声を出しますよ……、ぐっ……」

身体がまだ良くならない彼女は、碌な抵抗もできないようだ。（とても好都合だ）

視界に入った白のブラジャーが窮屈そうなので、外すことにする。（生乳を揉みたい）

ホックを乱雑に外すと、背中越しに美巨乳がたゆんと重力に流された。（触りたい）

ブラジャーに包まれた豊乳がぶると左右に跳ねてチラリと視界に入り、重力を受けて更にバウンドする。こんな素晴らしいものを前に、何を躊躇する事があるだろうか。

「——、やめ、なさい……」

「胸も摩ると、とてもスツキリするんですよ」

とりあえず、邪魔されては堪らないと思いい、狭い個室の中に入り鍵を掛けた。少し手狭だが、ペニスを尻に擦り付けるほど密着すれば問題ない。生乳に手を添えていく。

前傾姿勢でも垂れていない、張りのある乳房をゆっくりと揉みしだくと、鏡子の身体はビクビクと震え、その反応が楽しくて何度も繰り返してしまう。

「もしかして——」

心臓が弾けんばかりに強くポンプし、全身から大量の汗が溢れ、局部はガチガチに隆起していた。もしかしたら、我慢汁が出ているかも知れない。

「どう、して——、私の——、体液？」

よくわからない事を言い出した鏡子の顔は、すっかり蒼白に染まっていた。

その表情が少し心配に思えたが、今は目の前の肉体を存分に味わうのが先だ。

しっかりと手入れされた極上の肌は、歳を重ねるのを忘れたのかと思わせる程の艶で、しっとり、かつふわふわの柔肌は、指に吸い付くほどもちもちした触り心地だ。

掌にたっぷりとした重量が乗っかり、指と指の間を埋める様に乳房が溢れる。

最新鋭の技術を用いたシリコンの塊でも、この弾力と柔らかさを両立させるのは不可能だ。それ程までの見事な揉み応えに、本能が勝手に十指を胸の上で波打たせた。

手が吸い寄せられる様に肌に吸着し、不定形の脂肪球を粘土の様にならねらせて、先ほどまで身体の心配をしていたのが嘘の様に、快楽のままに欲望を発露させている。

手の平に当たる乳房の先端が存在を主張するかの様に更に硬さを手に入れて、触覚が更に過敏になり興奮が最高潮に登りつめていく。

「うん……」

甘い声が漏れて手に相当な力が入っていた事に気付く。

指の一本一本が乳房に力を加える度に、脳内が幸福物質で溢れかえる。

柔らかいという感覚が分からなくなるほどに、形の無い肉の塊を捏ね伏せる。

「ッ——」

乳首を親指と人差し指でねじると、声を殺す様に呻いた。

スカートを捲り、滑らかな素材の下着にジーンズ越しの男根をぐりぐり押しつける。

布を隔てて秘部同士が擦り合わされ、自分の快感と相手の性感が同時に高まる。

「あっ……だめ……やめ、……て……」

抵抗の声が聞こえた途端に身体が熱くなる。

制止の音が俺の攻撃的な精神を煽っている。

乳房を掴む手が離れジーンズのジッパをを下ろし、下着からペニスを取り出してすべすべしたパンツに擦り付ける。

湿り気を帯びた布地を男根でなぞると、亀頭から漏れ出したカウパーが糸を引いた。

それと同時に、鏡子の下着が段々と水分を含み始め、愛液が漏れてきているのがわかる。尻を左右に揺らし抵抗されるが、こちらを誘惑している様にしか見えない。

とうとう我慢できずにパンツをずらし秘部を曝け出すと、鏡子の身体が跳ねた。

「いれちゃ……だめ……っ」

——火花が脳で弾け、身体に電気が流れる。

「ダメッ………、言うことを——、聞い……て……」

——機械の様に無感情に、『犯せ』という脳の命令にただ従うだけ。

「ンッ………、待って——ッ」

——悪魔の様に無慈悲に、縫り付かれても譲歩をしない。

「絶対に……、挿れさせないっ、から……っ」

——誘うように左右に揺れる腰を、両腕でもって抱え込む。

「力がっ、入ら……、ないっ……」

——腕を万力の様に締めて、臀部を腰に密着させる。

「………近づけないで……、それは、絶対……ッ」

——入り口に擦りつけるように、何度もペニスを上下し、

「挿いったら………、とりかえ、しッ——」

——お互いに準備を終えた秘部を、粘膜と粘膜を重ね合わせ、

「あなた、っ、がっ……ンッ——」

真に硬くなった男根は、普段の自分では考えられない程に膨張し、膣壁を存分に擦り
拡げながら——、一気に膣奥まで潜り込んだ。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

「アッ—— んう……っ、——アあ」

ここが店内のトイレだという事を忘れ、どれだけ声が出ようが、肌と肌が音を立てようが御構い無しに思い切りに腰を打ち付けた。(気持ちがいい気持ちがいい)

浅く、深く、遅く、早く、緩急と強弱を存分につけて、膣を抉る様に、子宮を押し込む様に、喘ぎ声を厭らしく鳴らせる為に、もっと淫靡な音を奏でると突きまくる。

「ッ—— んッ、ッ……、んッ—— !!」

パンツ、パンツ、パンツパンツ

これだけ積極的に動ける事に自分でも驚いていた。ゴムも無く赤の他人に挿入をして、自分の快楽だけを追い求めて射精に至ろうと、頭を空っぽにして腰を振っている。

あっという間に吐精ギリギリにまで上り詰めて、脳が疼きだす。(気持ちがいい)

早く早く早く早く早く——。(気持ちがいい気持ちがいい気持ちがいい)

人肌より少し熱い、風呂の湯ほどの暖かな膣肉に蒸されながら、排尿をするかの如く自然に、高まり猛ったペニスを膣内で暴発させた。

「……中に、中に………出したら……もう、………ん♡」

びゅくっ、びゆるう、びゅびゅう、ぶびゆるう、びゅううううう

勢いよく射精が始まり、自慰で垂れ流す量の何倍もの精液が膣奥に注ぎ込まれた。

膣を満たす達成感と精を吐き出す喪失感に夢中で、彼女の些細な異変にも気付かない。



それでも腰が止まる事を知らず、最後の一滴を搾り尽くす様に男根を奥まで捻りこむ。脳内の快感指数が極限にまで昇り続け、頭がぼうつとして、少しだけ鼻血が出た。すると、さっきの射精による喪失感が薄れた様な、そんな違和感を覚える。

収まり掛けていた興奮が蘇り、収縮し始めたペニスが再度大きく、硬くなっていた。そうなれば、身体は自然と二度目の射精に向かって動き始める。

体力が一度目の射精でしつかりと失われているのは確かで、その疲労感を脳で感じつつも身体は活発に動き、さっきよりも激しく脈動している。

バチバチと、脳が悲鳴をあげるほどの快楽を浴び続け、ペニスの触覚はもはや麻痺したかの様に何も感じず、ひたすらに膣を突き上げる事だけを続けた。

そして、すぐに我慢は限界を迎えて膣内に大量発射をすると、白濁が彼女の足を伝う。

射精量が段々と少なくなる事はなく、むしろ増え続ける一方。

射精、脱力、復活、射精、脱力、復活、射精脱力復活射精脱力復活射精脱力復活、この繰り返しは何度となく、飽きる事なく、終わる事なく継続し、いつの間にか立っている事がやつとの状態にまで体力を削り落としていた。

膝がガクガクと笑い床に崩れ落ちると、目の前に鏡子の秘部があった。白濁液を多量に溢れさせ、太ももに滑り落ち、ぐちゃぐちゃに汚れたスカートがある。

大量の氷嚢で頭を覆われたかの様に、一気に脳が冷静になる。（嘘だ、嘘だ……）

これが——、この所業が自分の仕業だと信じられるだろうか。

肩で息をし、身体を大きく上下させている鏡子は、何も言わず顔を伏せていた。

ゆつくりと、今まで働かなかった筈の頭が、状況を処理せんと音を立てて動き始める。

多分、今一番にすべき事は、『この場から立ち去る事』だろう。

しかし、身体は疲れ果てて立つこともままならない。

それもそうだ、数分で数え切れないほどの射精を繰り返した。全力で鏡子を後ろから突き続けたせいで、全身の筋肉が悲鳴を上げている事は言うまでもない。

ただし、逃げたところで、どうあがいても拭いきれない証拠がこの場に散乱している。

大人しく観念して罪を償うという、当たり前の発想が出てこない自分に驚いた。

何故か、目の前の光景が到底自分のした事と認識できないからだろう。

交通事故で轢き逃げをする罪人の様に、罪を犯す気の無かった人間が背負える重罪ではない。事故だったと、犯す気は全く無かったと言いつの言葉しか出てこない。

俺は彼女を介抱していた。そんな善良な人間が女性をレイプしようなどと思うだろうか、酒の場で彼女は物凄く泥酔していた。（そうだ、俺は彼女に誘われた事にしよう）

それなら、もつと彼女に酒を飲ませて記憶を飛ばしてしまえばいい。

水を飲ませて介抱していた人間とは思えない、真逆の発想に自分でも笑ってしまう。

（だって、そうでもしないと、俺は、社会的に殺され——）

「鏡子さーん、大丈夫ですかー、酔い覚めましたー？」

(あ)

体内の血が全て失われたかと思うほどに、一気に体温が下がり切る感覚。

パーティーの主賓がいつまでも戻らなければ、誰かが様子を見に来るに決まっている。むしろ、ここまで現れなかった事が不思議なくらいだろう。

——コンコン——、軽く打たれるノックの音が、その何十倍の音量で耳に響く。

——コンコン——、応じる様にノックを返し、音を立てない様に慎重に鍵を掛けた。

「あれ、今、鍵が——、え、鏡子さん、本当に大丈夫ですか？」

ノックの音が強くなる。鍵を動かせば外から一目瞭然なのは、当たり前だろう。

扉を開けられた途端に人生が終わるとすれば、そのままにしておける訳がなかった。

「中に誰かいるんですか？返事してください鏡子さん、えっと、店の人を呼んできます」

(勘付かれた——、もうどうする事もできない、もう終わりだッ——)

「あ、ごめんなさい、ちよつと戻しちゃって……、すぐ行きますから！」

伏したままの鏡子が、そのままの姿勢で平然と声を出した。

止まりかけていた呼吸が、開いたままになっていた口が、ゆつくりと再起する。

(助かった——、いや、それにしても彼女の様子が余りにもおかしい)

俺は彼女を介抱し、その後、抵抗を跳ね除けて強姦した。

その人間を守る必要は皆無であり、むしろ助けを呼ぶべきなのは間違いない。

それなのに、彼女に庇われているという事実が、鳥肌が立つほどに不気味だった。

「あーなるほど、鍵を閉めたのは鏡子さんでしたか、流石にトイレの扉をいきなり開けたりしませんよー、あはは」

疑念が払拭されたのか一気に外の声が明るくなる、女性のスタッツだろうか。

鏡子は立ち上がると、瞳から零れ落ちそうになったザーメンを指で掬い取り、口に運んで舌で転がし、美味しそうに飲み下した。そして、ニコリとこちらに微笑む。

人が変わった様な素振りに驚いていると、彼女は指をくいくいと上に曲げて『立ち上がれ』というジェスチャーをした。無理だ、すぐには立てそうにない。

すると、鏡子は満面の笑みを浮かべながら、『大声を出すぞ』とでも言いたげな素振りをして見せる。ゆつくりと口を広げ、今にでも声を出しそうな風体だ。

脅されている事を理解し、足腰の筋肉に鞭を打って何とか扉を背もたれにして立ち上がった。しかし当たり前だが——ドンツ、と大きな音を立ててしまう。

「え、大丈夫ですか？今扉に倒れ込みませんでした？足元覚えない感じですか？」

まさか、知らない男が扉を挟んで存在しているとは、想像もできないだろう。

外から声を掛けられる度に、何度も心臓がきつく締め付けられて息が苦しくなる。

「うーん、ちよつと千鳥足かも……、ふふっ、お酒弱いの忘れてました」

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

声だけを切り取れば、とてもにこやかに応答している様に聞こえるが、目の前の彼女は一切笑っておらず、口だけが機械的に、録音された声を再生する様に喋っている。

立ち上がった俺を放置する筈はなく、弱々しくぶら下がったペニスを指で支える様に撫でる鏡子。しかし、それだけの刺激で簡単に勃起するだけの精力は残っていないかった。

《は、や、く、た、た、せ、て、♡》

いきなり危険な発言をした鏡子に、俺の目が大きく見開く。もし、それが外に聞こえたらどうなる……いや、もう何も想像する事ができない程に思考力も疲弊しているが。

「鏡子さんお酒弱い意外だなー、結構お酒強そうなイメージだったんですけど」

「ふふっ、そんな事ないですよ」

「———？、聴こえてないのか？」

余りにも普通のリアクションが返り驚く。(あんなに大きな声を聞き逃すはずが……)

《今度は本当に声出すよ？私が優しい内に早く勃たせて？早く》

確実に外に聞こえる音量で鏡子が喋るが、外の人間に聞こえた様子はない。

さつきとは違う無感情な声、そして推測だが『俺の頭の中だけで』それは響いている。

あり得ない事だが、鏡子は俺の意識に直接声を届けている。

ゲームなどではよくある話だが、そんなもの現実には存在しないし、してはいけない。

ただ、目の前にいる女が、実際にそれを行っているのは間違いなかった。



《刺激が足りない筈がないでしょう？ほら早く、大きくして？》

動転した精神では、彼女の極上の身体もただの記号にしか見えていなかった。しかし、改めてじっくり見直してみれば、それだけで十二分に脳が昂り、身体も反応する。

《おちんちん、もっと気持ちよくなりたいでしょ？》

今の鏡子は、さっきまでと明らかに違う攻撃的な雰囲気纏っている。

あの泥酔が演技には思えなかったが、見事に何も無かった様に立ち振る舞われると、今までのすべてが嘘であると感じられて。むしろ夢であって欲しいとさえ思う。

二重人格、という言葉が少しだけ脳裏をよぎった。

《まだまだ、射るよね？》

これ以上射る訳がないと断じれる、そんな射精回数をこなしている。

《こっち向いて？》

何度も聞いた声が耳奥を擦る。

いつの間にか鏡子の顔がすぐ前にあり、言葉を拒む事も億劫で彼女に向き直る。

《素直だね》

美貌が寸前まで近づき、そのまま顔を合わせるように唇が結ばれた。

唇を重ね、流れるように舌が捻じ込まれると、口内でこちらの舌先をまさぐられる。

そして、彼女の口から大量の唾液が注ぎ込まれ、それが喉を通り抜けた。

想い人とキスができた事による感動は無く、恐怖心が身体を支配し続ける。

何故なら、どう考えても目の前の人間がそれまでのイメージと一致しない。

人間の持つ表と裏として片付けるには無理があるほどに、全くの別人だった。

「あの、少し良くなってきたので、もう大丈夫ですよ」

「あはは、すいません、大きな声出して騒いじゃいました恥ずかしー、みんな待ってますけど、体調がすっかり良くなるまで戻らなくて大丈夫ですよー、何かいますか？」

「心配かけてごめんね。水を貰ったから大丈夫です、もう少ししたら戻りますね」

その別人が、元の人間の仕草、言葉遣いを全て再現してみせる。

やはり、この女が『杏奈鏡子』の全てを演じていたという事なのだろうか。

もしそうだとしたら――、俺はいつからこの女に騙されていたんだ？

「わかりましたー、それじゃ何かあったらマネージャーさんに連絡して下さいねー」
(待ってくれ、俺は加害者じゃなくて被害者だったんだ、全てが嘘だったんだ！)

しかし、声を出して助けを求める事も、こんな現場の上では不可能。全てが自分に不利に働く上に、今までずっと脅されていたと言うだけで、上手く説明がついてしまう。

ボタン、という扉が締まる音が、無慈悲に鳴り響いた。

トイレに誰もいないのを確信した鏡子は、中腰で何とか扉に寄り掛かった俺のシャツを掴み、くるりと身体を入れ替えて便座に投げ飛ばした。

あの細腕でどうやってそんな力技を行えたのか、想像するだけで恐ろしい。鏡子は対面座位の様に俺の膝の上に乗れ、首に腕を回して身体を固定する。

「やっと二人きりになれたね」

とても嬉しそうな鏡子は、半勃起のペニスをさわさわと優しく撫でる。

「でも、君は誰かがいた時の方が、とても興奮してたみたいだけど？」

（馬鹿を言うな、いつ自分が破滅させられるの分からなくて、怯えていただけだ……）

「さっきはあれだけガツついてくれたのに、射しちゃうとこれだから男は」

やれやれと首を横に振りながらため息を吐く鏡子。

緊迫した雰囲気の中で、急に気の抜けた調子で会話を始められると戸惑うことしかできない。心臓が激しく鳴って息苦しいのに、こっちの事は御構い無しだ。

そんな、目紛しく変化する状況に対応しきれないのを、鏡子は見抜いていた。

「ほら、おっぱい触ってみて、落ち着くよ？」

美巨乳を眼前に運ばれ、左右に揺らされて視線を翻弄する。

「それとも、おっぱい吸う？触るより、もつと落ち着くかも♡」

むぎゅむぎゅと寄せ、豊満な胸の膨らみを巧みに見せつけられ、嫌でも唾液が口内に溜まってくる。血が集まり、硬く隆起した薄桃色の乳首に吸い付きたいという欲求で脳内が満たされていく。しかし――、

「頼むから、俺を解放してくれ……」

それでも、理性がその欲望を拒んだ。

これ以上、目の前の得体の知らない女と関わってはいけない。

危険極まりない状況に立たされている事を、脳が警報を鳴らして知らせて来る。

「ダメ、私の食事は今始まったばかりなの♡」

ぎゅつと、これは自分の物だと誇示するかの様に顔を掻き抱かれる。

柔らかさと弾力が顔を圧迫し息が苦しくなる。地球上の物質で例えようのない軟性が、肌にもこれでもかと吸い付いて顔の表面を揉みくちやにする。

腕で抵抗しようにも疲れのせいで碌な力が出せない上に、その抱擁を剥がす事を躊躇っている。自分自身の欲望が邪魔をし始めた。

もつとこの空間に閉じ込められていたいと思ってしまうている。

「もう、いい子にしないでだめでしょ？」

窒息しない様に顔を解放した鏡子は、俺の頬を両手で支え、じつと見つめてきた。

彼女の蒼眼に射抜かれた瞬間、身体の芯に火が付く様な熱さが宿る。

胃の中に流し込まれた唾液、あれは軽々しく飲み下していい代物では無かった。

エナジードリンクを飲んだ時の様な急激な変化が体内に表れ、それに合わせる様にペニスの硬さも尋常じゃなくガチガチになる。

首を前に傾けられ、硬くなった乳首を唇に押し付けられると口内に濃厚な甘さが広がった。その味は決して母乳の物ではないが、飲みやすく、癖になる味がした。

「吸って？ちゅばちゅばしよ？」

中毒性のある甘味に釣られて言われるがままに先端を口に含むと、アルコールとは違うが身体をふわふわとさせる様な特別な高揚感を与えてくれる。

女の命令が、俺の脊髄に直接命令しているかの様に、身体が全てに従い始めた。

ストローで吸う様に優しく、時々舌先で転がす様に吸い付く。

「少し激しくしてもいいよ……」

後頭部を撫でられ、下顎を擦られながらゆっくりと乳首をしゃぶり倒す。

赤子のようにひたすら口を窄め、母乳が出るわけでもないのに膨らんだ乳房を吸った。

たまに鏡子は甘い声を出して鳴き、気持ちの良い舐め方をした時は褒めてくれる。

そして、その成功と失敗を繰り返しながら徐々に上手な作法を学習していった。

口から涎を垂らし、無様に果実をほうばる童子の様な舐めしゃぶり方で、彼女を楽し

ませながら自分の深層的な欲求が満たされていくのを感じる。

唾液に塗れた胸を両手で掬い上げ、鏡子さんは柔かに笑った。

「おちんちんもいい子、そんなに大きくなって」

背筋がゾクリと震え、心臓を直に撫でられているかのような恐怖が心を満たす。

「君は今から私に犯されて、精液を私に注ぎ込んでくれればいいの」

さっきまであれだけ射したのに、まだ足りないと言っても言うつもりか。

セックス中毒者？男をレイプする趣味のある異常者？どれも当てはまる気がしない。

むしろ、その方がまだ救いがある気さえする。

鏡子の人間離れた行動や雰囲気、それらが普通の人間ではないと示している。

人間ならざる生物、地球外生命体？映画の見過ぎだと否定する事もできない。

「ねえ、変な事考えてないでこっちに集中して、大きい声出すよ？」

ギョツと陰茎を握りこちらの思考をぶった切る。

そのまま乱暴に擦りあげられ、少し痛みを感じながらも与えられる性感に体を振った。

もう何度目だろうか。そり立たされたペニスを満足気に見つめる鏡子は、少し考える

ように小首を傾げると、こちらの目を覗き込むように見つめ、耳元で囁やく――、

「おしゃぶり……、してあげようか？」

その提案に思わず身体が仰け反る様に跳ねた。

こちらの反応を見て、心底嬉しそうに口を歪めて笑う鏡子。

混乱しながらも平静を装っていた心臓を、一気に鷲掴みにする様な蠱惑的な言葉が耳

元で囁かれ、男根は震えながら更に膨らみ、心拍数がいきなり駆け上がった。

して欲しい、と思っていたわけではない。

ただ、心底にあった欲望の中で、最も大きくなっていったモノを拾い上げられた。色々な形に変わる唇の淫靡さ、重ねたばかりの唇が持つ蕩ける程の柔らかさ、その中に自分の物が包まれ、しゃぶりつかれる事を想像してしまった。

ゆっくりと、ごくごく自然に頭が前に傾く。

「その代わりいっぱい飲ませてね♡」

つんつん、とペニスを指で突つかれる。

そんな些細な刺激でも端から先走りが漏れた。

「凄く期待してる、えろ……、先っぽから美味しいの出てるよ、もっと出して——んっ」

舌先でカウパーを掬い取られニコニコしながらそれを味わう鏡子。

裏筋を付け根からゆっくりと舌が登っていき、先端にたどり着いたら下に戻り、また付け根から、それを何度となく繰り返し返される。

口内で弄り倒されると思っていたせいで、余りにも淡い刺激にもどかしさが高まり、上半身がねだる様に悶えた。

「ぐずらないの、ちゃんとしてあげるから♡」

いつの間にか犯されているという感覚は薄れて、もっと犯して欲しいという心境に変わっていた。数えきれない程の願望が、早く叶えろと自己主張してくる。

「色んなこと、してあげるから♡」

動転して忘却していたが、目の前で逸物を舐めている女性は自分の想い人だ。

性格に関して言えば、理想というか想像とは少し違っていたが、男性的観点から言えば、痴女じみた行為をされる事に関して不満に思うはずもない。

ペニスを啜えられるまでに、既に絶頂してしまいそうな位の気持ちよさを感じる。

もう出ないと思っていた精子が、まだ放出されようとしている事が恐ろしい。

それでも今は、早く出したくて出したくて仕方がない。

「い——、逝、かせて……」

そして、敢え無く吐精を懇願してしまう。

駄目だとわかっていても、それを抑えることができない。

「途中で出しちゃっていいの？そんなに射精したい？」

こちらの顔を覗き込む彼女は残念そうに眉をひそめていた。

「お口の中で出した方が、暖かくて気持ちいいのにな」

そう言って、自分自身の人差し指をペニスに見立てて啜え込む鏡子。

確かに今射精したら勿体ない、もっともっとこの快楽を味わっていたい。

しかし、高まり切った射精感を、もう一秒たりとも我慢したくなかった。

「じゃあ、早く啜えてくださいっ！」

解放して欲しいと願ったのは誰だったか、今ここにその人物は存在しない。

そんな情けない言葉を受けて、呆れた様な表情で鏡子は頷いた。

「しようがないな」

懇願され、顔を顰める鏡子。

「せっかく最期だから、最高に気持ちよくしてあげようと思ったのに」

サービス精神溢れる言葉に少し勿体ない気分になるが、今は一刻も早く射したい。

残念そうな、嬉しそうな曖昧な表情を浮かべた鏡子は、一気に下腹部に顔を寄せた。

「ちゅっ——、せっかちだとすぐ終わっちゃうよ？」

亀頭部に軽く口づけをして、その後、舌先でチロチロと舐めほじられる。

ピリピリとした刺激を先端で感じ、内臓まで痺れる様に広がった。

ようやく味わえる口内の気持ちよさに期待して全身が脱力する。

「——ちゅぶ、ちゅうる……ちゅぽっ……、ちゅっぽちゅっぽ、んっ、そーだ♡」

とうとう唇で肉棒を包み込まれ、甘い刺激がペニス全体を覆う。

射精感が唸る様に高まり始め、しかし、数度往復するとあっさりと男根は解放された。

「——え？」

鏡子は先端部の愛撫をやめて、更に奥、睾丸の垂れ下がる位置に顔を寄せた。

「そ、そこは……」

口と鼻から漏れる温かな吐息が、敏感な部分を蒸らし、擦る様に流れる。

「そう、キ・ン・タ・マ・だ・よ♡」

鏡子の口元が隠れた状態で、今まで感じた事のない痺れがじわじわと睾丸を犯してい

く。玉を口の中に含まれて、舌と口壁で舐めしやぶられているのがわかる。

「ふあまふあまふあぶられるふお、ふいふおふいふいふいふおふえ」

AVでは何度も見た事がある、お気に入りプレイでもある『玉舐め』。

実際に受ける事ができた事の感動もあったが、そんな思考をすぐに掻き乱す程の想定

外の快感。

「——じゅふう、じゅるうる……、むちゅうむちゅ……」

曖昧な刺激が少しずつ確かな触感に変わり、自分の睾丸が口の中で咀嚼されている様

な恐怖感と、性感帯を丸ごと粘膜で擦られる事で生じる幸福感が混じり合う。

「ふおんふおん、ふえいひふふっふえ」(どんどん精子作って)

脳が異常な状態であると警告するかの様に、頭がズキズキと痛み出した。

「ぶはっ、ちゅうううっばっ、たまたま凄く気持ちよかったですよ？もうおちんちん、

我慢できないくらいガツガチガチになってるね、我慢汁だからだし、あーんっ」

カウパーが滴るほどに鈴口から漏れて、それを下から掬い上げる様に舌を出す鏡子。

「——ちゅるんっ、ちゅぶっ、美味し……♡」

線を引いて垂れ落ちた雫を、舌先で絡めとり口に運ぶ。

そんな妖艶さを見せつける鏡子に見惚れていると、身体にまたも異変が起きた。睾丸に強い痛みが走り、グツグツと渦巻く様な熱を持っている事に気がつく。

「私の体液でタマタマに急いで精液を作ってもらってるから、熱くなってるんだよ」
 身体の仕組みが書き換えられたかの様に身体が脱力を始め、全身に行き渡る筈のエネルギーが精巢に注がれていくのを、あからさまな体温の変化で感じる事ができた。

それほどに、極端な異変が起きている。

「これで、ずーっとエッチできるね♡」

それが事実だと鏡子の嘘偽りない笑顔が証明する。

精液がずっと生み出されるのなら、その度に男根は硬さを維持し続けて、永遠に性交をする事ができるだろう。

—— 行為の後、何も残らないかも知れないが。

「準備できたから、手加減なしでイかせてあげるッ——、あーむ♡」
 ゆっくりと、先っぽを啜えられ顔が上下する。

それは普通のフェラチオでしかないが、どんどん敏感になり続ける睾丸を一緒に撫でられると、身体が何度もしなるようにビクビクと震えた。

その快樂は、きつと受け続けられれば俺の何かが壊れるだろう。

その快樂に溺れてしまう事ができれば、どれだけ幸せな崩壊が待つのだろう。

「おちんちんが壊れない様に、あんまり我慢しないでね、出したくなったらすぐ出していいからね、全部吐き出すんだよ？何も残しちゃだめだからね☆」

鏡子がウインクをした。

ただのアドバイスが、死の宣告に聞こえたのは過剰な妄想だろうか。

「——じゅぽっじゅぽっ、じゅるるるるっ、じゅっぽ、じゅっじゅっ、じゅぽお、ちゅっぽちゅぽ、ちゅぽっ、じゅるるるる、じゅぶぶう、じゅるるるるう……」

容赦のない口淫は一気に射精を促す。

「んあっう……はあああっ……そ、そんな……き、急に……」

限界がすぐに来たのは自分の我慢が足りない訳では無く、彼女の技術の高さ故だ。

どれだけ絶頂を意識から外そうとしても、何度でも引き戻されて射精の準備が始まる。

「君が早く逝きたいって言ったのに、わがままなのっ、じゅぶっ——、んちゅっ♡」

全く加減をしない、しかし絶妙な塩梅のフェラチオ。見た目の激しさからは想像もつかない、的確なポイントへの刺激が連続して行われる快樂の連鎖地獄。

「——じゅぽっ、じゅるるるるう、じゅぽっ、ちゅぽっ、ちゅ——、んちゅっ、ちゅるる、ちゅぽちゅぽちゅぽ、じゅっぽじゅっぽ、じゅる、じゅるるるるるる——ッ」

唇でカリ首を引っ掛けながら舌でペロと裏筋を擦りつけ、膣内を思わせるような長いストロークでペニス心地よい挿入感で満たし続ける。

「——、もう、出、でる……」

耐えられる筈はなかった、しかしもう少し長く楽しめる予定だった。

「いいよ、一番気持ちいい時にいっぱい出したって思えば、最高の射精ができるからねっ、ちゅぽっ、ちゅぽっ、出しちゃお、おちんちんミルクいっぱい出しちゃおっ、ぷちゅっ、ちゅぷちゅぷちゅぷっ、じゅぽっ、じゅぷっじゅぷじゅぷ——、ンッ」

「あ、あああつあああつあああああつ——!!」

最後の一線で堰き止められていた精液が、一気に鏡子の口内に注ぎ込まれる。

「んむう、んちゅっ、んっ、んっ——、しゅごいつ、もつとふあひへ、もつぷお♡」

射精が始まって、鏡子はフェラチオを止める事はなかった。

「——んっ、喉にいっぱいこびり付いてる——、ちゅっちゅっ、濃厚過ぎて頭痺れちゃう……、ちゅぷう、むちゅちゅぷっ、おまんこで味わうのもいいけど、んっ——、じゅるるう、じゅるるう、舌と喉で堪能するザーメン、んっ、んっ、やっぱりいいなあ……♡」
喉を鳴らしながら精液を味わう鏡子は、全身を振りながら精飲し続けた。

「うん、味も好きだなあ……ちゅう、んちゅっ、濃厚だしっ………んう」

恍惚の表情でペニスを咥え続ける鏡子。まるでペニスをストローに見立てたかの様に、睾丸から子種を吸い続け、口の中でかき混ぜる様に味わっている。

放尿する時の様に、射精をしている間中は快感がじんわりと全身に巡り続けた。

ふと、とてつもない違和感に気づく。

「——あれ、射精が止まらない」

止まらない——、通常は十秒続く事もないのに、今はもう三十秒は射精している。

下腹部だけが異常に熱くなって、それ以外が急に冷え始めていた。

「全部出すまで止まらないよ？面倒だから、一回の射精で全ての精子を吐き出せる様にしたの、ほら、タマタマ舐めながら、手でゴシゴシするともつとっぴい出るよ♡」

玉フェラが再開され、白濁ローションで滑るペニスを勢いよく扱かれると、絶頂しているのにも関わらず快樂が上乘せされて、脳が処理できない領域にまで達していた。

「とめて、止めて止めて、止めてよ！止めてください！お願いします!!お願いッ!!」

「ぞ——んねん、もう止まらないの♡」

慈悲はなく、空気が抜けていく風船の様に萎み切るまで精液を放つしかないらしい。

「折角だからー、こういう風に遊んじゃったり？」

鏡子は無邪気に笑った。

「もーっと、もーっと、噴水みたいに吹き出してちやお♡」

射精が止まらない。玉を唾液で濡れた指で揉みほぐされ、裏筋を舌先で何度も上下になぞられると、更に勢いを加速させて天に向かって吹き出した。

「ああ、あ、あああ、あ、あああ、ああああ、あああ、あああああああ、ああ」

信じられない量、驚くべき勢い、意識を正常に保つのがやっとの、真に異常な事態。全身が力を失っていく。

意識も段々と薄れていく。

絶頂は『死』にも例えられるが、これだけ命を吐き出せば問答無用で死ぬだろう。

「全部出たかなー、ん？」

それでも俺は、未だに意識があり生きていた。

そしてペニスも、未だに勃起したままている。

死を乗り越えたのか、はたまた異常なまでの生命力があったのかはわからない。

ただ、事実としてまだ生きていた。

「すごい、これだけ射して、まだパンパン——」

尚もそそり勃つ剛直に、うっとりとした視線を送る鏡子。

「ご馳走、見つけちゃったかも♡」

お気に入りの一品を見つけた少女の様に、これは私の物だと目を輝かせている。

「君いいなー、私が身体を手に入れたら、お持ち帰りして一生可愛が——誰？」

何かに反応して急に声が元に戻る鏡子、それは侵入者が現れたという事だ。

扉が開く音が聞こえ、トイレの扉の前に何者かが現れる。

「×××、どうやって現れた？」

ピタリと、鏡子の動きが止まった。

「何ともまあ、暴れ散らかしたな」

掠れた意識の中で、聞いた事のない声が背後から聞こえた。

「あーら、時間切れて事？」

「軽く人払いしました。このままお前を回収してそのまま帰る、替えの服に着替えろ」

「嫌だっけ言ったら——、嘘よ嘘、冗談よ」

身体はもう指を動かす事もできないほどに疲弊し、思考も働かない。

ただ、このまま放置されたら面倒な事になる事だけは何となく分かっていた。

「安心しなさい、痕跡は全て消して、この記憶も無くなる」

心を読まれたのか、顔にそう書いてあったのかはわからないが全てを察された。

心配事がないのなら、もうここで疲労に任せて眠りに落ちてしまいたい。

今までの事が全て悪夢だったと思える様に。

「勿体無いなー、この子すっごく生命力に満ちてて、まだまだ吸い出せそうなのに」

「それを全て吸い出しても、全然足りないんだらう？」

「それはそうね」

あれだけの量の射精をしたのに、それでもまだ足りないと言うのか。

「じゃあね、また会えた時は全部吸い出してあげるからね♡」

萎れきったペニスに口づけをする鏡子。

ただの接触なのに、ペニスが再度勃起しようと熱を持つ。その熱は、ぐんぐん高くなって芯を温め、また挿入が可能な硬さにまで膨張した。

「流石におちんちん出しっぱなしはダメだよねー」

——ジイイイイイイイイイツ、

そう言って、鏡子はガチガチに隆起したペニスを、強引にパンツに押し込みズボンのチャックを閉めた。先端から滲み出るカウパーが布を湿らせるのを見て笑っている。

「——、そんな……、これを、何とかしてくれないと……」

射精する事が嫌になっていた気さえするのに、今この瞬間は射精する事に囚われて更なる快楽を求めてしまっていた。それらの言葉が出てくる事が、とても恐ろしい。

「ごめんねー、何か時間が無くなっちゃったみたいで、それじゃ」

「——杏奈鏡子と接触を始めてから今までの記憶、それを封印する」

背後に現れた人物は、俺の顔を無理矢理に真上に向かせて、鼻先に指を突きつけた。

「その射精感は一時的なものだ、家に帰ってひたすら自慰をすれば無くなるだろう、かなりの回数を必要とするだろうが、×××を呼び覚ましたのはお前、自業自得だな」

目眩がし、視界がグルグルと歪み、意識が眠りに落ちる様に薄れていく。

もう何も考える事ができない。

視界が真っ暗になり、意識がぶつりと消えた。



臉が重い、身体が重い。

全身が突っ張って、筋という筋が軽い痙攣を起こしている。

ゆっくり、ゆっくりと視界が広がっていく。

目を覚ますと何故か自分の部屋にいた。

飲み会の現場で意識を失って、どうやってここに辿り着いたのかが分からない。

しかし、自力で帰った以外の方法も特に思い浮かばない。

と、ズボンのポケットに入ったままのスマホが、ブルブルと継続して振動しているのに気がついた。いつからだろうか、この振動で目が覚めたのかも知れない。

着信画面を見ると『田中』という文字が映っていたのでタップする。

「——ん？おお、起きたか、お前トイレで酔いつぶれてたんだが、覚えてるか？」
全く覚えていない。

いや、帰る時にトイレに寄ったのは覚えている、そこから用を足した後、何かをしていた記憶は薄っすらとある、しかしその『何か』は決して思い出せそうにない。

「覚えてないな、トイレに行ったのは覚えてるけど、ちょっと飲みすぎたかな」

「——まあいいや、唯野を家に運んだのは俺だよ、前に一度行った時に住所は分かっていたから、タクシー使って、鍵はポケットに入ってたのを拝借したぜ」

自分が、親友とは言えど莫大な迷惑を掛けている事に驚き、反省した。

「あー、あー、本当にごめん、今度タクシー代を含めて何か奢るわ……」

「はははは、気にすんなって。俺もお前と一緒に酔いつぶれてたしな」

そういえば、あの時は俺よりも酔っていた気がするが、思い返すと田中はいつも帰る時には酔いが覚めている気がする。アルコールの分解が早いのだろうか。

「そうそう、流石に家の中で待たせてもらうのは悪いと思ったから、鍵はポストに放り込んでおいたから、確認しといてくれ」

「了解、ほんと田中がいて助かった」

「その辺はお互い様だ、今日は生『鏡子』様も見れたし、久しぶりに唯野の顔も見れたし、いい一日だったぜ？」

「ああ——、そうだな——」

——ドクンッ、

急に、身体の一部が火を点けられた様に、熱く、熱く、火傷の様に疼いた。

何が起こっているのかはわからない、ただ、無性に自慰行為がしたい欲求に駆られる。

「田中、今日は本当に助かった、明日も早いしもう寝るよ」

「唯野、一応言っておくと今日はまだ土曜日で明日は日曜日だぞ、大丈夫か？」

そんなことはわかっている、でもはやく、このひをけさないと、からだかもえつきる。

「日曜も色々あるんだよ、切るぞ、お礼についてはまた連絡するから、じゃあな」

余りにもぞんざいな切り方をした事に少し心が痛むが、今はそれどころじゃない。

急いで杏奈鏡子モデルのオナホールに大量のローションを注ぎ込み、ベッドに沈む。

いつのまにかガチガチになった男根を一気にホールの奥まで差し込むと、いつもよりも一際強い刺激がペニスを覆い、ゆっくりとしたストロークでもすぐに射精できる。

視覚的刺激が無くても、目を瞑ると彼女の美しい肢体が浮かんでくる。

騎乗位で犯す様に、貪る様に搾り取ってくる彼女の姿が自然と想像できる。

拗らせてると言われればそれまでだが、その位には想っていると自負している。

どんだん上下運動が早くなり、気づけば尋常じゃないスピードで抜いていた。

射精を我慢するという事をせず、ピークに達する度に何度も吐き出した。

非貫通式のオナホールの中身が精液とローションでぐちゃぐちゃになって、時間が経つにつれて粘度は増し続けた。しごいてもしごいても一切萎えることがない。

普段なら二、三度で疲れ果てるどころなのに、むしろ回数を重ねる度に硬くなる気さえする。明らかに身体に異変が起きているが、些細な事で気にも止まらない。

第二章「分岐点」

オフ会から一週間後の休日、目を疑う様なニュースが舞い込んだ。

【超有名セクシー女優、杏奈鏡子が撮影中に転倒、即入院】

アングラな業界であるとは言え、知名度としては世の成人した男性なら知らない人はいないほど。

その有名人が倒れたとなれば、どんなニュースサイトでも取り上げる時代だろう。

例の如く、多数のアフィリエイトサイトは【緊急速報】だの、【信者号泣】だの視聴者がアクセスせざるを得ない様な煽りタイトルでこの事件を掲載した。

慌てて田中や会長にメールを送り事実の確認を試みたが、結局噂の出元は分からず、やきもきする様な想いで仕事をこなしていくしかなかった。

もしそれが事実だったとしても、自分が何かできるわけではない。

あの日、もう一度会う事ができただけでも奇跡的な距離感なのだから。

ファンを辞めると誓ったあの日、もうこれ以上追いかける事をしないと決めたはずなのに、それでも頭の何処かに彼女がいる。

そしてこのニュース、色々とタイミングが悪いと言わざるを得ない。

混乱した状況が、その日の夕方に更に混沌とする事態に変貌を遂げる。

それはとあるメールが原因だった。

会員を辞めた人間には届く筈の無いメールが、何故か受信箱の中に舞い込んでいた。

その文面を見た瞬間、脳を焼く様な怒りが沸き起こった。

（ふざけやがって……）

心の中で言葉を吐き捨て、何度もメール内容を読み返す。

何回見直しても、その狂った文字列が意味を変える事はなかった。

【杏奈鏡子さんのお見舞いに行きましょう！】

見出しに書いてある文章は、さも正しい事をしている風に見えるが、情報公開されてもいない病院にファンクラブ会員が大勢で乗り込む事は、もはや犯罪ではない。

しかも、それを体調不良の彼女が喜んで歓迎できる筈はないだろう。

ファンとは言え、握手会で一度だけ顔を見た程度の他人が、病室に大人数で雪崩れ込むなんて狂気の沙汰だ。

大体の常識あるファンはこれを見ておかしいと思うだろうが、熱狂的かつ短絡的な輩は喜んで見舞いに向かうだろう。

情報をどこからか入手し、こんな馬鹿げた企画を思いつき実行に移す愉快犯の思考。

柳——、あいつが絶対に手を引いているに違いない。

オフ会から引き続き、こうも精神を逆撫でしてくると思わなかった。

阻止しなくてはならない、この事態をこれ以上悪化させてはいけない。

体調不良に陥った彼女が個室の中で、身動きを取れない状態で男に囲まれている。

そんな光景が脳内で描かれて、嫌な予感が無数に浮かび上がった。

そして、首謀者である『柳』、何の力を利用しているのかは知らないが、これ以上は目に余る。

警察沙汰にする事は、杏奈鏡子の事務所が望まないかも知れない。

できれば自分と数人の協力者で何とかしよう。それは正直、甘い判断と思われるかも知れないが、できれば彼女の知らない所で解決すべきだろう。

そうこう考えていると田中からのメールが届いた。

同じ事を考えていたらしく、早速何人かの信用できる会員に声を掛けたい。会長は私生活が多忙なのか連絡がつかないという事だった。

会員にメールを送れるのはファンクラブ運営の一部、その中にも柳の息が掛かった人間がいると思うと、会長がもし居たとしても抑止力にはならないかも知れない。

どう立ち回るのが正解だろうか、集合時間と場所は分かっている。その三十分ほど前に張り込んで、病院に向かう会員と対面する所までは可能だ。

しかし、ここからが問題。

果たして、数人の正義が数十人の無垢なる悪に抵抗できるのだろうか。

結局は警察への通報を切札に持ちつつも、数人の会員を説得して味方に引き入れ、多数派に成り代わり病院へ踏み込ませない様に待ち構えるしかない。

そして、その後は杏奈鏡子本人に会い事情を話し、事務所に病院を変えてもらう事、情報を一部の信用できる人だけにしか話さない事をお願いする。

今から事務所に連絡する事も可能だが、それでは会長に飛び火する可能性がある。秘匿情報を漏らした人間、それを伝播した人間、更に先導した人間。

この三人を、後々会長と共に特定し証拠を集め、可能ならば警察に引き渡す。

そうと決まれば早く身支度を始めよう。まだ、杏奈鏡子と無関係ではないのだから。集合時間までにはまだ時間がある、ひとまず田中と合流する場所を決めよう。

メールを簡易に作成し送信。

すぐに返信が帰り確認する。【病院の最寄駅に十八時半集合】か。

会員達が病院に集合するのは十九時、定められた見舞い時間のリミットは二十時。

一時間あれば何をするにも事足りる、そういう時間設定だと思った。更に時間帯で見れば、見舞い客が一番少なそうだと考えられる。

相手側も、何も考えずにこの計画を立てたわけではないらしい。

ただ、ファンクラブ会員を辞めた筈の俺と、多分会員の中でも一番正義と優しさを兼ね備えた、田中というヒーローにメールを誤送したのは痛恨のミスだろう。

あいつがいれば、多分何とかなる。
いや、多分ではダメだ、絶対に何とかしてみせる、そういう強い意志が必要だ。
これが彼女にしてあげれる最後の応援なのだから。



時間より少し早く駅に到着すると、既に田中はベンチに腰掛けてスマートフォンを触っていた。どれだけ、今回の件を重く受け止めているのか、それだけで理解できる。

「一週間ぶりだね、田中」

「できれば、こんな形で会いたくはなかったのだが……」

田中が、仇敵として再会した親友の様な台詞を吐いたせいで、暗い心持ちだった筈が思わず吹き出してしまう。いつだってユーモアを忘れない男、何で彼女いないんだよ。

「悪い、そこまでヒットするとは思わなかった」

笑いながらごめんと手振りする田中は、いつもよりも精悍な顔つきをしていた。

「いや、いいんだ。ネガティブな感情でいたら、正しい手段が取れないかも知れない」
本当に凄い奴だと思う。

彼女ができたら一番に紹介して自慢してやりたくなる、そんな底抜けにいい奴。

「俺はさ、唯野。あいつらを犯罪者になんかしたくないんだ」

どこか遠くを見ながら田中は悲しげな表情で語り始めた。

「全員が俺の友人だと言うつもりはない、けれど全員他人とも言えない。そんなよくわからない繋がりがあって、なんて言うかさ、無下にできないんだよなあ」

自分と根本的に違う視点、個人主義者過ぎる俺では至れない思考。

そんな、誰にでも優しくできてしまう彼は、どんな生き方をしてきたのだろう。

「わかってる、俺も理由は違うけれどこの件を警察沙汰にはさせない」

正義が違ってても、同じ方向を向いていれば一緒に歩くことができる。

なんとなく思いつきで、手を差し出してみた。

「何だよそれ、これから戦場にも行く気か？」

「気分だよ気分、そんなに変かな」

そう言うと、田中は素早く手を伸ばしがっしりと手を握ってきた。

手を合わせると、ギリギリと握り込む様に力を込めてきて、何かスポーツをやっているのか、それとも現在進行形でやっているのだろうか。率直に言うと、痛い。

「お前の事ただのガチファンだと思ってたけど、そういう熱いところもあるんだな」

「おい……」

ずっと田中のペースが続いている、いつかこいつをやり込める日は来るのだろうか。

緊張感を保ちつつも和やかなムードで時間を過ごしていると、田中が声をかけた会員が一人、また一人と現れた。

頭数としては倍は欲しかった気がするが、信用できる人員だけを集めなければいけないので仕方がない。

「行こう、とりあえず病院の前で待ち伏せる。そして穏便に説得する、暴力は絶対にダメだ。それでも振るわれそうになったら自衛しながら病院内に退避、そこで更に何かされそうになったら迷わず通報してくれ」

田中が言うと、会員の一人が手を上げた。

「一人は連絡係として、常にスマホを通報できる状態にしておく必要があるな、壁にも加わらないで、後ろから状況をしっかりと観察するのがいいと思う」

「説得というよりは交渉した方がいい、こちらに正義がありそちらは悪であると、自分達が犯罪に手を染めようとしている事を認識してもらって、こちらの手札を提示する」
次々に意見が出てくる辺り、さすが田中が信用しているメンバーだ。

ファンクラブの中にも色々な人種がいて、社会人として大成している人間もいる。

そういう人達は、軽率に犯罪染みた行為に及ぶ筈もなく、冷静に判断して田中に協力してくれていた。

同じファンとして、少しだけ誇らしく思える。

「じゃあ唯野、お前が連絡係をしてくれ。この案件は真っ先に通報しようと思えば、誰にでも防ぐ事ができる簡単な事案だ。それでも、できる限り穏便に、かつ慎重に処理できる判断力が必要になる」

田中が真つすぐにこちらを見据える。

「それを心底叶えたいと思っっているのは、多分お前だよ」

買い被り過ぎだなど思った、でも確かに最初からそうしようと考えていた。

「わかった、その境界をしっかりと見極めようと思う」

準備は整った、後はその場で考えて動くしかない。

思考を想定内に収めず、いつでも想定外に備えないといけない。

心構えを新たにし、時間通りに病院の入り口付近で待機。

できるだけ不審にならない様に、散らばって見舞いに向かう会員達の集合を待つ。

集合時間まで後五分、段々と緊張感が増し心拍が早くなった。

運動神経はそこまで高い方ではないが、同じ成人男性一人を制止させる位には力があると思う。

それよりも、スマートフォンで通報する動作を確認する。

番号入力、簡単な住所と病院名、暴力事件発生を伝える。

そして警察到着までの間、院内に協力を要請、暴力の鎮静を図る。

時間まで、後二分——、二分？

強烈な違和感が、一気に脳を突き抜けた。

幾ら何でも集合時間ギリギリまで誰も現れないのはおかしい。もっと前に気づくべきだった、いや、もしかすると気づけたとしても、既に罠に嵌っていたのかも知れない。

「田中、もしかすると集合時間はフェイクだったのかも」

「まじかよ」

普段から集合時間丁度に集まるタイプである田中は、この事に気付かなかった様だ。散らばった会員には後で連絡するとして、ひとまず二人で動くしかない。

「とりあえず病室に向かおう。部屋番号はわからないけど、面会に来た様な顔でいれば受付はスルーできる筈——」

走りたい気持ちを抑えながら、歩いて玄関を通過する。

「多分、参加する人間には別の集合時間が改めて伝えられたんだ。参加可否の返信、それが仲間である事のサインだったんじゃないかな」

「なるほど、『参加する』と答えた会員は信用して正しい時間を教え、『不参加』と返した会員はそれを止める事すら叶わないという事か」

歩きながら、次の行動を考える。

「更に推測だけど、鏡子さんの病室の前には見張り役が立ってる筈なんだ、恐らく同じ会員、中で何が起きてるかは………、あまり想像したくないな」

警察沙汰にしまいと思っていたが、もう全てが手遅れなのかも知れない。

後は、会員達が普通にお見舞いをしている可能性に縋るのみだ。

もし何の問題がなかったとしても、行為そのものは咎められるべきだと思う。だから、穏便に見舞いを終わらせた後、奴らと話し合いをしないといけない。

「いた、あいつ会員だ」

流石田中、会員の中でも一番顔が広いと言われているだけはある。

「俺が少し動かす、その間に唯野、お前が乗り込んでくれ」

頷くと、田中が先頭に立って少し小走りになる。

「よーお前ら、どうしたんだよこんな所で奇遇だな」

ビクツと体を揺らす二人の見張り、間違いないこの中に杏奈鏡子がいる。

田中は勢いよく体を寄せて間に入り、両方の首に腕を回して羽交い締めにした。

「おいなんだっ、やめろ」

「釣れねー事言うなよ、同じファンクラブの仲間じゃねーか、なあ」

その隙に扉の前に立つ、この中で何が起きていても冷静に対処するんだ。

此処には他にも大勢人がいるかも知れないが、危険になったら大声を出せば助かる。意を決して、扉のハンドルを握った。

「おっとー、集合時間はまだだぜ？唯野」

癪に触る声、こちらに向かつてくる人間を確認せずとも、それが柳だと分かった。

「柳……、お前はやっていい事と悪い事の区別がついていないみたいだな」

「なんのこただ？」

惚けているのか、心底悪気はないのか、どちらにしろこの扉を開けば全てわかる。

「いやいい、話す意味がない事を忘れてた」

「イラつく言い方するじゃねーか唯野、じゃあ開けてみるよ、あんまり騒ぐなよ」

言われなくても——そう心の中で返してゆつくりとドアを開けた。

「——ありがとうございます、ご心配をおかけしました」

その優しい声を聞いて、すぐ様通報できる準備をしていた手が一気に脱力した。

気を張っていた全身がゆつくりと自然体に戻って行く。

「お見舞いしたかったんだよ、その気持ち位汲んでくれてもいいじゃねーか」

目に映ったのは、大きな個室の中で列を形成し一人ずつ挨拶をする会員の姿。

大分人数が捌けたのか、後は十人程度が並ぶだけだ。

少しだけ息を吐いたが、それだけではこの問題の根本は解決しない。

杏奈鏡子の懐の深さが無ければ、本人にすぐ様通報されていたのだから。

無事で済んでいる事の方が奇跡的だという事だ。

「どうやら、大事にはならなかったみたいだな」

見張りの会員と、遅れて到着した会員達を連れて田中が現れた。

「おー、お前らもご苦労なこったな」

「誰のせいでこんなに疲れてると思ってるんだよ、やなぎい……」

田中が口元は笑いながらも、忌々しそうに柳を睨みつけた。

「いやー、誰かさんが俺のやる事を邪魔してきそうな気がしてなー、悪いが罨を張らせてもらったんだ、いやー悪い」

全く反省する気が無さそうに謝罪する柳に呆れつつも、三度目の生で見る杏奈鏡子に少しだけ気が逸れた。

「この無茶な企画のせいで、もし通報されてファンクラブが潰れたらどうするつもりだったんだあ？唯野は辞めたが、俺はまだ辞めてねえぞ」

「会長は堅物だからなー、俺が別の奴を作ってやるよ」

「阿保か、その前にお前が捕まるだろうが」

「馬鹿だな、警察に俺を捕まえる事ができるわけないだろ？」

自信たっぷりの発言に、流石の田中も啞然として開いた口が閉じなかった。しかし、嘘を付いている風でもない、本当は俺達が思っているよりも危険な奴なのかも知れない。

「そろそろ時間か」

最後の見舞いが終わりちようど十九時を回った時、ばたんと『杏奈鏡子』が倒れた。
「鏡子さん!!」

「騒ぐなって言っただろ、唯野よー」

これが声を出さずにいられるか、入院中に急な昏倒となれば異常事態に違いない。
「ただ眠ってるだけだろうが、薬がちよつと良く効いただけで騒いでるんじゃない……」

確かに、眠気が急にきて伏せた様子にも見えるが、余りにも様子がおかしい。

（薬？まさか、このお見舞い企画の後に、眠らせて何かをしようとしていたのか？）

俺たちに教えられていた間違った集合時間は、その為の工作か……!!

「ナースコールを早く!!」

その時、ベッドの枕側の近くにいた会員に声を掛ける——が、そのすぐ後に、腹部に重い痛みが広がった。柳は、俺の腹を抉るように膝を捻じ込んでいた。

「だからさー、うるせえんだよお前、少し黙ってる」

慌てて手でスマホを操作しようとするが、腕からはたき落とされて部屋の隅に蹴飛ばされる。手慣れているな——という雑感が浮かぶ位にはゆっくりと時が過ぎた。

「唯野大丈夫かッ——、やなぎい、テメェッ!!」

田中が叫ぶ声が聞こえるが、床に顔を向けている所に上から足で踏みつけられ、グリグリと頭を床に擦り付けられた。更に、腹部の鈍痛のせいで上手く呼吸ができない。

「お前らッ——、図つてやがったのか……畜生がッ」

部屋の明かりが消され、姿は見えないが誰かが何度も殴りつけられる音が聞こえる。

ようやく目が慣れてくると、羽交い締めにされていた筈の会員が、逆に田中を拘束し、

『仲間だと思っていた連中』が、田中の全身に打撃を与えているのが見えた。

「集合時間通りに来てくれればなー、俺たちが鏡子をレイプする所が無傷で拝めたって
いうのになあ、下手に足りない頭を使うからそうなるんだよなー、なアッ!!」

最後の一発と言わんばかりの、大振りの蹴りを頭が襲った。

瞬間的に、頭を守ろうと両腕が動いたお陰で、少しだけ衝撃を減らす事ができたが、
それでも十分に痛い——ふざけている。

「面会終了時間まで後一時間、良かったなー唯野、生で鏡子のレイプショーが見れるぞ
ー、ハハハハハハッ、傑作だねーあの時俺の誘いを断らなかつたら、鏡子とヤれたって
いうのになー、ギャハハハハハハ」

ゲラゲラ笑いながら膝を叩く柳。

散々煩くしても、杏奈鏡子が起きる素振りはない。相当深く眠らされているのだろう。

「おい柳、約束は守ってくれるんだろーな」

仲間だと思っていた畜生が、俺達を売った対価を頂こうとしている。

「おー、そうだな、まあ助かったと言えば助かったか？その口使っていいぞー」

「やった！」

いそいそと慌ててフアスナーを下ろし始める会員。

「そんなに嬉しいか？散々色んな男のちんこしゃぶった口だぞ？」

売女の唇に価値は無いとでも言いたげに、喜ぶ会員をやれやれと見下した。

全ての言葉に苛立つがそんな事は今どうでもいい、彼女を助けなければッ——、

「ああ、この口に僕のちんこを触れさせたら、はあ……何と神々しい、ひひひい」

下腹部を剥き出しにした会員が、ゆっくりと彼女の口にペニス近づけている。

「やめろおおおお——むぐうふ……ふうぐ……わめえおお……」

「だからお前さ、うるせーんだよ黙ってる」

叫び声を上げた瞬間に、背中に体重が乗り口をガムテープで乱雑に塞がれる。

「これ以上手間かけさせんなよー？お前もこのパーティの大事な大事な主賓だ」

体を引っ張り上げられ、視界に彼女と会員の姿を見せつけられる。

「これが最初のショーだ、しっかり見るよー？あ、ちよつと待てお前」

会員のペニスがあと少しで唇に着くという所で、柳はそれを制止した。

「へ？うおい、ここでお預けかよ……」

「時間は五分しつかりやるから、待ってるって、面白い事考えたんだよ」

柳は、口内の唾液を啜り上げ、楽しいな〜とご機嫌な声を上げた。

「よいしょつと、結構重いなこの女、よしお前手え貸せ」

何が始まるのか分からないうちに、杏奈鏡子が自分の足元に眠ったまま動かされた。

「おい、俺が支えといてやるから、唯野こいつにイラマしていいぞ」

（——頼むからこいつの口を誰か塞いでくれ）

いや、誰か殺してくれたらそれでいい、無残な姿に変えてくれ、俺の命をやる。

「反応しろよー。お前相変わらず陰気くせーなあ、断るなら首を横に振れよ、お前の代

わりにアイツが存分に楽しむだけだからよー」

どちらを選んでも、俺が苦しむ選択を与えてくる。ここは地獄か何かか。

「さあどつちだー？憧れの杏奈鏡子の穴を好きにできるチャンスだぞー」

眠っているのをいい事に、口角から指を突っ込んで杏奈鏡子の口を大きく広げる。

（——選べる訳がないだろうがッ）

こんな地獄絵図になっても、目の前にいる女性は天使の様な美しさだった。

どうして、俺と彼女はこんな目に遭わないといけないんだろう。

「はーい時間切れー、お前絶対やせ我慢してるよな、すげえ悔しそうな顔してんぞー」

俺の表情を見て、ニコニコと笑う柳。

「おいッもういいぞ、五分間好きにしるー」

こんな不毛なやり取りで柳は存分に満足したらしい。

「何でこんな事するんだ？って顔だなー唯野」

柳の後ろで、杏奈鏡子の口に会員の亀頭が触れる。

「うふう……むうんう……」

呼吸が妨げられて息苦しそうに嗚咽を漏らす鏡子。

「ふあああああ、こ、こここここれ、が鏡子様のおおおほほほ」

「静かにしてくれよ、お前のきもい声なんか誰も聞きたく無いの、去勢すんぞ」

ジャキンツと、小型のナイフを懐から取り出した。

「すいません……、うふうあああ……」

会員はペニスをゆっくりと口内に挿し入れていく。それはビデオなら何度も見た光景で、いつもなら喜んでオカズにしている筈で、今は吐き気がする程に胃が捻れた。

「お前の彼女でもねーんだからさー、そんな顔すんなよ唯野お……」

俺が苦悶の表情を浮かべているのを見て、心にも無い慰めの言葉を口にする柳。

そんな事より、お前を呪い殺したいという感情で一杯だ。いや、それよりも自分の無力さに舌を嚙んで死にたくなっている。大切な人を守る事のできない出来損ないめ。

必死に腰を振るんじゃねえ、ふざけんな相手は寝てるんだぞ、呼吸困難で死ぬぞ。

「さっきの続き聞きてーだろ？何で俺がこんな面倒くさい事をしているか」

ペチペチと頬をナイフで叩かれ、恐怖心から首を縦に振ると、テープを剥がされた。

「お前は覚えてないかも知れねーけどさー、俺が鏡子と初めてやった時のお前の反応がイラついた。それだけか？って思うかも知れないが、心底苛ついたんだよなあ」

柳という人間を俺が認識した瞬間に、嫌悪したその時に、相手も同様の感情を抱いた。

その感情が、自分と、親友と、好意を持った人間に対する攻撃に繋がったと。

逆恨みでしかない。そんなふざけた理由でこんな暴挙に至ったという事が、理解できないし、全く納得ができない。でもそれを今考えても仕方がない。

「そのことは——、本当に申し訳ない……だから、もう止めてくれない——つつ」

顔に僅かな感触と、液体が滴るような感覚があった。床に少量の血飛沫が飛んでいる。

「言い方考えた方がいいぞー、唯野。傷だらけの顔になりたいかー？」

スッパリと切られた頬が、ヒリヒリと痛む。

「本当に……、申し訳ありません……、でした、ですから止めて、ください……」

「いやー、わざわざこの場を作った甲斐があるなー、こんな顔で謝ってくれるなんて大喜に満ち溢れた声。

本当にストレスを解消するだけの為に、柳はこの状況を作り上げ、楽しんでる。

「ま、やめねーけど、もつと苦しんでくれー、俺を苛つかせるってのはそういう事だ」愛する人達を傷つけられた事、謝罪させられた事、全てが心臓を激しく弾ませる。

キれる、という表現はとても安い、今まさに堪忍袋の尾が切れていた。

「あ、あ、あ、きもちいいいい、きもちいいいい、うっ」

会員がオナホールに射精をしているかの様に、自分の腰を鏡子の顔に押し付けた。

「げえうふ……、ごふっ、げふ……ハアハア……」

流石に口内に異物と液体が入り、生存本能が無理矢理に彼女の意識を取り戻させた。目を覚ました彼女は、今何が起きているのか分かるはずもなく、周りを必死に見回す。

「あ……、ああ、えっと、撮影、じゃなくて、えっ、口の中、苦い……うふっ」

会員の手を力無い腕で何とか振り払い、ベッドの上に精液を吐き出した。

「加減知らねーなあお前、鏡子が起きちまったじゃねーか」

「も、申し訳ない、ふひい」

快楽を堪能した会員は猛スピードで着替えて病室を出て行った。

ふと、部屋の隅で田中が顔をパンパンに腫らして横たわっているのが見えた。

怒りはとうに限界に達していたと思っていたが、更に上がある様だ。

「よし、鏡子が目覚めたところで、次のコーナーいきますかー」

ナイフだ。あのナイフを奪い取ってあいつの胸に突き刺す。

何度も、何度もあいつの顔が歪んで、何も叫び声が上がらなくなるまで、何度も刺す。

後はどうやって奪うか、体の自由は二人の成人男性に封じられている。力は、全身に

入るまでに復調した。

「おい動くなよ、こいつを殺しちまうぞ？」

反撃のタイミングを伺うも何も、柳にはその機会を与える気はなかった。

彼女の首元にナイフを当て、肌を裂かない柔らかなタッチで動かしていく。

「……そんな事はやめてください」

鏡子は、恐れている風ではなく、何か悲しい事があったかの様な低いトーンで声を出した。ひどく冷静で、それ故に不自然でもある。

「ほー、物怖じしないか、さすが普段から汚れ仕事をしている奴は、肝の座り方が違う」

ペシペシと、刃の平で頬を叩く。

「おい、お前ら鏡子をベッドに縛り付ける」

病室に残っていた数人の会員が、鎖付きの腕輪を持ち両腕をベッドに括り付けていく。

———どうやら、本格的なレイプショーは今から始まる様だ。

「あんまり暴れないなー、もしかして説得できると思ってるのか？」

余りにも冷静に、拘束具を取り付けられている彼女に違和感を持ったのか、柳は気に食わなそうに口を曲げた。

「身体をどれだけ辱めても、私は何も感じません、面白くないと思います、それに———」

パーン、と頬を叩く乾いた音が室内に響いた。

「それは俺が決める」

自分に何が起きたのか分かっていない様子の杏奈鏡子は、頬に感じる痛覚をゆっくりと自覚し、余りの事に何も言えなくなっていた。

そして、俺の思考が怒りに染まり切った。

「おい、次の奴こいつに中出ししろ、何連発でも時間内ならオーケーな」

「それだけは！絶対にやめてください、中は、ダメなんです……！」

血相を変えて拒絶する鏡子を見て、柳は新しいオモチャを見つけた様な顔をした。

「なんだお前危険日なのか、それはめでたいなあ、誰の子を産みたいか選ばせてやるよ」

「違います、でも中は……」

「はい、この子に種付けしたい奴挙手」

一気に上がる手に、蒼白になっていく鏡子の顔色。

「本当に、本当に、やめてください……、でないと……」

不安に顔を歪ませて、必死に腕を動かそうとするも既に拘束されている。

「パンツ脱がしまあああああああああああす」

「テンションたけえなあ……、それ綺麗にとつとけよ、後でオークションするから」

バタバタと脚を動かすも、それを掴まれてスルリとショーツが脱がされていく。

柔らかな太ももを通り、細っそりとした脚を潜り、足首から外されると、綺麗な

女性器が見えた。濡れているせいか、暗がりでも僅かな光を反射している。

「上手に脱ぎ脱ぎできましゅねええええええ」

おかしな声を上げる人間しかいない、本当にこいつらはファンだったのだろうか。

「早くしろよー、後がつつかえてんだから」

自分の性器を露出させた男達が、ぞろぞろと周りに群がっている。強姦の現場というのは見るもおぞましい。

「一番金を積んだのはオレだ、オレが最初だ」

普段はしつかりとした職業に就いていそうと思っていた男。確かに金払いはいいのだから、こんな下らない人間だとは人の内面とは測れないものだ。

「すぐに、気持ちよくしてあげますからねー、鏡子さん……」

全力で愚息を擦り上げ、準備が不十分かも知れない腔に充てがい一気に突き刺した。

「やべええええええ、これがあの、あこげああれのああああはふああああ」

常軌を逸した唸り声に、柳も呆気に取られた顔をしている。

入れたばかりとは思えないほどの高速の腰振り、それを受けている鏡子も何の喘ぎ声も出さずにくったりとしている。まるで、気を失っているかの様な。

「はははは、あの鏡子が実はマグロでしたっていうのは、割とスクープぞぞ」

こんな事でも喜べる柳は、精神が捻じ曲がっているとしか思えない。

しかし、そんな事はどうでもよくなる様な事が、その直後に起きた。

サキュバスバスター

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)



「あああつあああつあああつあああああああああつあああああ
突然、生で挿入していた男が身体を大きく痙攣させて呻いた。

「うるせーなあ、それだけ気持ちよかったかよ、童貞か？」

「ああああつあああつあああつあああああつああああ」

痙攣する男に柳の声は全く届いていない。

すると男は、事切れたかの様にぐったりと倒れた。その光景を、どこかで見た事があったが思い出せない。挿入していたペニスを外れ、鏡子の膣から精液が漏れ出す。

それを、勿体無いとでも言いたげに指で丁寧に取り、口に運び遊ぶ。

「あーあ、だから生は駄目ですよって言ったのに、クスッ」

もう目の前の事態を脳が処理する事はできなかった。

SF映画を観ながらポップコーンを無心に口に放り込む様に、何もわからない現況を見つめながら、ただただ呼吸だけを忘れない様にしていた。

怒りの感情も悲しみも後悔も掻き消えて、驚きと恐怖の感情が上書きされていく。

拘束具が不自然に外れ、彼女はうーんと気持ち良さそうに伸びをした。

それは見た事のない光景。目の前の杏奈鏡子らしき人に『翼』と『角』と『尻尾』の様なモノが生えた。ふと頭に浮かんだのはいつか見た悪魔のコスプレをした彼女。

それはそれは美しい、人の命を糧とする『サキュバス』の様な出で立ちをしていた。

「ははははははッ、ふざけんふざけん、何なんだよお前、何なんだよ!!」
豹変した杏奈鏡子を目の前にして気が狂ったかの様に猛る柳。

手に持ったナイフを彼女に向けるが、動揺してプルプルと刃先が震えている。

「あなたは、その危ないのを床に置いてくれたら、遊んであげますよ?」

凶器を向けられても余裕綽々で対応する彼女。先ほどまでとは打って変わって、立場が一気に入れ替わった。人差し指を立てて、反対の手で手淫のジェスチャーをする。

「はは、お前俺を見下してるのか?なあ」

それでも尚、歯向い続けるその不屈さは、普通の人生を送っていれば目覚ましい成果に結びついたのだろう。それほどに、柳は食い下がり続けた。

「私、血生臭いのよりエッチな臭いの方が好きなんです、だから、ね?」

鏡子は、まっすぐ睨みつける柳に対して、目を綻ばせて見詰め返した。すると、柳は手元が狂ったのかナイフを床に滑り落として、不自然に地べたに這いつくばった。

「おおッ、おおお、お、お前、何しやがった——、何しやがったあああッッ!!」

「もー、病院ではお静かに、ね?」

そう言うと、叫び声の主が口をスッパリと閉ざした。よく見ると、もごもご何かを口に出そうとしているが、猿轡を嵌められているかの様に息を僅かに漏らすだけだ。

全身を微動させているのが、一層ホラー染みた雰囲気醸し出している。

「ふー、やっと静かになった」

額に掻いた汗を拭く様な仕草で、一仕事終えた鏡子は息をゆっくり吐き出した。

その後、きよろきよろと周りを見渡して、次なるターゲットに狙いを定めている。

「もっと精液欲しいよー、その君達こっちおいでー」

艶っぽい声で手招きする杏奈鏡子らしき女に、釣られ近寄っていく会員達。

人間離れた容姿と行動を目の当たりにしても、余りある魅力が男達を寄せ付けて離さない。一度捕まってしまうえば、食虫植物の様に二度と逃げられないだろう。

「はい皆さんいい子ですねー、さーズボン脱いでー、パンツ脱いでー」

明らかに口調が以前と違うし、何より化け物地味な角や羽の説明がつかない。

ただ、そんな事は些細な問題とでも言う風に、誰もが言う通りに衣服を脱いでいく。傍から見れば一人だけ影響を受けていない様に見えるかもしれないが、俺も腰が抜けちゃって物理的に動けないでいるだけだ。

身体と心はすぐにでも、彼女の前で全てを曝け出したいと思っちゃっている。

あの悦楽の権化とでも言える女神に、全てを奪って欲しいと願っていた。

だって、あの指に胸に口に膾に包まれたら、とても気持ち良さそうだから。

「一番早く脱げる子は誰かなー、あ、君が一番?すごく大きくなってる、見せて?」

大振りで頷く男を見て笑顔になる鏡子、その口調は保育園の先生の様だ。

「えらいえらい、してあげるね、えらい、えらいぞー、他の子はおすわりだよ？」
ペニスの先端から漏れ出る先走りを使って、亀頭を手の平の部分で摩擦すると、ぐち
ゆぐちゆと卑猥な音が鳴る。

「ご褒美あげないとね、あああーんつ、はい、私の唾液でぐちよぐちよになりました」
先よりも格段にいやらしい音が響き渡り、手で亀頭を磨くスピードが段々と早くなる。
「そろそろ射ちゃう？いいよー、タママも揉み揉みしてあげるねー、ほら？」

鏡子が鞆丸に手を触れた瞬間、急に指が光り始め男はビクビクと身体を反らした。

——それは紫かピンク色の様な発光をし、玉の周りを覆う様に包んだ。

「はい、じゃあ最後は先つちよ啜えてあげるから、ふあんふあつてふあひて？」

金玉をゆっくりと揉みしだきながら、裏筋を人差し指で滑らかなタッチで摩りあげ、
先っぼだけ口付けする様に啄む鏡子。

「ちゅっ、ちゅぼっ……、むちゅう、ちゅっ、ちゅぼちゅぼ、ん、射ちゃう？いいよ、
射して？射して？射して、全部、れるれるえお、空になるまで、射しひつへえええ♡」

「いへいふいふいwふいいういういういいういいういいういw」
いびつな言語を口から溢れ返らせて、男は射精し始めた。

「うん、うん、ちゅっちゅっ、むちゅう、ちゅぼうちゅぶ、凄いな、あ、ダメ、もつと射
さなきや駄目、まだだよ、むちゅう、もつともつと、うんうん、ちゅっ、そうだよ」

「しひしうえひえふえいえっひあなあいいいししひいあしし」

先程まで鏡子に愛されていた男はピクリとも動かなくなり、ベッドの上に倒れた。

「凄いな、偉いな、ちゅっちゅっちゅっちゅっ、いい子いい子、もう一息、そう、偉いな、頑
張って、頑張り、頑張り、ちゅっちゅっ、ちゅっ、ちゅっちゅっちゅっ、ちゅぼん、ふー」

ゴックン、と大きく喉を鳴らし、鏡子は一気に大量の白濁を飲み干した様だ。少しだ
け精液が口の端からゆっくりと垂れ、牛乳を一気飲みした子供の様な口周りになる。

その汚れた口周りを舌を巧みに使って全て綺麗に舐めとった彼女は、幼さと成熟感が
入り混じった、いつも通りの杏奈鏡子本人に見えた。

思い返せば、作品と実際に会った彼女は中身が異なっているかの様な雰囲気がある。

普段の鏡子が持つ聖女性、作品の鏡子が魅せる娼婦感。予想でしかないが、悪魔の姿
に変わった時から、性格が切り替わったかの様に全てが豹変した。

それはもしかすると、精神分裂の様なものなのかも知れない。

「次行くよー、次は何と大チャンスです。おてとー、おくちとー、おむねとー、おま
んこでー、四人同時に可愛がってあげちゃいまーす、おいでおいでー」

行儀よく我慢していた子供達が、食後のデザートに一齐に飛びつく様な光景が眼前に
広がる。先程大量射精をして、その後急に倒れた男の異様な状態を見ても尚、男達は彼
女に群がって行く。

「みんなえらい、待ってる間もおちんちんしこしこして、元気いっぱいにしてくだんだー、一番大きい子は誰かなー、君かな？じゃあ君がおまんこね？後は君、君、君の順番で早いもの勝ちだー、よーいどん！」

一番の男が床に身体を倒し、二番目の男が胸にペニスをぐりぐりと押し付け、三番目の男が彼女の指をペニスに絡ませ、四番目の男は彼女の頬にペニスを擦り付けた。

「そうそう横になってくれたあなたがおまんこ担当でえ、うんっ、でーおっぱい担当があなたでー、あん、おててがあなたー、そう、ふいみふあおふちい……」

騎乗位で男に跨り、眼前に現れた三つのペニスを全身で同時に抜き始めた鏡子。

身体の扱い方を心得ているからこそ、四人の男を効率よく犯す事は造作もない。

多数ある作品の中で輪姦物は多くはないが、それも大ヒットしていたのを思い出した。

「君、すぐおっぱいは僕のだーって、胸におちんちん押し付けてきたね、いいよ？よだれおっぱいに垂らしますよー、れるおとおお、ほらヌルヌルの乳首気持ちいいー、あん、したちちも気持ちいいよねー、あ、おっぱいに埋まっちゃったねー、ぐちゅぐちゅだー♡」
乳首で亀頭を思いつき刺激したり、下乳の隙間にズリズリと挟み込んだり、乳肉にめり込ませて先端部をグニグニと刺激した。

「よしよし、さつきまでいい子でよく我慢できたね、偉い偉い、輪っかで擦り上げるのがいい？それとも包む？うんうん、でもー指で擦られるのもどう？、ふふ、可愛い♡」
手が一番簡素になりがちだが、彼女はそれも工夫を凝らして一度も同じストロークをせず、微調整をして常に変化を与えて男をどんどん追い詰めて行く。

「ごめんね、他の子とおしゃべりばかりしてて、おちんちん冷えちゃったかなー、ちゅう、ぼっ、お口の中あったかいでしょー、ちゅうぼっ、ぶちゅっぶちゅっ、気持ちいい？さきつぽもいっぱい舐めてあげるね？れえおお、れるれるお、ちゅっ、ちゅうっ♡」

喋りながらのフェラチオは流石に無理があるので、他の男と一方的な会話を楽しんだ後に、ノーハンドフェラを始めた。頬の内側を使って亀頭を擦ったり、先端部を執拗に舌で責め抜いた。

「おまんこ、君の精液のお陰ですごくあったかいよー、挿れた瞬間に射しちゃったね、なんていい子なのー、でもー、もっど、うん、いっぱい、あん、射さないと、あう、駄目なんですからねー、ほらっ、ほらっ、もっどっ、射してっ、射してえっ、中で射して♡」
無残にも膣壁で瞬殺させられていた男は、その不名誉を得た後もパンツパンツとプリンとした美尻を下腹部に叩きつけられ、リズムカルに、かつ妖艶な腰の動きに翻弄され続け何度も射精の絶叫を上げた。

『あ hksj が klgslk しや sd ちや jksfd あ hlkh … あ fih な』

そして、全員が意味不明な断末魔を上げた後、何もせず、何も言わなくなった。

這っていた柳も既に奇声をあげており、この光景を見て発狂している。

そんな中俺は、上半身の自由があるお陰で——、何度も何度も自慰に興じていた。床には、自分で吐き出した白濁液が溜まりを作っている。

もう、何かを思考する事は諦めていた。

それよりも、目の前で起きている酒池肉林たる光景を網膜に焼き付けて、体内に溜まった肉欲を掻き出す事に終始しなければいけないかった。

どんだん欲だけが溢れて、もう手がつけれられない。

早く、早く——あ、

「あららー、駄目じゃないですかぁ……」

いつの間にか、杏奈鏡子らしき何かが目の前に立っていた。

全身に男の精を受け止めた彼女は、恍惚とした表情で自分の秘部を弄っている。

どうやら、俺が精液を床に放出した事にご立腹の様子だ。

「いけませんよ？全部私に注いでくれないと、こんなに出してしまつて、ああ……」

両手でそれを大事そうに掬い上げると、極上のスープを味わうかの様に少しだけ音を立てながら上品に飲み干した。

そして、床に残った精液も猫の様にチロチロと舌で舐め回る。人が土足で歩いた床だろうと気にもしないで、精液の落ちた部分だけ磨く様に綺麗に舐めとる鏡子。

常識的な人間としては、その行為が酷く汚く見えるが彼女にとっては違うらしい。

「ちゆる……ふう、やっぱり出来立て射したてのザーメンじゃないと、モノタリナイ」

顔を上げた鏡子が、じわじわとこちらに向かってくる。

「あの時は逃しましたけど、今回はもう逃げられませんよ？私のご馳走君♡」

どうやら、俺はこの化け物に一度遭遇していたらしい。

俺をご馳走と呼ぶ杏奈鏡子は獣の様に俺の眼前に迫る。

よだれと精液が混ざったものを口の端から滴らせ、口角を吊り上げる鏡子。

「逃げても良いんですよ？私と追いかけてこみましょう、楽しいですよ？」

そう言われてようやく自分が死の淵に立たされている事に気がつく。

このまま座っているだけで、彼女は俺の命を全て貪り尽くすのだろう。

偶然誰かがこの部屋を訪ねてくれれば良いが、面会終了時間まではまだ遠い。

身体を動かそうとするが思うように動かず、腕が痙攣して後ろに倒れてしまう。

「あはっ、私を受け入れてくれるんですか？嬉しいです」

四つん這いで近付いて来る鏡子が俺の上に覆い被さる。

口から垂れた液体が俺の顔に数滴飛び散るが、それを拭う事もできない。

大型の肉食動物と対峙したら、こんな風に全身が硬直してしまうのだろう。

「いただきます♡」

その時、デジャヴの様な閃きが頭に走ったが、それも掻き消えて、すべてを奪わ——

「そこまでだ、×××」

声の主は病室の扉を開け放ち、鏡子らしきモノを何か別の名前で呼びつけた。

光が部屋に射し込み、むせ返る様な精の匂いが少しだけ薄れる。

「またお前か、私の食事を二度も邪魔するとはいい度胸だな、殺してやろうか」

「別に邪魔をするつもりはない、もうそろそろ看護師の巡回の時間だ、退け」

部屋に掛かった時計を見ると、見舞い客が締め出される時間の二十分前だった。

「後片付けもしなければならぬ、死体はこちらで回収する、部屋を頼む」

その冷たい声の主はスーツを着たキャリアウーマンの様な出で立ちで、テキパキと事態の収集に取り掛かっていた。死体？嫌だそんな言葉は聞いていない、キイテイナイ。

「折角お腹いっぱいになったのに、力使いたくないな」

「この程度の処理、微々たる消費であろう」

「まーねー」

鏡子らしきモノは、角や羽や尻尾を体内に引っ込めて、手のひらを自分の胸に当てた。

パチンツ、鏡子は指を鳴らすと、乱れに乱れた部屋が整然とし、部屋の明かりが付き、裸だった彼女はパジャマを身に付け、倒れていた田中が唸る様に叫び目を覚ました。

一体どういう原理なのか全く判断がつかなかったが、ここであつた事のすべての痕跡が跡形もなく消えていた。倒れた会員達は、スーツの女が一箇所に集めている。

「唯野、これは……、一体」

今まで何をしていたかわからないといった顔の田中は、周りをきよろきよろと見渡して、ベッドの上で行儀よく座っている鏡子に驚いている。

「さて、後は君たちの記憶を消さないといけないな」

「×××」

田中と俺は揃って間の抜けた声を上げた。

「君は、確か二回目だな、複数回の消去は情報が残る可能性が微妙に存在する。丁度良い、この男を口実にして所属する組織の人間全てを葬ってしまおう。今回の件もある」

その組織の名前は、もしかして——、杏奈鏡子を愛する会。

「それ、私も参加したいな」

「×××、お前は加減を知らないから無理だ、他のサキュバスも腹を空かせている」

「でも、鏡子に行くんでしょ？」

所属する人間全てが、葬り去られる——？

「さあな。そろそろ時間だ、×××こいつらの記憶を奪い去れ」

「んふ、楽しみが増えた」

自分の胸に手を当て何かを呟く鏡子は、指を俺と田中に向けた。

すると、光が視界を覆い尽くし、その光は今考えている事も、消して——

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）



目を覚まし、枕元に置かれた時計を見ると平日の午前七時。

身体の疲れが取りきれない様に感じるのは年齢的な問題だろうか。

昨日は、一日中家にいて、えっと特に何もせずゴロゴロしていたんだっけ。

出勤までには少し時間があるので、コーヒーを淹れてPCに電源を入れる。

巡回しているサイトを次々と開いていくと、目を引くものを発見した。

ネットニュースサイトで、『杏奈鏡子活動復帰』と、大々的に公開されていた。

倒れて入院してから二日で復帰、彼女のバイタリテイの高さを思い知らされる。

（あの人が頑張っているから、自分も弛んでいる訳にはいかないな……）

くだらだらとPCを触るのをやめる。

朝食は、トーストとベーコンエッグを焼く事にした。

テレビのスイッチを入れ、朝のニュース番組を流し聞きしつつ調理をしていく。

部屋に充滿していく食欲を唆る香りに、思わず唾液を飲み込む。

簡単な味付けだけして出来上がったそれを机に並べつつ、そういえば朝刊を取りに行

くのを忘れていたと、寝ぼけながらに思い出した。

料理が冷めない内にと急いで朝刊を取りに玄関に向かう。

郵便受けを開けると、新聞と共に一通の封筒が入っていた。

差出人は会社名で『SCV』と書いてある、それは杏奈鏡子の事務所だ。

何かの抽選に応募した記憶も無かったが、中身が気になり乱雑に開ける。

すると、二枚の紙が綺麗に折り畳まれて封入されていた。

慌てて取り出し広げる。

『おめでとうございます、厳正なる抽選の結果、貴方を我が事務所の名物企画である、

【サキュバスバスツアー】に素人男優として参加していただく事が決定いたしました。

今回は、事務所の中でもトップの人気を誇る、『杏奈鏡子』の参加も決定済みです。

詳細や必要事項は別紙にて、貴方のご参加を心からお待ちしております。』

第三章「蕾の少女」

何か忘れ物がないか最後の確認をする。

着替えワンセット。歯ブラシや櫛は備え付けがあるから必要ないだろう、後はシェーパーと検査票、何となくだが亜鉛のサプリメントを鞆に忍ばせた。

オフ会から一週間ほど後に届いた封筒には、長年の宿願である杏奈鏡子のAV作品に出れる、という旨が書かれていた。

土日両日を使ったアダルトビデオの撮影。それは胸踊るものでありながら、初めて経験する事が多過ぎて少しばかり不安が残る。

しかし、この機会は自分がずっと望んでいたものであり、不参加という選択肢はあり得ない。それだけ、長年待ち望んでいたものだった。

（よし、こんなものか）

身支度を終えアパートを出ると、一週間前よりも湿気を含んだ空気が肌を包んだ。

夏が本格的に暑くなる前の、じめじめとした気候。それは、曇り気味な天気の子のせいでもあった。

駅前のバス乗り場とは離れた場所にある少し広めの公園、そこが集合場所だ。

割と早めの時間に着いたにも関わらず、そこには二十人程の男が待機している。

何となしに周りの人だかりに目をやると、どこかで見たことのある様な顔が見えた。

どこで会ったのかは思い当たらなかったが、特に気にすることでもないか、と――

「よー、唯野」

「田中!!」

それがきっかけになって思い出す、さっき見た男は杏奈鏡子ファンクラブの会員だ。

「いやー、ビックリしたよなー。まさかあの鉄板タイトルに参加できるとは」

「ま、まあね」

思わぬ人物の登場に、浮かれていた頭をガツンと叩かれた様な感覚になる。

なぜなら、よく見るとそこら中にファンクラブのメンバーらしき人が見える。もしかすると、今回の招待は出来レースなのではと思いが至ったからだ。

そして、そんな無茶苦茶な話をこり押しできそうな人間といえば、一人しか思い当たらない。柳だ、あいつがファンクラブをこの企画にぶち込んだのでは……、いや、

「唯野、多分柳にそんな力はねーんじゃないか？」

考え込んでいると、田中が手をばたつかせてこちらの心配事を霧散させた。

「だってそうだろう、大手事務所の大物女優がわんさか参加するんだ。どれだけの金が動いてるかわかったもんじゃない、それに当の柳の姿がどこにもねえ」

「そりゃあ―――そうか」

この作品のファンなら誰だって応募する、それが偶然重なっただけだろう。

「んな事より緊張してないのか？今から隣にめちやくちや可愛い女の子が座るんだぜ？」

そういえば、他人事に思っていたが自分も素人男優として参加するんだった。

そして、俺の脳内では隣に杏奈鏡子が座るものと勝手に思い込んでしまっている。

他の女優さんに当たる可能性の方が遥かに高いのに、何と間抜けなのだろうか。

「その顔、完全に想定に無かったって感じだな。まあ相手はプロだ、ある程度は受身でもなんとかなるだろうよ」

困った奴だなーと、田中は思慮が足りない俺を呆れた顔で見放した。

「緊張して全く機能しなかったらどうしよう……」

考えもなかった展開。

先程までの落ち着いた心持ちとは打って変わり、足が貧乏揺すりを始める。

「さすがにそうならカメラは回らないかもなー。まあ体と心の問題は自分では中々コントロールできねーし、それを巧く機能させるのもまたプロのスキル、だ」

わははと笑う田中は、対照的に全く緊張していないようだった。

本人談では交際経験は一切ないという事だったが、どこからその自信が来るのだろうか。

「いやー鏡子さんもいいが、もし綺利恵ちゃんとかいたらどうするよー、なあ」

杏奈鏡子に次ぐ、次世代の正統派セクシー女優、綺利恵。

田中が今現在ご執心のその人も、同事務所なので参加していてもおかしくはない。

「鏡子さん以外の女優には興味ないからなー、昔好きだった人とかはいるけど」

「昔の女かー。その人が隣に現れたら、冷めていた感情が意外にも燃え上がったり？」

昔好きだった女優を上げ始めたら数え切れないなー、と頭の中で呟いた。

「あ、バス来たぞバス」

「ちなみにそれ誰なんだよ、教えろよ、おい」

杏奈鏡子に出会う前は手当たり次第に色んな女優に手を出していたのは、ここでは隠しておく事にしよう。今の田中並みに、落ち着きのない立ち回りだった気がする。

「席の番号は予め決まっていますので、乗車口で名前を言っただけからの搭乗をお願いします。バスの運転手が降りて来て、簡易的な説明をする。

予約タイプのバスと大体同じシステムだろう。

「じゃあなー、また現地で」

先に乗り込んでいく田中を見ながら、席を名簿で確認する。

前方右列の窓側席。男は全員窓側で隣に女優が座るといふ形らしく、逃げ場は無い。

「途中、他にも乗車される方がいらっしやいますので、隣の席に荷物は置かれませんが、すべて収納させて戴く事をご了承ください。それでは全員乗車の確認が取れ次第出発致します、途中トイレ休憩はサービスエリアまでありませんので、ご容赦ください」

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）

アナウンスが終わり、慌てて公園のトイレに向かう人が数名、女優の到着まで仮眠を取り始めている人が数名、前後左右の席で会話しているのが数名。

特に何もする事がなかったのも、鞆の中から企画の詳細が書かれた書類を取り出す。『サキュバスバスツアー』、SCVの名物素人企画である本作は、女優達が『人間の姿を借りたサキュバス』という設定でバスツアーに参加してくる。

ご都合的に男女ペアで座席が組まれており、男性は目的地に着くまで女性陣の徹底的な誘惑行為を受け続けることになる。ちなみに、誘惑に負けてすぐに挿入してもOK。

目的地に到着後、夜になると夢の中（設定）で女優達に様々なシチュエーションで犯して貰える。しかも聞いた噂だと、男優側のリクエストが面白ければ通るという話もある。

そして、メインイベントは女優同士のチーム戦で、ルールはその回によって変わるが、優勝したチームは賞金と、その後更に追加の撮影を行う事ができる。

更に、『サキュバスバスツアー』で優勝したという実績は、自らのテクニックや美貌を誇示できるのは勿論、その後の活動が有利になるというオマケ付き。

素人男優や女優達、メーカー、更にはそれを購入するユーザー全てが満足できるといふ、超絶怒涛のWINWIN企画なのである。

当日のスケジュールに目を通しているとバスが信号以外の場所で停止した。プシューツという音を立ててドアが開くと、車内から大きな歓声が上がる。

「こんにちはー、サキュバスバスツアーにようこそー。SCVの女優みんな、皆様を天国にお連れしますーす、ごゆっくり堪能してくださいねー、せーのっ♡」

「よろしくお願いしまーす♡」

先頭に現れたのは、田中が現在進行形で愛情を注いでいる『綺利恵』。人気NO2の売れっ子であり、作品数が減った杏奈鏡子に比べて最近一気に作品数を増やしてきた。

今では、杏奈鏡子を越えたのでは、という声もある。

「よろしくねー」「こんにちはー」「初めましてー」「うーっす」

次々に乗り込んで来る女優達は、一人一人挨拶をしながら自分の席に座っていく。

その中の数人は、作品で一度はお世話になっている顔もあったりして、横を通り抜けていくのを口を半開きにして眺めていた。

「えっ、綺利恵ちゃんっ、ええええええええええ、嘘だろおお、ただのおおお」

「あはっ、よろしく願いますー」

どこからか、田中らしき人間の声が俺の名前を呼んできた気がするが気にしない。

何て言うか、恥ずかしいの一言に尽きる。

後方の席から埋まっていくらしく、どんどん女優達が流れ込んで来るが未だに自分の席には誰も来ない。

とうとう最前列の女優も席に着いたが、結局隣の席は空のままだった。

え、もしかして足りない？

体育の授業でみんながペアを組んでいる中、自分だけ誰ともペアが組めなかった時の変な汗を掻きつつも、流石に人数は確認しているだろうと自分に言い聞かせた。

「一人、女優の方が遅れていますので、その方が乗車されましたら発車致します」

「はい、わかりました。みなさん、もう少しの間、お喋りしましょ」

綺利恵は鼻にかかったロリボイスと柔和な笑顔でトラブル対応をし、男達は野太い声で喚きながら喜んでそれに応じた。流石、演技派女優で売り出しているだけはある。

周りがキヤツキヤウフしているのを、一人だけ孤独に見守る事だけは何とか回避できたらしい。

誰が隣に来てもいいと言うわけではないが、一人だけ浮いているというのは辛い。

（あれ、そう言えば鏡子さんはまだ現れていない……？）

時間に遅れるイメージは一切ないが、多忙の身だしスケジュールが過密なのだろうか。（えっと、もし遅刻しているのがあの方だとすると、まじか、この隣の席まじか……）

期待感が急に高まって来たところで冷静になれと理性が囁いた。

彼女は現地集合という可能性も大いにあるし、あまり期待をし過ぎな様にしよう。

それでも期待せずにはいられなかった。

「おくれてすいませええええええん」

甲高い声が車内に響く。

「ひよちゃんお疲れ様、全然遅れてないから大丈夫だよ、じゃあ出発」

いそいそと隣に着席する『ひよちゃん』と呼ばれた少女。えーっと、この子物凄く幼い感じなんですけど、えーっと、年齢はお幾つ……、いや世の中には外見がとても幼い成人した女性もいるし、見た目だけで判断しては……。

「姫川陽依と申します、不束者ですがよろしくお願致します」

何という礼儀正しさ、他の女優達とは明らかにジャンルとベクトルが違う気がする。

しかも、よく顔を見ると滅茶苦茶に可愛い。

某国民的アイドルも真つ青の正統派美少女、汚れを全く知らなそうな所も評価が高い。色素の薄い金髪でナチュラルな化粧をしていて、高校生が色気付き始めた時の様な少し垢抜けた風貌。AVに出るとしたら援助交際物とかかな……。

そんな事よりも、この子を知らない事に驚いた。これだけ可愛くて魅力的だったら、トップリリースになって何処かしらで目についている筈だが。

「えーっと、そんなにじーっと見つめられると、その、恥ずかしいです……」

「ああ、あ、ごめん、君が、あー、その、とても可愛かったから！」

凝視している事に気付かず、指摘されて変に齒の浮く様な台詞が飛び出した。

「私、そんなに可愛い、ですかね……」

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

可愛らしいピンク色のワンピースを着た彼女。

丈が短く、白のニーソックスとの組み合わせによる絶対領域が眩しい。

俺の言葉に対して、姫川陽依は照れるというよりは、その言葉の真偽を確かめる様な、こちらの真意を測る様な少し疑った様な表情をしていた。

ガードが固いというか、色んな人から言われ過ぎて信じる事ができないのかも。

「ごめん、気に障ったのなら謝るよ」

不穏な空気を感じたら一旦謝っておくのが無難だと思い、つい謝罪した。

「あ、謝らないで下さい。私謝られるの好きじゃなくて……」

手の平をバタバタと左右に振って謝罪を拒絶された。

「あの、お名前は？」

「ああ、まだ名乗ってなかったね。唯野優司です、よろしくね」

できる限りの笑顔を浮かべようと表情を作る。多分うまくできていないだろうが、とりあえず警戒だけでも解いて貰えると、ある程度接しやすいのだが。

「唯野さん、ですか。パーキングエリアまでですが、よろしくお願いします」

ニコツと笑う姫川陽依は、やはり凄まじく美少女だと思った。

ようやく自己紹介も終わり、現地に着くまでの間はリラックスできそうだなーと安心する。そうだ、ここはアレの出番ではないだろうか。



「どうしようトランプでもする？」

ゴソゴソと鞆を持ってトランプを取り出す。

何でそんな物を持っていたかと言うと、旅といえばトランプが時間潰しの定番だろうという、よくわからない固定観念のせいだ、小学生か。

そもそも、二人で遊ぶにはあまり向いていない。

「えっと、今は遠慮しておきます……」

苦笑いする陽依、空気を暖めるはずが一気に最低温度に冷え切る。

自分に会話を盛り上げるセンスが無いのは分かっていたが、女の子と一対一になった時にこうも無力だと悲しくなる。

「今はちよつとできませんけど、トランプ楽しいですよ、私も好きですよ」

(年下の女の子の方がフォロワー上手い……！)

「そうだよね、はは、は」

心の中で号泣しながら顔だけは何とか笑顔で取り繕う。

「————これから何をするか、唯野さんは全然わかってないんですね」

「こ、これから？」

そういえば、この状況に混乱して忘れていたが、出発してからパーキングエリアまでの道のりは、『撮影』をする予定だった筈。

「えーつと、もしかして……」

一つの予想が、周りから多数聞こえて来る声によって肯定される。

「んっ……、ズボン脱がしていい？えー、だってこんなに硬くなってるのにな？ふふっ、身体はとっても正直なんだからー、あなたも正直になつて？」

「キャハハ、おっぱいにくすぐりたい……舐め方めちやくちやエッチなんですけどー、んっ、もつと優しくう、赤ちゃんみたいにちゅっちゅつてー」

「ちゅぶっ、じゅぶう……、うん、出ちやう？早いよー、でも本当に出しちやうなら、私のお口の中に全部吐き出してね、ううん、じゅぼっ、じゅるうるうるううる」

あれ、ひよつとしてこれ、撮影始まつちやつてる感じですか。

気付かないうちに、車内はピンクの照明でいやらしい空間に変貌していた。

「……」

服の端を陽依がギュッと握ってくる。

「え、撮るの？」

相当に惚けた質問をぶつけると、じっと俯いていた陽依がコクリと頷いた。

見た感じカメラマンらしき人は見当たらないのだが、既に車内に設置済みなのか？

ただでさえ、こんな状況で性行為に及ぶ事に抵抗があるのに、相手が現役〇〇生っばいせいで更に居た堪れない状況になってしまった。

こうなるなら、もっと年上の方にリードしてもらった方が――、

「私がリードしますから、唯野さんはじっとしててください……」

思わぬ提案に体がギシッと固まった。

「リードって、何を……」

「私が、唯野さんの、お、お、お、お、×××ちゃんを、き、気持ちよくしてあげます」

その言葉で脳が一気にショートする。

陽依は、明らかにこういう事に慣れていない気がする。もし、演技しているとしたら最優秀女優ものだが、推測でしかないがこれは素の彼女だと思う。

（初出演作品がこれで、最初の相手が俺、なのか――？）

人によっては大喜びする状況だろうが、自分はあまり喜べないでいた。

それは、彼女が本当に望んでこの場所にいる様には見えなかったせいでもある。

「――チャック、下ろしますね」

ファスナーをゆっくり下ろしていく音が聞こえてくる。

全て下り切る前に、「あつ……」という声が陽依から漏れて、自分が勃起してしまっている事に気づかされる。まあ流石に、この流れで勃たないのは無理があった……。

「×××ちゃん、た、勃ってます、私で興奮してくれたんですね、嬉しい、です」

どう聞いても喜んでいる風には聞こえなくて、本当に無理をしているのがわかる。

それでも、陽依が止まることはなかった。

「下着、脱がしますね」

ズボンごとパンツをずり下ろされて、空調の効いている車内に半勃起状態のペニスが露出させられる。熱を持っていても少し肌寒く感じた。

「……………、触りますね」

細い指が男根に触れると、少し冷んやりとして気持ちがいい。

陽依はゆっくりと優しく握り込んで擦ってくるが、性感としては不足している。

唾液を付ければ多少感覚が増すだろうが、そういう工夫もあまり知らない様子だ。

それでも、美少女に下腹部を触ってもらっているとと言う事実によって、ペニスの硬さだけは持続させていた。

「気持ちいいですか？上手く、できてますか？」

「う、うん、気持ちいいよ」

表面を撫でるだけの中途半端な愛撫が続いて焦ったかと思うっていると、彼女もそう思ったのか、手が止まって耳元に顔が近づいてきた。

「あの、お口で、してもいいですか？」

可愛らしい声の淫語と暖かな吐息が耳孔に吹き込まれ、身体がぶるっと震えた。

「無理にしなくても、手だけで十分気持ちいいよ」

「いいんです、もっと気持ちよくなってもらいたいですから」

ちらつと様子を窺うと、ペニスの前で直接見ない様にしながら手で刺激を与えていた。直視できないほどに苦手なモノを、口で啜えるなんてできるのだろうか。

「私、ちゃんとできますから」

救いの手を差し伸べたつもりだったが、逆に陽依はムキになってしまった。

「舌で、まずはさきつぽを……えろ、うん、ちゅぷ、れろえろ、う、ちゅ、う……」

ざらついた舌の表面がゆつくりとペニスを擦りあげる。

フェラチオは、テクニックが要求される演技だと聞いたことがあるが、やはりその通りでくすぐったさと温かさはあるが、絶頂まで上り詰めていく感じは一切ない。

「無理しなくていいから」

できるだけ彼女の顔を見ないようにしていると、急に顔に陽依の指が触れた。

「ちゃんと私がしてるとこ、見てくださいッ」「え？」

グイッと、顔を引き寄せられて、偶然にも漫画みたいに口と口が軽く合わさった。

「あ」

か細い声を陽依が零した。じわっと、目尻から涙の様な水分が染み出している。

（これは、ファーストキスを奪ってしまったとか、そういう事か——？）

「ち、違うんです……これは、欠伸が出て、昨日あまり寝れなくて……」

寝れなかったというのは多分本当なのだろう。しかし、これは……。

「あっ……」

こちらが察したのに気付いたのか、陽依はバツが悪そうな表情で目を逸らした。

「唯野さんが嫌、とかじゃないんですよ？その、急に思わぬ事が起きて、ちよつと驚いてしまって、本当にそれだけで……それで」

言えば言うほどドツボに嵌っていく。自分よりも年下に見える女の子を責める気も湧かないので、まあまあとジェスチャーで落ち着く様に促す。

「あんまり気を使わなくてもいいから、こんな状況だけでも少し話さない？」

男女の喜悦の声をBGMにフリートークなんて聞いた事がない。それでも、話し始めたら意外と気にならないかも知れないし、何より性行為をする気にはなれなかった。

「それって、前戯の導入的な小話でしょうか」

「えっと、普通の雑談だよ、雑談。何をするにもまずはリラックスするのが大事、ね？」

「なるほど、そういう事でしたら……」

こちらを訝しみながらも、何とか納得がいった様子の陽依。

どうしても、この子は性行為に及びたいと思っっているらしい。

しかし、肉体的接触に対する免疫は一切無さそうだし、接吻だけで涙を滲ませる位なのに、何がそうさせるのだろうか。

深入りすべきではないのかも知れないが、辛い思いだけはさせたくなかった。

「もしかして、私って魅力ないですか？」

こちらから、何かしらのジャブになる話題を繰り出そうと思いを巡らせていると、いきなり答えやすい様で非常に難しい質問が飛び出して来た。

率直に魅力的だと伝えても返って嘘っぽくなるし、回りくどく理由を並べてもわざとらしくなってしまう。この質問は本当に正解がないと思う。

「俺は魅力的だと思うけど、そういうの気になる？」

質問を別の角度に方向転換し、自分の言葉の胡散臭さから一旦焦点を逸らした。

「とっても気になります。周りの人はみんな綺麗で可愛いから、いつも落ち込んで自分の魅力に自信が持てないのだろうか。」

周囲の人間が魅力に溢れていると感じる事は、ある程度仕方がないのかも知れないが。

「この事務所の女優さん達は美人揃いだけど、陽依ちゃんも全然負けてないよ」主観的ではあるが、事実を真っ直ぐに目を見て伝える。

「本当ですか？だったら、私を今ここで抱いてください、お願いします」

返す刀で強烈な要求を口にしながら、美少女がこちらを真っ直ぐに見つめ返して来る。その眩しさに、思わず目を逸らさずにはいられない。

（——結局、スタート地点に戻って来てしまった……………）

しかも、この返答次第では今度こそ彼女を傷つけてしまう。

「それとこれとは、話が……………」

「違います、だって他の席の人達はみんな、その…………、エッチな事してるのに、私だけしていないのは、唯野さんを魅了できていないって事じゃないですか」

魅了、されていない訳ではないが、どうにも他ごとが気になってそういう気分になる事ができない。どちらかと言えばこちらに非がある問題だ。

「私、幼く見えますか？」

正直にコクリと頷いた。

「それでも私、成人してるんですよ…………だから何も気にしなくていいんですから」ワンピースを肩からずり下ろし、色っぽい下着を見せつけて来る。

だがそれは、精神年齢の幼い女の子がする背伸びの様子にも見えてしまう。

もしかすると、何かに追いこまれているだけなのではないだろうか。

「おっぱい小さくてごめんなさい…………、ポインってしないと興奮しませんよね」下から寄せ上げて、自分の胸を揉みしだく陽依。

サイズはCカップ位だろうか、同世代の女の子と比べれば十二分に育っているし、容姿とのギャップで相当エロいのだが、それを伝えてもこの子は満足しないだろう。

「陽依ちゃん、本当にその…………、ああいう事したいの？」

「……したいに決まってるじゃないですか、それがお仕事なんですから」
仕事Ⅱ AV女優。

この職業に就くという事は、よほどのセックス好きで天職とでも感じていなければ、大金を稼ぎたいという目的が一番に来るだろう。それだけだとは言いい切れないが、外見だけで全てを判断する事はできないが、漠然とお金には困っていない様に見えるなら、何故この子がその職業を選んだのだろうか。

——いや、もしかすると、

(親とか恋人に命令されてる、とか?)

これだけ可愛ければ、親がこの子を使って金を稼ごうという考えが浮かんでも不思議ではない。アイドルやモデル等に、親が勝手に応募して嫌々ながら仕事をしている人達も、少なからずいると聞いた事がある。

その中でも取り分けてつとり早い、AVという仕事を選んだ。

本人は物凄くやりたくない仕事だが、今まで面倒を見てくれた親に逆らう事ができなくて、今ここにいる、というのは余りにも暴論だろうか。

「誰かに言われた?」

できるだけオブラートに包んで問いかけてみると、陽依は大きく目を見開いてこちらを睨みつけて来た。その瞬間に陽依は捕食者に、俺は被捕食者になった様に感じる。

「誰から——、誰からソレを聞いたんですか?」

ゾクツと、背筋が凍る様な声が陽依から発せられる。

あまり触れない方がいいと分かっていたのに、完全な藪蛇だ。

陽依は、険しい表情になって敵意を剥き出しにしてこちらを見ている。

その瞳の奥にある殺意の様な暗い光が、こちらを覗く様に讃えられていた。そのおぞましさに恐怖し身体が震えながらも、何とかフラつく頭の中で次の言葉を整える。

「俺は何も知らないよ、本当に適当に言っただけなんだ。ごめんなさい、謝ります!!」

年下の女の子に血相を変えて頭を下げる姿は、さぞや滑稽だっただろう。

しかし、悪いのは完全にこちら側なので全身全霊の陳謝をした。

「——ねえ、隣どんなエグい事したんだろうね、私?したい事何でもしていいよ?」

「ギャハハハ、マジでウケるんだけど、覗いていい?うん——っ、ごめんってば、乳首甘噛みしちゃだめだっのー、あんっ♡」

「お隣さ、ンツ……、あんまり大きい声出しちゃう、っとお……他に迷惑だからあんっ」

大きい声を出し過ぎたせいで、周りが性交渉しながらも嘲る様に笑っている。

惨めだ……、こういう場で本気の謝罪をする事ほど、恥ずかしい事はこの世にあるんだろうか。しかも年下の女の子に……。

顔をゆっくりと上げて陽依の様子を伺うと——、

「んふ、ふふふ、あははははははは、すいません笑っちゃって、でも大人の男の人がこんなに必死に謝るの初めて見て、ふっ、ふふふ、すいませんツボに……くくく」

(あら？もしかして、ドッキリでした？踊らされちゃってました？)

「よ、良かったよ、こんなもので陽依ちゃん笑笑ってくれるなら、いつだってお見せするより、はっはっはっは」(――セエエエエエエエフ!!)

内心、何だよ脅かしやがってーと思いつつも、この場が丸く収まりそうで助かった。

大量の汗を背中にかいたせいで、シャツが肌にくっついて気持ちが悪い。

陽依はと言うと、大人をからかえた事がさぞ楽しかったのであるう、まだケラケラと笑っている。箸が転がっても笑える年頃というやつか、それともただの笑い上戸か。

「そうですね、唯野さんが私の事情なんて知ってるわけありませんし、本当早とちりしちゃってすいませんでした、良かったあ」

「……………え？」「あれ？」

訪れる沈黙――、誘導尋問をした訳でもなく陽依はあっさりと自白した。

「あー、その俺は何も聞いてない聞いてないよ聞いてません」

必死に耳を塞いで同じ言葉を連呼する。さすがに、これで責められるのは納得が行かないというか、自分が蒔いた種ではあるから始末に負えないが。

「唯野さんのせいだ……」

涙目になりながら、自滅した事によるショックで項垂れる陽依。

「……………はい、全て俺が悪いです」

両手を上げて降参のポーズを取ると、陽依は笑顔でくすつと笑った。

「―――何だか、どうでもよくなっちゃいました」

うーん、と伸びをした彼女は、自分の着衣が乱れている事に気がついて、胸を腕で隠す様に掻き抱いた。頬を染めながら、責める様な目でこちらを見てくる。

「それに、急に恥ずかしくなってきたじゃないですか、これも全部唯野さんのせいです」

「いや、それはさすがにひどくない!!」

悪戯つ子な表情の陽依は、さっきまでとは急激に振る舞いが変貌した。

もしかすると、リラックスして普段通りの振る舞いに戻っているのかも知れない。

それにしても、『誰に言われて』この場所に参加しているのが少しだけ気になった。

「私だけ秘密を言われたの、凄く納得がいかないんですけど」

「それに関しては、プライベートな事に踏み込んで本当に申し訳ないと思っております」

思い付きでも、軽々しくあの場で言うべきではなかったと心から反省する。

「そんなに責めるつもりはないんですよ？代わりに私のお願いを聞いてくれませんか？」

こんなに可愛い子に上目遣いで頼まれて、断れる訳がなかった。

「わかった、何でも言うてよ」

陽依がにっこりと笑う。

「私に教えてください——、唯野さんが本当に気持ちよくなる方法」
まさかの提案に、あんぐりと口が開きフリーズした。

「え、お願いってそういう……」

「だって、多分ですけどさつきまで唯野さん嘘付いてましたよね？」

そして、しっかりと見抜かれていた。まあ、ずっと触っていて射精に至らないという事は、そこまでの刺激がなかったという事になるのだけれど。

「えっと、良かったらですけど、キスも、ちゃんとしたいですし……」

恥ずかしそうに指先同士を触れあわせて、もじもじと照れ臭がる陽依。

そんなリアクションをされると、こちらも物凄く気恥ずかしさが高まる。

「———今だけ、私を唯野さんの恋人にしてくれませんか？」

心臓がドクンと鳴る。両手をぎゅっと包み込まれ、眼を潤ませて懇願してくる陽依。

「初めてはやっぱり……、好きな人になりたいですから、駄目ですか？」

自分が、彼女に相応しくない事はわかってはいる。それなのに、この子は自分が寄り添ってあげないといけない——、そう思わせる様な庇護欲を掻き立てる言動。

恋愛感情は全て杏奈鏡子に注いでいた筈なのに、今は目の前の女の子をとっても愛おしく感じていた。

それでも、その感情を簡単に肯定する事はできなかった。

だから、自分の気持ちをちゃんと明らかにしないと。

「実は、好きな人がいて——」

ちゅっ

「その先は言っちゃ駄目です」

口元に柔らかな唇の感触が残っている。あれだけ嫌がっていたキスをすんなりとしてしまう辺り、女の子は吹っ切れると積極的になる？という事なのだろうか。

しかも、演技で言っているのか判断が付かない。

それほどまでに自然で、嫌な気が全くしない事にも驚いた。

「もっと、キスしたいです」

「それは……」

いつの間にか雰囲気に吞まれ始めていた。

陽依が、幸せを噛み締める様な顔で微笑み、目を閉じて近づいてくる。

「唯野さん、好きです」

唇と唇が重なる。押し付け合うだけの口付けが、心地良くて仕方がない。

数十秒間、口を突き合わせて柔らかさを味わう。鼻息が荒くなるのを感じながらも、それを抑える事ができないでいた。

「もっと、エッチなキスがしたいです♡」

そう言つて、唇の隙間をすり抜けようとする様に、にゆるりと舌尖が唇を撫でた。「嫌ですか？」

あざとさの塊。今までずっと騙していたと言われた方が納得がいく位に、全ての動作が男受けに特化していた。

またも唇が重なり、今度こそはという様に舌が口内に侵入せんと蠢いた。

俺の中にある抵抗しようという意志が折れ始め、安易にその侵攻を許してしまう。

そして、濁流の様に流れ込んでくる快樂が保たれていた筈の均衡を破壊した。

「んちゆう、ちゆう、れおお……、ひもひいれふか？」

こちらはまだ舌を動かせずにいるのに対して、陽依は巧みに舌で舐めあげたり、舌尖同士をぶつけあったり、更に舌を伸ばして歯茎を掃除する様にスライドしてくる。

何が彼女をそうさせているのか、いつどこでその技術を習得したのか、様々な疑問が尽きないが徹底的に口内の気持ちいい箇所を責められていた。

そういえば、一連の流れで忘れていたがパンツがずり下がっていて恥ずかしい。

陽依がキスに夢中になっている間に、一旦上げさせてもらおう。もう一度脱がされるかも知れないけれど、このままの姿で年下の子とキスしているのは精神的にキツイ。

「駄目です♡」

しかしその行動は看過され、手を掴まれてパンツを上げる事が不可能になった。

ディープキスをしていた口が離れ、唾液が二人の口の間に橋を架ける。

「何で仕舞っちゃうんですか……、触って欲しくないんですか？」

正直に言えば、キスだけでギンギンになっている男根を、扱いて欲しいという気持ちで脳内が埋め尽くされている。何なら、今すぐにでも。

用意があるなら、ローションを垂らして思いっきり扱いて貰いたい。

それでも、陽依にずっと主導権を握られている事が、年上の身としては少し情けなくて、自分から要求する事はできなかった。

「さつきは、あんまり手で気持ちよくできませんでした。どうしたらもっと気持ちよくできるか教えてください、どうすればもっとおちんちん気持ちよくなりますか？」

その清楚な顔で、あまり淫語を連呼しないで欲しい。

それだけでこちらの動悸が激しくなるし、目の前の君を犯したくて仕方がなくなる。

「えっと、唾を垂らしたり、とか……」

全てを言い切る前に、陽依の目がキラッと光った様に見えた。

「唾？ですか、わかりました、ヌルヌルするのが気持ちいいんですね、なるほど」

何かに納得するかのように手を合わせ、陽依は両の手で器を作ってそこに唾液をとるとと注ぎ始めた。粘り気のある水分が掌に溜まっていく。

「えろお……んっ、私の唾液、汚くないですか？」

テロテロと光を反射し指と指の間を埋め纏う唾液、それは思わず息を飲む光景だった。多分、あの粘着性でペニスを扱われたら数分も経たずに射精に至るだろう。

口内で分泌された、人肌に温められた粘液で包まれて気持ちよくない訳がない。

「唯野さん、凄くこの指で扱かれたら顔してますよ……、失礼しますね」

ねちゃあつと、竿を下から上に指が丁寧な唾液が塗りたくり、指と男根が同様に光を反射している。竿を唾液でコーティングしていく仕草がとても淫靡で、喘ぎ声が漏れる。

「摩擦が無くなって、凄くスムーズに扱けます。これ、とてもエッチです♡」

竿の根元から先までをゆっくりと上下する細指達、淡い性感が徐々に高まっていく。

「シコシコ、シコシコ、確かこういうリズムでするのが良いって、シコシコ、唯野さんはどういうリズムが良いですか？シコシコは嫌いですか？」

一々突っ込みたくなる言動は置いておいて、もう射精に至るまでの階段の半分は登ってしまっている。既に、言葉を交わす余裕がなくなり始めていた。

「そのまま、いいよ……」

「シコシコが気持ちいいんですね？シコシコ、シコシコ、あ、ちよつとぬるぬるが足りなくなってきました、れろおおお……んっ、ぐちゅっぐちゅっって音が鳴ってます、あつ、唯野さん凄く気持ち良さそう、ぐちゅっ、ぐちゅっ、シコシコ、シコシコ♡」

擬音を口に出され、聴覚も一緒に犯される感覚を得た。

淫語もそうだが、触覚と聴覚を同時に刺激するというのは相乗効果が凄まじい。

それを知ってか知らずか、自然にそれを行って来る陽依は、清純な見た目に反して女王様の様に男を手玉に取っている。

「えっと、両手でシコシコするのはどうでしょうか。こうやって長い筒を作って、オナホール？みたいにおちんちん全部包んじゃうのはどうでしょうか！」

世紀の発明をした様な喜び方をする陽依。すぐにそれで扱いて欲しくてぶんぶんと頭を振り、もつと性感で身体を満たして欲しいと願っていた。

「唾液ってすっごく便利なんですね。こうやって手筒の中にべえええろお、はい、これで思いつき搾っちゃいますね？いきますよ？」

十分に唾液ローションが充填された手筒の中身を見せつけてくる陽依。どろっどろに粘ついた指で作られた牢獄。包まれたら射精させるまで引き抜く事ができない快樂の壺。

「よいしょっ、ゆーっくり、ゆーっくり、しーこーしーこー、しーこーしーこー、くちゅくちゅって、エッチな音してますよー、くちゅくちゅ、気持ちいいですかー？」

とろんとした顔で肉茎を抜き続ける陽依は、竿磨きの虜になっている。

「キス、しながらとか、どうですか？♡」

立ち上がって対面座位の様に跨ってきた彼女は、手コキを継続したまま口付けした。

「ちゅっ、れえろお——んちゅっ、えろおれろお、凄くエッチな事してます……」
濃厚なペロチューをされながら、スローな手つきでジワジワと刺激される。

「こういう積極的な女の子は嫌ですか？おちんちん抜いて興奮しちゃってる、エッチな女の子は嫌ですか？」

生足の上に乗った陽依の太ももが、すべすべもちもちで気持ちがいい。

「す、すいません、ちよつとバランスが、きやつ」

「つと……!!」

急なブレーキで、後ろに仰け反ってしまいそうになった彼女を両腕で抱きとめる。

「あ、ありがとうございます……、抱きしめられるのって何だかホッとしますね」

ぎゅつと力を入れると折れてしまいそうな陽依の身体。

「良かったら、お尻を持って支えて貰えると……、近すぎてシコシコできないので……」

ゴクリと、喉がなった。

太ももでこれだけ柔らかかったら、お尻の感触どれほど気持ちいいのだろう。

背中を撫でる様に腕を下ろしていき、布越しだが臀部を支えるように指を這わせた。

高反発の枕のような、柔らかさと張りが彼女の体重によって押し付けられる。

「唯野さん、ワンピースの下に手を入れてもいいのに……、ていうか入れて欲しいです」

お尻を少し上げて、もう一度ちゃんと生尻を持つように促してくる。

「それじゃあ……」

全て言う通りになってしまう辺り、もう主導権を取り返す事は不可能だろう。

しゅるりと布の上を撫でて、生尻に向けて指を潜り込ませた。

掌全体が生尻に食い込み、触覚が今まで味わったことがない刺激に悲鳴を上げる。

しっとりとしていて、それでいてすべすべで、もっちりとした反発もあり、触れるだけで悦楽を得られる未知の快楽物質が自分の掌に収まっていた。

「唯野さん、支えてって言っただけなのに何でお尻揉み揉みしてるんですか？そんなに、

私の生尻気持ちいいですか、さっきよりおちんちん硬くなってますよ？」

揉めば揉むほど、その柔らかさの虜になっていく。若さというのは恐ろしい。

すると、反撃と言わんばかりに扱く手が再度動き出した。

こちらは手が動かせ無くなったので、拘束されて一方的に蹂躪される様な図式になっている。キスをされ続けているせいで、顔も碌に動かすことができない。

「——もうそろそろ逝きたい、ですか？」

耳元で甘く囁く陽依。

「私の手で、ぬるぬるぐちゃぐちゃにされて、射精したいですか？」

すぐに頷くと、少しだけ小悪魔の様に意地悪な表情をした。

「……とーっても気持ちよくなる方法、思いついちゃったかも知れませんか♡」

ペニスを実験用のマウスでも見る様な目つきで見下ろす陽依。

「シヨシヨ、シヨシヨ、ぐちゅぐちゅ、ぐちゅぐちゅ、交互に絞る様にしたらどうでしょうか、ごーし、ごーしって、あ、凄くいい顔してます♡」

表情一つ一つで、こちらがどれだけの快楽を得ているのか判断が付いているらしい。歯を食いしばって登って来る射精感を抑えつける。

今すぐ吐精する事も可能ではあったが、彼女の思惑とは違うタイミングで射精してしまつたら、彼女の楽しみを奪ってしまう事になる。

それだけは避けなければと、必死に耐えろと脳が命令して来ていた。

「牛さんの乳搾りみたいに、ゆーっくり扱くのもいいですけど、こーやって速くピストンするのはどうですか？あつ凄くいい顔してます、口開いちゃってますよ？」

とても楽しそうな陽依の笑顔を見ると、自分は一生彼女の玩具でいいと思える。好きなだけ弄って、好きなだけ弄んで、できれば長い間可愛がって貰いたい。

「唯野さん、凄く可愛いです……、ずっと側において置きたい位……」

（——ああ、俺も今そう思っていた）

「好きです♡」

ドクンツ、と心臓が強く跳ねた。

「じゃあ、逝かせますね♡」

もう陽依は、こちらが肯定の言葉を発する前に全てを理解していた。

「ひより、ちゃん……ちよつと、緩めて、う……あつ、それ以上はっ」

あまりの急な刺激に根を上げて、手のスピードを緩める様に懇願した。

「ご、ごめんなさい、私夢中になっちゃって……止めた方がいいです、よね？」

慌てて手を止める陽依、しかしその眼はこちらの心底を見透かす様にニヤけていた。

止める、という言葉を脳が拒否して、それを拒絶する様に首が横に揺れた。

確かに感度が上がりすぎて指の激しい動きに頭がついていけないが、それでも、もつとこの快楽を味わっていたい、もつともつともつともつと——、

「わかりました——、もつと強く、ですね！」

満面の笑み。再度、いやさつきよりも細く絞った手筒をゆっくりと亀頭に押し当てて、口から唾液を塗す様に流し込み、それを一気に根元まで叩きつけた。

「ううっいいい……」

「唯野さん、凄くいい声です。もつと出して欲しい、もつと鳴いてください♡」

手首のスナップを利かせて先端まで一気に駆け登り、叩きつけて、引き上げ、落とし、抜き、差し、どんどん加速していく高速両手コキにもう我慢できる筈が無かった。

「陽依ちゃん、もう、だめっ……」

女の子の様に喘ぎ、情けない声を出し、息が早くなって、もうダメだ……ッ、

「逝くんですか？逝くんですね？逝ってください？逝って、逝って、逝って逝って逝って、射して射して、射して射して射して射して♡♡♡」

「あああああああつあうつあうつあうつあうつあああつあああああ」

身体がザーメンを吐き出す装置に成りかわる感覚。『射して』という言葉に反応して、何度でもペニスが大きく跳ね、掌を腫と勘違いしたかの様に本気で孕ませに向かう。

先端から迸る精液を洩らさない様に、陽依は全てを器用に指で塞ぎ受け止めた。

更に、そこから亀頭を十指で留めを刺す様に、じわじわと尿道に残っている精液を吐き出させる様にニギニギと動かす。

「まだ、射せますか？はい、はい、わかりました、一旦ここで、うん、おちんちんさん休みたいですよ、ちよつと休憩しましょうか、うん♡」

陽依は顔をペニスに近付けて何か会話らしきものをしているが、そんな事はどうでもいい。頭の中が真っ白になって、身体が痙攣してしようがない。

もし陽依が本当に初めて性行為を行っているとしたら、天性の痴女だ。

「凄いです唯野さん。手の中にこーんなにいっぱい射精してくださって、嬉しいですよ。手のひらを広げると、自分が吐き出したのであろう白濁液がたんまりと付着している。

しかも、ふるふるると固形を保っているゼリー状で、どれだけ濃いものを射精したのかが伺える。それほどまでに気持ち良かった。

「これ、全部唯野さんが射したんですよ、凄くドロドロして飲んで喉に絡みついてきそうです…、男の人はこれを女の子に飲ませたいんですよ…」

間違った認識ではないが、それを当たり前だという知識はどこから得たのだろう。

「唯野さんは、私に飲んで欲しいですか？」

小首を傾げて確認を取られるが、『どうせ、飲ませたいんですよ？』と、陽依の表情は訴えかけていた。その推測に間違いはないが、どうしてそこまで理解されるのか。

「私にできるかな…、いただきますね？」

目を燦々と輝かせ陽依は掌に口をつけ、喉を鳴らしてゆっくりと啜っていく。

「じゅっ、ずずう、ずゆるるう、じゅじゅゆううるう、ずずずうじゅゆう」

飲み方はとても上品に、しかし液体の粘性から吸う度に下品な音が鳴ってしまう。

大好物のスープがすぐに無くなってしまふのを嫌がる様に、ちびちびとゆっくり飲み下していく陽依。

「——、美味しい…、こんな美味しいものを隠してたんですね♡」

小声で何かを呟きながら、陽依はどんどん口の中に精液を収納していく。

とうとう溜まりは無くなったが、微かに掌に残った残滓を舌で舐めとっている。

「んちゅっ、一滴も一欠片でも、残したら唯野さんに失礼ですから——えろん♡」

指の精滴を全て吸いきり、口元に付着した白濁液も舌で器用に掬いとった。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

「ふいふえくだふあい、ふおーんふなに、ひっぱひはひてはふよ」

にらめっこをする様に、いーつと口角を広げて精子の溜まった口内を見せてくれる。

陽依は精液を味わう様に舌で掻き混ぜ、嚥下するのをしっかりと俺に確認させた。

陽依の顔が、『あなたの精液が、女を孕ませる事なく食べられていますよ?』と言っている気がする。

性欲が射精した事によって一時的に霧散し、脳が少しずつ思考力を取り戻していく。

目の前の女の子は、本当に先程まで初心な反応をしていた女の子なのだろうか。

ディープキスをし始めた辺りから、陽依はどんどん積極的になってきて、性を絞る事の虜になっていた。身体の動きが全て、男を墮とす事に終始していた。

「うむ、凄く、美味しかったです…、初めて男性の精液を飲みましたけど、こんなに癖になる味だったんですね、何でもっと早くさせてくれなかったんだろう♡」

聖母の様な笑みでザーメンの余韻を楽しんでいる陽依は、こちらが大量射精をした為に肩で息をしているのも一切気に留めていない。

そして、陽依の眼は尚も俺のペニスを凝視している。

更に、その下にぶら下がった睾丸を見据え、後どれほど精が詰まっているのかを、見通す様に値踏みしている。後、俺がどれだけ射精できるかを考えている様だ。

早く目的地に着かないだろうか、今ここはどの辺りを走って——、え?



それよりも重大な事によく気がついた。

(いつから、この車内には俺たち以外の人間がいなくなっていた?)

あれだけ聞こえていた筈の数多の嬌声は、いつの間にか一つも聞こえない。

(高速道路を走るバスは誰が運転している?)

「唯野さん、今度はこっちで気持ちよくなりませんか？」

ワンピースを捲り上げて、愛液でぐちよぐちよに濡れたパンツを見せつけられる。

時が止まったかの様な空間で、陽依はただ快楽を求める事を続けていた。

「陽依ちゃん、そんな事よりおかしいんだ、周りの人が誰もいなくなって——」

「そんな事よりって、何ですか?♡」

天使の様に笑っていた陽依は、一瞬で悪魔の様に表情を曇らせて、笑っていた。

「いや……」

「今は、『唯野さんが本当に気持ちよくなる方法』を教えてもらおう時間ですよね?まだ、唯野さんが本当に気持ちよくなったのか、わからないんですけど」

今まで散々精を吐き出させていたにも関わらず、それをまだ足りないと言う陽依。

「もっと、私に唯野さんの事を教えてください……♡」

授業でわからない箇所があった生徒が、放課後に教師に聞きに来る様な風体。

もう十分に教えた筈だったのに陽依はそれでも満足しないらしい。

「本当に気持ち良かったよ、だから——」(もうやめよう)

「私、死ぬほど気持ち良かったって言って貰える様にもっと頑張りますから、だから、

『もうやめよう』、何て言わないでください——ね?♡」

快楽に覆われていた全身が、鳥肌が立つほどの恐怖によって一瞬で拭い去られた。

「私のおまんこ、絶対に気持ちがいいと思うんです。唯野さんに死ぬほど気持ちいい、って言って貰えると思うんです、ダメですか?」

言葉が発せなくなる程の威圧感が、陽依の全身から放たれている。

今、ここで『はい』と言えば、最高の快楽を手に入れる事ができると思う。

しかし、『いいえ』と言えば、命を失うのではないかという嫌な妄想が膨らんだ。

はい、と答える以外に道はなかった。

「嬉しいです、私、ハジメテナンデスケド、ウマクデキルカナ?」

目の前の少女だった人間が少女に見えない。

射精したばかりのペニスが、あり得ないほど異様な硬さで勃起していた。

体勢はそのまま、対面座位の状態で男根は陽依の膣に飲み込まれようとしている。

それは、肉食動物に捕食される寸前の息の止まる様な恐怖と絶望。

「ハイルトコロ、シツカリミテクダサイネ♡」

断る事で『死』を回避したつもりが、受け入れた結果『死』を迎え入れた気がした。

「ンッ♡」

挿入した瞬間、ペニスが栓を抜かれた様に吐精を始めた。

「ああっつあっあああああっつああああああっつあっつあ」

開栓されたペニスは、白濁のジュースをどどん陽依の中に注いでいく。

暖かな精を受け入れた陽依は微笑みながらも更に腰を振っていた。

「わたしっ——、もっ、んっ、気持ちよくなっちゃいました——っ♡」

男性を気持ち良くする事ばかり考えて、挿入したら自分も快感に包まれるとは思っていなかったらしい。そのお陰か、陽依から先程までの邪気が薄れている気がした。

自棄になった俺は、もうどうにでもなれと腰を振り返した。タイミングを合わせて、陽依が落ちてくる瞬間を定めて、一気に突き返す。

「ンッ——、そんな、やめてください——いつ、逝っちゃう——、んっ♡」

背を仰げ反らせながら、陽依は痙攣する様に何度も震え、そして止まった。

すると、周りの風景がゆっくりと暗く染まり、次第に全ての感覚が薄れていく。

（ごめんなさい、私のせいで……、ごめんなさい……）

誰かの謝る声が、遠くなってく意識の中で微かに聞こえる気がした。



何か、大きな声が耳に届いた。

朦朧とした意識が一気に呼び覚まされ、自分が今まで寝ていた事に気付く。

そして、夢の中で見ていた『悪夢』が脳裏に蘇った。

（ここは——、周りの人たちは、いる……、本当に夢だった、のか？）

起床予定の時間を寝過ぎした時の様に、急激に心拍数が上がる。

しかし、全てが夢のお話であり、自分に何の脅威も迫っていないことを確認すると、ゆっくりと動悸が収まっていくのを感じた。

隣で寝息を立てている陽依を見るまでは。

「——ヒョッ」

下り坂だった脈拍が垂直に飛び上がる様に跳ね、心臓に凄まじい衝撃が走る。

大量の胃液と、今朝食べた物が一気に食道を駆け上ってくるのを感じた。

「サービエリアに到着しました、昼休憩の時間になります——」

「降ります、降ります降ります！」

他の人間が自分の進行の妨げにならない様に宣言し、一気に出口まで走り抜ける。

どこにトイレがあるのかはわからなかったが、何も考えず、ただその吐き気を全てぶちまける為に、俺はサービエリア内を一目散に駆け回った。

第四章「死の遊戯」

「ハア……ッ、ハアッ——　　つうおえおええええ……、うえおえおえええええ」

朝食べたものが全て、消化されかけた状態で口から勢い良く飛び出した。

サービスイリアに到着し、早々にトイレに直行した事が幸いして何とか車内に吐瀉物をぶち撒けずに済んだ事は良かった。しかし、身体に一体何が起きたのだろうか。

陽依を見た瞬間に、夢で感じた何かが胃袋を締め付ける様にして湧き上がった。

思い返せば、いつからか夢だったのだろうか。

陽依が隣に座り、話をして、性行為に至って、いつの間にか車内に二人だけになっていた。直後に凄まじい快楽を全身に浴びて、そして目が覚めたら何事もなかった——、

（——ん？）

何故か下半身に湿った様な感覚がある。

個室の鍵が掛かっている事を確認してズボンを下ろす。すると、パンツの裏側に多量の精液がこびり付いていて、若干表側にも染み出している。

夢精。そういえば少し前にも夢精でパンツを汚した事があったが、禁欲のし過ぎだろうか。撮影の為にオナ禁をしていた事が裏目に出たのかも知れない。

となると、さつきまでの淫夢だったという事になる。

どうして急に眠りに落ちてしまったのかは覚えていないが、あれだけいやらしい空間に長時間いれば、寝ている間にそういう夢を見る事も有り得るだろう。

（いやいや、そんな事よりも今は汚れたパンツの処理をしないと……）

このまま目的地向かうのは少々、いや大いに憚^{はば}られる。臭いもそうだが、居心地の悪さが尋常じゃなく、余計なストレスは避けるべきだ。

とりあえず、コンビニで代わりの下着と、下腹部に付着したべた付きを取るためのウエットティッシュでも買おう。

トイレを出て、案内図に従いコンビニに向かう。

できるだけ気持ちの悪さを気にしないようにしながら、そそくさと目当ての物を購入し、怪しまれない様に平然と振る舞いながら、またもやトイレに舞い戻る。

パンツを脱いで見ると、どれだけ射精したらこうなるんだと言いたくなるほど、大きな染みが出来ていた。まるで、子供のしたオネショの様な模様になっている。

もう二度と履く事はないだろうが、一応コンビニの袋に丸めて入れた後、ウェットティッシュで下腹部の汚れを拭き取り新しい下着に足を通した。うん、気持ちがいい。

どうして、旅の開幕からこんな目に遭っているのだろうか。

確かに、この日の為に俺は一週間、自慰行為や映像刺激の一切を絶って禁欲に禁欲を重ねて臨んだ。その結果が夢精して全てお釈迦というのは何とも報われない。

変に気合が入りすぎて、前日の夜あまり寝付きが良くなかったのも、道中で寝てしまった理由の一つだろうか。

そういえば、隣に座っていた陽依も自分と同様に眠っていたが、急に相手役が寝てしまい相当困った事だろう。

(悪い事したな……)

もし謝罪できるタイミングが作れたら、面と向かってちゃんと謝罪すべきだろう。

ようやく気持ちの整理がついたので、荷物を片付けてトイレを出た。

確か、この後のスケジュールはサービシアのフードコートで昼食という事になっていた筈。地図を頼りにフードコートまでの道を歩いていく。

セクシーな体型の女優達が男を連れ、大衆のいる場でご飯を食べているという光景は中々に異様で、フードコートに入った瞬間に気付く事ができた。

しかし、その集団に向かっていた足が、ピタッと途中で止まりUターンをする。

協調性が皆無という訳ではないが、雑談で大いに盛り上がり過ぎて見える最中に、勢いよく飛び込んでいく勇氣もトーク力も俺は持ち合わせていない。

田中が『都合良く一人ぼっち』でご飯を食べてないかと微かな希望に縋ってみるも、まさかのバスで隣の座席になった綺利恵とサシで昼食を摂っていた。

(―――ふざけてやがる……)

どうやったらそんな大胆な行動が取れるのか、田中パワー恐るべし。

さすがに、その幸せムード満載の空間に滑り込める筈もなく、泣く泣く縁にあるカウンタータイプの席に座って昼食を摂ることにした。

大量に嘔吐したせいで胃が空っぽになっているのか、空腹ではある。

しかし、この後もバスで移動する訳で、抑えめの食事にするべきだと思った。熟考の結果、おにぎり二つという旅のご飯としては質素過ぎる昼食にした。

田中と綺利恵の幸せそうな宴を遠巻きに見守り、暖かいお茶(ペットボトル)を啜りながらお腹に優しい食事を摂っていく。旅先でのぼっち飯は相当に心に堪えた。

(あー、涙出てきそう、いや出てる……)

早々に完食した俺は、出発時間までバスの中で待機でもしようかと思っていると、女優と男達が大声で戯れる喧騒の中で、小さく身体を竦めた陽依の姿が映った。

バスの中の強烈な圧迫感はどう感じない。

距離が大分ある事もあって、こちらに気づく事はなさそうなので少し観察してみる。周りの女優達からおちよくられているのか、顔を赤くして俯いている陽依。

間違いなく最年少である彼女は、周囲の人間達に物怖じしまくりな様子だ。

喜んでる風に笑っているけれど本心はどうなのだろうか。

対面した時のまま、幼くて大人しい、周りに協調する事に必死な年頃の女の子。

そんな子が、あんな風に急激に乱れたり、男を誘惑する技術が高かったりするだろうか。全てが夢だったと言われた方が遥かに納得がいく。

よくよく思い返してみると、曖昧な記憶だが、若い子にあんな風に攻めてもらうAVを一度見た事がある。

さっきの夢は正にそんなシチュエーションだった。

隣に適合する女の子が現れたせいで、夢に願望が浮かび上がったのかも知れない。

（今は具合が悪そうだし、さっきの事は現場で謝ろう）

もしかしたら、相手は二度とこちらの顔を見たくないと思っっているかも知れないが、一言だけでもけじめは付けておかないと。

現状整理と今後の方針も決まった所で、ゴミを片付けて席を立つと――、

「あのー、良かったら隣お邪魔してもいいですか？」

まさに立とうとしたその瞬間に、女性の声が背中越しに聞こえた。

振り返ると、帽子を目深に被り黒レンズのサングラスを掛けた女性が立っていた。

隣に座らせるには明らかに怪しい雰囲気、他にも空いている席が沢山あるのに、何故わざわざこの席を選んだのだろうか。

（何もかもが怪しすぎる……）

「一人で食べるのが寂しいなって思ったのですが、もしかして食べ終わってます？」

最高峰に胡散臭いのだが、さっきまでぼっち飯をしていた自分としては、この目の前の女性を一人きりにしてしまう事が少しだけ躊躇われた。

この後、いきなり怖い顔をした男が現れないとも限らないが、そうなったらバスまで逃げ込めばいいし、見知らぬ地だからこそできる立ち回りもあるだろう。

「この後、バスが発発するまでで良ければ、まあ……」

「――いいんですか？」

表情は読み取れないが、女性の声から物凄く感じの良さが伝わってくる。

（――多分だけど、この人と一緒にいても悪い事にはならないだろう）

「全然大丈夫ですよ、ちよっと飲み物だけ買ってきますね」

「すみません、じゃあお言葉に甘えて」

彼女が座ったのを確認して席を立つ。

（バスの中で飲む用の水でも買って、それをちびちび飲みながら話し相手になるか）
それにしても彼女、この夏場に少し厚着をし過ぎな気もした。

席に戻ると女性は黙々と昼食を摂っていた。メニューは鰻重か、ちよっと重いな。

「あの、さすがにそのサングラスは外した方が……」

特に指摘するつもりもなかったのだが、食べ物を見た目の色合いも楽しみの一つだと思っし、もし慌てて外し忘れているのだとしたら勿体ない。

特に、鰻なんて見てるだけで唾液が溢れてくるのに、視覚で楽しまない手はない。

「そ、そうですよね、変ですよね」

そう言ってサングラスを外すと、超絶美人、とまではいかないが、優しそうな表情の愛らしい顔が現れた。年齢的には一回り位上だろうか。

「旅行ですか？」

「いえ、私はお仕事で目的地に向かう途中です。少しお腹が空いたので、休憩を」
キャリアウーマンという風体ではなかったが、土曜日だというのに大変だ。

「仕事でしたか、これは失礼」

休日出勤だとは恐れ入る。よくよく見直してみると、何だか高そうな服装をしているし、もしかしたら大企業のお偉いさんだろうか。

「いえ、いいんです。仕事とは言っても、旅行みたいなものなので」
なるほど出張か。

「僕も、今日は仕事の様な旅行の様な、説明しにくいやつなので、一緒ですね」

説明しにくいというのは、色々な意味を持っているのだが詳細は伏せた。

「私が言うのもなんですけど、すごく怪しいです」

お互いに笑い合って、緊張していた雰囲気は少し和らいだ。

「何だか、私たち似てますね」

くすくすと笑う彼女は、いつの間にか全てを平らげており、ご馳走様でしたと言って箸を置いた。

食事時間が短いのは仕事柄だろうか、それにしても早い。

「付き合ってくださいありがとうございます。普段は一人でご飯を食べているので、一緒するのも楽しかったです」

何だこの癒しオーラは、自分に想い人がいなければあっさりと惚れていただろう。

このツアーに参加してから、目の前に魅力的な女性が次々と現れる。そのせいか、目移りしそうになるほど気持ちに余裕がない。

それでも、杏奈鏡子に対する想いは貫いてみせる。

普段の生活からは考えられないほどに新しい出会いに満ち溢れ、嬉しいと思う反面少し気疲れしてしまいそうだ。

「あ、そろそろバスに戻る時間なので」

「あ、私そろそろ移動しないと」

お互いにスマホの画面を見て似た様なことを言ったので、またしても二人笑う。
「もしかして、同じ目的地でしょうか」

口に含んでいた水を吹き出しそうになるが、寸前で耐える事に成功した。

さすがにそれはないと思ったが、宿泊先が一緒という可能性も――、いやしかし。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）

「また、お話したいですね」

そう言った彼女の笑顔は、会話している時よりも更に輝いて見えた。

もし、その笑顔の為に少しでも自分が助力できていたとしたら、それはとても誇らしい事だろう。

「そうですね、機会があれば」

言いながら、もう二度と会う事がない事はわかっていた。

それでも、鬱々とした気分を晴らしてくれた彼女には感謝してもしきれない。

だから、二度はないと伝える事はせず気持ち良く相槌を打った。

お互いにその言葉の意味はわかっている筈で、それはよくある日本人の社交辞令だ。

叶う事がない、叶える事のない願望の言葉。

「それじゃあ」

それでも、彼女は嬉しそうに微笑んで手を振り、俺の隣を通り過ぎる瞬間に――、

「――バスで待っててください」

「え？」

それはとても小さな声で、頭の中に一瞬だけ残って消えて言った。

しかし、どうにか頭に残った残響を拾い上げて再構成しようと頭を捻る。

彼女は、『バスで待っていて』と言った様な気がした。

急ぎ振り返り彼女が歩いていくのを見送る。

もし、同じ現場に向かうのだとすれば、彼女はAV女優だったと言う事になるが、ぱ

つと見の印象だがそんな風には見えなかった。

作品としても一度も見た事がないし、そんな事が本当にあり得るのだろうか。

しかし、今はそんな事を考えている暇はない。

ツアーグループの大所帯が、片付けを始めバスに移動し始めていた。手にはソフトク

リームを持っている。（美味そう………）

いや、もしあのグループで食べていたら、こんな素敵な出会いはなかったわけだし気にしなくていい。羨ましく思わなくていい、そうだろう自分よ――、

そんな事より、自分の席が勝手に誰かに座られない様に早めに戻っていよう。

駆け足気味にバスに向かい車内に乗り込もうとすると――、

「ちよつと待ってくださいーい、名前の確認をしますねー」

スタイル抜群のバスガイド、多分だが女優の方が名簿を片手に駆け寄って来る。

見ると、フロントガラスに貼ってある名前は一緒だが、隣にも同じ名前の貼られたバ

スがあった。なるほど、別の場所からも人が集められているのか。

「えつとですね、お客様はあちらのバスですねー」

自分が思っていたバスとは違う方のバスを、女性は指差した。

バスを飛び出した時の記憶が無い為、どちらのバスに乗っていたかは分からない。手荷物は全て持ち出してから車内には何も痕跡がないし、他の大荷物はバスに収納されているので、どちらに乗っていたのか見た目では判断ができなかった。

結局は、どちらも同じ場所に向かっているのだから、特に関係はない筈だが。少しだけの気がかりが、バスに乗り上げる足を止める。

（約束をした彼女はどちらに乗るのだろうか……）

もし、それが分かっても乗るバスを選ぶ空気ではない。しかし、自分を楽しませてくれたあの人と、もう少しだけ会話をしたいという願望が邪魔をしていた。

仕方なく案内されたバスに乗り込むと、既に何人かは乗車しており、食後の惰眠を貪っている所だった。

田中が乗っていたれば同じバスだと分かるのだが、どうやらまだ戻っていないらしい。

席には、メモ書きとリストバンドが置いてあった。

『この席に座る方は右腕にお付け下さい』と書いてある。

数字が書いてあるが、これは何かの目印なのだろうか。とりあえず付けてみる。腰を下ろして目を閉じると、全身の疲れが浮き上がり身体の怠さを感じた。

元々、すんなりと終わる旅にはならないだろうなという予感があったが、集合から始まって、道中の撮影、パーキングエリアでの出会いと、中々に内容が濃い。

それに加えて、この後は杏奈鏡子と共にアダルトビデオの撮影、エッチもできる可能性があるという——、まだまだ体力が必要になってくるだろう。

目的地まで後一時間程度だろうか、そこまで長くはないが短くもない。むしろ仮眠を取るにはもってこいの時間だろう。

もし、先ほどの女性が現れたとしても、少しだけ話したら寝させてもらおう。

女優さんだとすればこの後も撮影が続くわけで、その方がお互いの為になるし。

（いや、鏡子さんが隣に来てくれたら、さすがに寝れないかもな……）

そんな事を妄想しながら、着々と乗り込んでくる男達と女優を細目で流し見しつつ、ソワソワしながら隣に座る人を待つ。

別に、約束をした彼女じゃなくてもいい。杏奈鏡子が来たら涙が出て来るがそれも期待しない、姫川陽依は少し抵抗があるからできればやめて欲しい。

何故高望みをしないのか、その答えは簡単だ。

（誰でもいいから、隣に座ってください……）

またもや、最後まで誰も隣に座る事がないというデジャヴを叩きつけられたからだ。いやいやそんな馬鹿な、どうして二回連続で自分の隣が最後まで空いているのか。

何かの嫌がらせを感じざるを得ない、そんな悲しさ溢れるシチュエーション。

———と黙っていると時間ギリギリになって、その人は現れた。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

「隣いいかな？」

約束の女性とは声が違うと思ひ振り向くと、そこには茶髪でミディアムボブの女性。爆乳かつ細身という外国人モデル顔負けのスタイルを持つ、AV女優の中でも超のつく有名人、SCV所属の『美乃梨』が座席を指刺して立っていた。

白いタンクトップと紺のショートパンツを身に付け、黒のキャミソールが透けていた。タンクトップもキャミソールもゆるゆるなせいで、乳輪こそギリギリ見えないものの、下着から乳が溢れ、自慢のJカップの爆乳をふるふる揺らしている。

「ど、どうぞ……」

美乃梨が勢いよく席に座り込むと、その反動でまたしても胸がたゆんと揺れる。

注視しているわけではなく、視界の中で一際主張が激しいせいでどうしても目がそちらを向いてしまう——、男性的な興味という点でも仕方ないと言える、だろう。

「君、もう酔いは醒めた？」

誰にも気づいて欲しくはなかったのだが、案の定バレていた様だ。そもそも、口を押えて立ち上がり、駆け足で一番に降車すれば同乗者は気づくに決まっている。

「何とか、昼食が食べれる位には」

できれば早く寝かせて欲しいと思いつつも、美乃梨は見た感じのイメージだが話すのが好きそうだ。簡単には寝かせてもらえないかも知れない。



少し話に付き合っ、それから切り出そうか。

「それは良かったーっ、キスしてる時に吐瀉物を交換したくないからなー。あーでもイラマチオみたいで一部の層には需要あるかもなー、うーん」

隣でブツブツとプレイについての考察を垂れ流す美乃梨。プロフェッショナルとかプロフェッサーと言うべきか、作品演出について自分で考えるタイプの女優らしい。

その前に引かかるべき点があった——、『キス』ってまだ撮影するのか？
「えっと、もう撮影は現地までない筈ですよ？」

昼休憩が終わって、目的地まではゆったりとバスで向かうという話だった気がするが。
「あー、撮影はしないよー。個人的に撮影して自分で売ったりしてもいいけど、さすがに此処だと他の子の声が入っちゃうしい、いや、逆に声入ってたほうがリアリティが出てありかも、おっぱブとか盛り上がるもんなー、メモメモ」

定期的に自分の世界に入っていく美乃梨。

「ストップストップ、美乃梨さん落ち着いて」

「ん？あーっごめんごめん。常に新しい作品のアイデアが溢れてきちゃってさーっ、ほんと悪い癖で、ん？あれ、私自己紹介したっけか」

自分の頭をワシワシを掻きながらニコニコと屈託無く笑う美乃梨は、世間では有名人だという認識があまりないらしい。

貧乳が好き男でも、一度はお世話になるという話を聞いたことがあるほど、誰もが魅了される美貌を持ち合わせているというのに。

「話が脱線しやすいのも悪い癖——、えっとねー今から君を食べるの♡」

「……え？」

時が止まったかの様に一拍の間が空いた。

『それでは、目的地に向かって発車します、停車時も申しましたが目的地までのトイレ休憩はありませんので、ご容赦下さいませ』

ゆっくりと扉が閉まりバスがエンジンを動かし始める。

カーテンがすべて閉められ、怪しげな紅色のライトが空間を染め上げた。

車内は、いつの間にか女優と素人男性の会話の声で溢れ、出発時と同様に挨拶をし、自己紹介を始めていた。

「食べるっていうのはその、性的な意味でというか——」

「ちがうちがうー、みんなデザートがまだだからお腹空かせてるのよーっ、別腹って奴」
前後左右の席から、口と口を押し付け合う音や、性器を舐めしゃぶっている音が聞こえてくる。目の前にこれだけ魅力的な女性が現れれば仕方ない事だろうが。

撮影しないという話を聞いていた筈なのに、同乗者達が疎らに性行為を始めた。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)



「えっと、皆さんソフトクリーム食べてませんでした？」

そういう意味ではないと分かっても、質問をぶつけて会話の流れを変えようとした。何故か冷や汗が背筋を伝う。

「そう、でも私達サキュバスはそれじゃあお腹が膨れないの♡」
耳を疑った。

この企画では女優が淫魔を演じる設定だが、それを今持ち出してくるのか？

先ほどまでのリラックスした雰囲気は急激に妖しく変質し、心臓を強く弾ませる。

セックスがしたくてAV女優になる人もいると聞くが、ただの欲求不満？

『あん、あんっ……あんっ……もっと、もっとお……』

そんな緊迫した状況を、あちこちから聞こえる嬌声が更に歪ませる。

いつの間にか美乃梨はトップスを脱ぎ捨てて、キャミソールから胸を溢れさせていた。

「みんなもう始めちゃってるよー、私達もしちゃお？♡」

爆乳をふるふると横に揺らす美乃梨。思わず目が左右に踊り、ライトでより一層色気がました乳房に心臓が張り裂けそうな痛みを感じた。

映像で見た時よりも、その生乳は他を圧倒する母性的な膨らみと若々しい張りを持ち、喉が何度も鳴った。日本人とは思えない破壊力抜群のナイスバディ。

童心に帰り、無心でずっと吸い付いていたという欲求に頭が支配される。

「いいよー、おっぱいちゅっちゅしよー、母乳は出・な・い・け・ど♡」

口がぱくぱくと微動するのを美乃梨の目は見逃さなかったらしい。

子供に授乳する時の様に飲み口を指で摘み上げて、むにゅむにゅと柔らかく揉み込む。本能を抑え込む理性が、跡形も無くなる程の暴力的な誘惑。

「我慢は身体に毒だよ？」

こちらを心配そうな目で見つめる美乃梨は、指を自分の口に咥えこんで濡らし、そのまま豊乳の先に乗せてゆつくりと動かし始めた。

「うん……気持ちよくなつてー、精液いっぱい出そ？ね？」

ゆつくりと勃起する乳首に目線が吸い寄せられ、心拍数がどんどん上がっていく。

目の前の女性は、年間の出演回数で一番を取った事がある位には技術を極めており、生半可な女性経験ではその誘惑に抗える筈が無い。

『××ちゃん、逝っちゃう、出ちゃう……』

『あん、ちゅっ……んちゅるるる、むちゅうう……じゅぽっ、ちゅっんちゅっ』

わざわざ大声で射精をアピールする、情けない男の声が少しだけ気分を萎えさせる。しかし、その後が続くいやらしさ溢れる吸引音に男性器がビクビクと反応する。

既に、美乃梨の乳房を視姦して膨張しきっているのに、更に硬さを増そうと血液が循環を早める。他人の性行為の音は、精神衛生上とてもよろしくない。

「あははーっ、もう逝っちゃった人がいる。早漏さんだなー、もしかして君も早漏君？」

能天気な笑う美乃梨は少しだけ誘惑するのに飽きたのか、何かを考えている風に目線を泳がせていた。それを見て、ようやく視線を胸から自分の足元に移すと、信じられない膨張をしているペニスが、疼く様にびくびくと震えていた。

「ねえ、いつまでそうしてるつもりーっ？私そんなに魅力ないかなー、もしかしてデカパイは嫌いーっ？貧乳村の出身？」

言いながら、迫る様に身体を寄せる美乃梨は、ぶらんと大きく揺れる胸を手で掬って触りやすい様に眼前に持ち上げて来る。

「別にさー、撮影じゃないからってえっちな事しちゃダメって事ないよねーっ」

確かに、ここで今この爆乳にむしゃぶりついて、手を柔らかな感触で満たす事は誰に咎められるという事ではないだろう。

しかし、ここに来たのは杏奈鏡子とお近づきになればという目的の為であって、好き放題色んな女優とセックス三昧をする為ではない筈だ。

据え膳食わぬは男の恥と言うが、撮影以外の性交渉はできる限り避けるべきだろう。

AVにハマり始めた当初は取っ替え引っ替え魅力的な女優に現を抜かしていたが、このツアーが終わるまでは杏奈鏡子一筋を貫くと決めている。

「今、僕はあなたとエッチな事をしたくありませんから！」

おっぱいをむにゅっと寄せていた美乃梨は口をあんぐりと開いた後、不満げな顔になりその後一気に頬を膨らませた。

「ひどっ！」

そう言っただけで表情をコロコロと変える美乃梨。

（言い方が悪かったか？）

女性にここまで誘惑させておいて断るのは、逆に紳士的ではないのかも知れない。

（——もしかして俺ってデリカシーが足りない？）

目の前のプロに、ただの素人が大恥をかかせてしまった。

「そっかーっ、できれば楽しくえっちできたらなーって思ったんだけど、仕方ないねえ」

美乃梨は悪魔で諦める気はないらしい。

一旦仕切り直すらしく、美乃梨はキャミソールを身に付けた。

美乃梨が乳房の位置を整えている光景が興味深く、思わず凝視してしまう。

「でも、おっぱいは好きなんだよねー君、今もすっごく残念そうな顔してたしさー」

——思い切りバレていた。

エッチする気はありませんと啖呵を切っているながら、女体に目を奪われ続けているのは、矛盾というより情けなさが際立つ。

「じゃあ質問のコーナー、ドンドンパフパフ、大きいおっぱいは好きですか？」

手をパチパチと叩きながら美乃梨は何やら始めた。

「割と——、いや大きい方が好きです……」

最初誤魔化しかけて慌てて言い直す。さすがに、ここで強がるのはダサい。

「そりゃー男の子だったら大きい方が好きだよなーっ、じゃあ何で揉んだり吸ったりしないの？あ、おちんちん挟む？」

びくんっ、と身体が震えたかと思うと、脳内に様々な猥雑なイメージが浮かんだ。

頭にハテナを浮かべながら、両手でぐにゅぐにゅと爆乳を寄せては離す。

「い、いえ？けっっ、結構です？」

声が裏返り、わけのわからない疑問形で言葉が裏返る。

その滑稽な仕草に、美乃梨の頭上にピコーンとびっくりマークが飛び出した。

「——なーんだ、パイズリして欲しかったんだー、言っただけよー♡」

（言っただけと言われても……）

そこまで具体的な事は考えていない。しかし、脳内に美乃梨の作品が数点浮かび上がり、鮮明な映像までもが一気にフラッシュバックした。

確かに、過去に映像を視聴した時は、あの胸に挟まれたらどれだけ気持ちいいのだろうと夢想したりもしたが、それも随分前の話である。

今となつては、その、全くして欲しくないという事はないが、少しだけなら……。

煮え切らない心中に男らしさはカケラも存在しなかった。

「私さーっ、おっぱい凄く大きいじゃん？だから、AVでもすぐ挟んでーって言われるの、もしかして名前知ってる位だったらお世話になってたりする？」

物凄く興味津々な目でこちらを見てくる。

顔を近づけられると自然とおっぱいも近づいてくるので、掌が磁石に引つ張られるかの様に震え始める——、恐ろしい魔力だ。

「私、自分の作品見てくれる人大好きなの。一本気なファンじゃなくても良くてーっ、一回でも私にお金落としてくれたら、それだけで私の大切な人になるのね？」

自分の美学を語る美乃梨は、先程までの無理やりに迫ってくる様な理解できない人物ではなく、とても人間的な感性をしていた。

その夢を語る子供の様な声音は、酒池肉林と化した車内で尊く思える程だ。

「四、五回位は、そのお世話になりました……、はい」

嘘だ、その十倍位はお世話になっている、爆乳にどハマリした時期が俺にもあった。

「ほんとー？凄く嬉しい、ちゅーしようよー？私嬉しいとキスしたくなるんだー」

ぎゅむっといきなり抱きしめられ、熟れた乳房が腕に押し付けられる。

その柔らかな乳房は最高級のクッション性を持っていて、腕の形を完全に型どる。

美乃梨の顔が振り向けば唇に触れそうな位に近づき、囁く様に耳元に蠱惑的な言葉が流し込まれていく。

「キスはちよつと……」

美乃梨ファンに聞かれたら殺されそうな返答をしてしまった。

そして、相変わらずのデリカシーゼロ。

「クッ——、この堅物めーっ、でもおっぱいに挟またいのは本当でしょ？」

むにゅんと乳房を寄せられると、身体がどう足掻いても反応する。

残念ながら、本能を誤魔化す事ができないくらいに理性がやられているらしい。

身体が、今からされる事を期待してしまっている。

「じゃあねー、質問コーナー2！どこで逝った？どのシーンがお気に入りだった？」

肉体的接触は拒絶できるのに、興味本位の質問は無下にする事ができない。

現在進行形で胸がむにゅむにゅと当たっている。そんな中、耳元で何をおかずにしたのかを聞かれるというのは、ある種の羞恥プレイなのではないだろうか。

「ねー教えて？私の今後の作品に生かす為の、購入者の生の声が聞きたいのよーっ」

ね？と言って耳に口づけをされ、いつの間にか深く肉体を触れ合わせていた。

「やっぱりおっぱいでー、おちんちんをー、ぐちよぐちよにする所かなー、それともー、赤ちゃんみたいになー、乳首に吸い付きながらー、手コキで甘えちゃう所ー？♡」

言葉を区切る度に舌が耳の縁や耳たぶを啄んできて、変な声が口から漏れる。しかも、男が思わず脇を緩めてしまいそうな、甘い声で逐一囁いてくる。

「その、近いです……」

理性が美乃梨を拒めと言っている。

容易に人の心に入り込める人懐っこさが、今は酷く恐ろしく感じた。

「えー？どこで射精したかだけでも教えてよー、本当に知りたいだけなのにー」
それでも美乃梨は食い下がってくる。

遠ざけてもすぐに近づいてくる、突き放したくても邪険にする事ができない。

今まで映像で見てきたイメージとは全く違う、纏わりつく子供の様な魔性の魅力。いつの間にか根負けして、それ位ならいいかと妥協してしまう恐ろしさ。

「おっ……い」

口がぎこちなく動き、言葉が籠る。

「今何て言ったの？声が小さすぎて聞こえないよー」

美乃梨は耳に手を当てて口元に寄せてくる。

すると、艶かしい首筋が眼前に迫り、その綺麗な輪郭に思わず息を飲む。

「美乃梨さんの胸で挟むところで、いつも射精していました……」

何と言う羞恥プレイだろう。本人にオカズポイントを言わされる事になるとは、当時の俺には絶対に予想ができなかっただろう。

「そうなんだ！挟んだら凄く気持ち良さそうだね、私は女だから良さそうだなーとしかわからないけど、でも大体一分経たずに逝っちゃうのは、凄く良いって事なのかな？」

(いや、業界史上最強のおっぱいって謳われてますよ、あなたのパイズリ……)

囁くように問いかける美乃梨は、俺の性癖を聞いた事を嬉しそうに笑った。

「やっぱりパイズリかー、私のAVの購入者中九十パーセントがパイズリマニアなんだよねー、実はフェラも上手いんだよ？手コキはおっぱいに擦り付けながらのだったら得意だしーっ、授乳手コキだって上手いと思わない？」

急な市場分析と愚痴の様な物が始まり思わず笑ってしまう。

「あーっ、笑った。ここ笑いどころじゃないんだけどなーっ、切実な悩みなんだよ？」

「すいません、でも面白くて」

困り顔で拗ねる美乃梨は、身体をぎゅっと萎ませて子供の様に口を尖らせる。

この呆気らかんとした気さくさと、プロ意識の塊の様なメンタリテイ。

杏奈鏡子を知る前に出会っていたら、もしかすると真剣に惚れていたかも知れない。

そんな風に考える程には彼女の人格に嵌ってしまった。

「ねえ君名前は？」

「唯野優司です」

うーん、と唸った美乃梨は、またもびっくりマークを頭上に浮かべた。

「ゆーちゃん！君、これからゆーちゃん、オーケー？」

「オ、オーケー、？」

あまりにも意味が分からないので、思わず聞き返した。

「愛称よ、あだ名よ、ニックネームよ。『君』って呼んで欲しい派閥がいる事も知ってるけど、私は断然自分専用の呼び名が欲しい派だからさー、ダメかなーっ」

専用と言うには、『ゆーちゃん』は余りにもありふれていると思ったが、そこを突っ込むと更に話がややこしくなるので口にはせず飲み込んだ。

「初対面ですけど、呼びたい様に呼んでももらえれば……」

「じゃあ、オッケーだねー」

指でお互いにOKサインを出すと、美乃梨は満足気に笑った。

「ゆーちゃん、手を出して？」

いつの間にか距離感は初めの座席と座席の間合いに戻っていた。

そして、何の抵抗もなく掌を目の前に出す。

「手を握るとね、凄くリラックスできるの。ゆーちゃんさっきから凄く緊張してるんだもん、ほら、段々ほぐれてきたでしょ？」

恋人の様な絡め方で指と指が折り重なっていくと、確かに心が一瞬だけホッとした。

しかし、女性と恋人つなぎをしている事に気がつくのと、すぐに心拍数が上がる。

「ゆーちゃんの手好きかも。この指で私の身体を優しく触ってくれたら、凄く気持ち良さそうだもん」

ロマンチックな雰囲気になり、思わず手が伸びそうになる。

「私の身体、好きな場所を触っていいって言ったら、ゆーちゃんならどこを触る？」

魅力的過ぎる、『例えば』の問いかけ。

最初に脊髄反射で弾き出されたのは、やはりその豊満過ぎる『おっぱい』だった。

そして、次に適度に引き締まったお腹が浮かんで、最後にたっぷりとしているが、ぷりんと上を向いている形のいいお尻。

「えっと——、顔、ですかね……」

「へー、あれだけ胸から下をゆっくり見下ろしていったのに、顔だったんだ、へー」

「——いや、それは下を向いて考えていただけで！」

嘘を吐いて、バレて、恥ずかしさの余りまた嘘を吐いた。

「あ、そうなんだ。私の勘違いだったかー、失敬失敬——、でも、ゆーちゃんなら好きだけ触って、舐めて、匂いを嗅いで、したい事全部、私の身体にしていよいよ♡」

上目遣いになって腕を後ろで組み、背を逸らして実りきった乳房を強調して来る。

目を潤ませ身体を震わせる美乃梨は、初体験をする前の純情な乙女の様だった。

しかし、そんな安易に流されるのも良くないと、気を締めなおす。

「それは、ちよっと……」

「えええええええええええええええええ、こんなに良いムード作っても駄目なの!!」
やんわりと断ると、頬つぺたを膨らませ、両腕をブン振りながら抗議してきた。
どうやら、さつきまでのムードはどうにかエッチに持ち込む為に作られた、美乃梨流の導入だったらしい。

「無理ゲーだよ無理ゲー、ゆーちゃんさーっ、君のクリア難易度、魔○村レベルだよ!」

美乃梨はゲーマーなのだろうか。自分ではちよろ過ぎるヌルゲーだと思っていたのだが、他人の評価では違うらしい。

がつくりと項垂れた美乃梨は、ふらふらと身体を揺らしながら何かを呟いている。

「———なんでこんなに面倒くさい事になってるんだろ。しかも、無駄に下着姿だし、

相手が全然乗ってこないんじゃ私がただの痴女みたいじゃん……」

「えっと、何かすいません……(痴女は痴女だと思えます)」

よくわからないけれど、とりあえず謝っておいた。

うーんうーんと、頭を抱えながら唸る美乃梨。数秒停止したかと思うと、頭にビクク
リマークを浮かべ手をポンと叩いた。

なるほどなるほど、と全てを分かりきった風に何度も頷いている。

「もしかしてーっ、他の女優で好きな人がいるとか？」

ビクーン、と身体が反応すると、それを見逃す筈の無い美乃梨の目がギラリと光る。

「ま、まあ一応」

「誰?!」

隠しても仕方がない事なのでさらりと返すと、美乃梨は強烈に食いついて来た。

そして、すぐに安易に言ってしまった事を後悔する。

「誰よ、誰よ誰よ誰よ、お姉さんに教えて見なさいよーっ」

グイグイと距離を詰めて来る美乃梨。

俺の身体を掴みブンブンと揺らす度に、胸がわんさか弾んで視界を思わず逸らした。

「———茶化さないで下さいよ？」

「わかったわかったってば、はいどうぞーっ」

明らかに人の話を聞いていないが、これ以上引き伸ばしても煩そうだ。

「杏奈鏡子さんです」

名前を口に出すだけで、まだ幸せな気持ちになれるのは良い事だろうか。

あの人が好きな事を曝け出して、気恥ずかしさに照れたのは久しぶりな気がする。

「はーん、鏡子ねー」

同じ事務所の先輩である美乃梨は、何かを含める様な顔で何度も頷く。

「スタイルだってテクニクだって、鏡子に負けてないつもりなんだけどなーっ♡」
乳房を腕で思い切りに寄せて、元々バツパツだったキャミソールが破れそうになる程に爆乳を強調してくる美乃梨。

——ゴクリッ

しかし、そんな魔乳の暴力をぶつけられても、迷いなく俺は彼女への想いを貫く。

「えっと、何かすいません」

「——ッ、謝らないでよーっ、惨めすぎるじゃん……」

顔を両手で覆ってわんわん泣き始めた美乃梨。

現在進行形で他の席からは嬌声が聞こえていると言うのに、この席だけは何て平和なのだろうか。場違いという言葉も当て嵌まるが。

「そんなに鏡子が好きか。まあ可愛いよねーっ、清楚な感じでさー、男受け良いしー」
手に顎を乗せてそっぽを向いた美乃梨は、投げやり気味に鏡子の長所を挙げる。

身近な人、かつ女性目線の意見を聞いた事が新鮮で、ここに来てファン根性が急激に溢れ出した。折角の機会だし、色々知りたい事を聞くべきではないだろうか。

「美乃梨さん、鏡子さんの事が詳しいなら、是非教えていただけませんか!？」

「くっ——、この輝く眼は間違いない、生粋のファンだ。私とは食いつきが違う……」

眩しい光を手で隠す様に、腕で壁を作って拒絶して来る美乃梨。

「もしかして、美乃梨さんは鏡子さんと仲良くないんですか？」

ピクンと肩が動いたかと思うと、美乃梨はこちらに振り返った。

「仲良くに決まってるじゃんかー、女の嘘っぽいじゃなくて、本当にねーっ」

女性のそういう発言は何とも判断し難いが、彼女がそう言うならそうなのだろう。

口調が適当なせいで嘘っぽく聞こえるが、あまり嘘を吐くような人には見えない。

知り合ったばかりだが、直感的にそう感じていた。

「ですよ、何となくですけど二人は気が合いそう」

物凄く喋るタイプである美乃梨に対して、一度しか話した事はないが、どことなく受け身なコミュニケーションを取りそうな鏡子。

お互いの間を埋め合える、素敵な友人関係を築いているのではないだろうか。

「わかっちゃう？鏡子ってばあんまり喋らないから、ずっと私が話してるんだけどさ」
想像通り、しかし見た事もないのにその風景が容易にイメージできた。

「美乃梨さんにとって、鏡子さんってどういう人なんですか？」

楽しそうに話す美乃梨に、俺はつい少々踏み込んだ質問をしてしまった。

「じゃあねー、鏡子の事を話す前にっただけ聞いていい？」

スッと、美乃梨の表情に少しだけ真剣さが混ざったので、すぐに「はい」と頷いた。

「柳龍之介って名前、聞いたことある？」

『他言しちや駄目だよー』とか、『プライベートは秘密だよー』とか、そういう言葉を身構えていた。しかし、告げられたのは頭の中に無い、『消し去った』筈の名前だった。

「——え、えつと……、え？」

聞いたことがあるか？と聞かれれば、『はい』であり、『いいえ』だ。

『柳』という姓は知っていたが、『龍之介』という名は知らなかった。そして、奴とはもう関わらないと決めたのだから、『いいえ』と答えるべきだろう。

そのせいで非常に曖昧な反応になったが、『その名前』が聞こえただけで顔は相当に引き攣ったに違いない。

「その反応、やっぱり黒だなーっ♡」

嬉しそうに頬を歪ませる美乃梨。その笑顔は、今まで見ていた呆気らかんとした物とは少しずれていて、別の感情が少しだけ見え隠れしていた。

「黒、つて———どういう事ですか？」

さっきまでの緩みきった空気は霧散し、一気に背筋が冷える。

「えつとねーっ、最近鏡子の周りで変な事件が起きて調べてたのさー。で、鏡子の周りを嗅ぎまわってる人間を探していったらーっ、柳龍之介に辿り着いたつてわけ」

『柳』、俺の知っている限りでは、妙な権力を持っていて精神が未熟な『碌でなし』。

「知ってる事があつたら全部教えて欲しいんだよーっ、お礼はたっぷりするよ？♡」

肢体を振りながら指を這わせ、自分の身体の魅力を惜しげも無く披露する美乃梨。

しかし、奴の仲間と勘違いされているのだとしたら、とても腹立たしい。

「美乃梨さん、勘違いしないで欲しいんですけど、僕と彼は何の関係も———」

「そうなの？私には物凄く関わりがあるんじゃないかなーっつて、思ってるんだけど何の根拠があるのか分からないが、ファンクラブ以外での接点はない。」

（———もしかして、ファンクラブ自体を疑っているのか？）

確かに、大勢で杏奈鏡子の飲み会現場に待ち構えていたのはやり過ぎな感があったが、それがどこからかバレたとか———だとしたら少しやばいな。

「彼とは鏡子さんのファンクラブで知り合いましたが、気が合わなかったのだからファンクラブの出入りも控えて……、なのでほとんど何も知らないんですよ」

「そっかー、じゃあ彼とは特別何かがあったとかじゃないんだねーっ」

「そうですね」

尋問が終わると、美乃梨は少し笑った後にこちらを疑うような視線を浴びせてきた。

「それ、本当に言ってる？」

「ほ、本当ですよ、あいつは知り合いというだけで仲が良かったりとかは全く……」

「じゃあさー、そのとーっても暗い感情はなーに？」

読心術、かど一瞬思った。しかし、カーテンの隙間から少しだけ覗くガラス窓に、不気味なまでに怒りを湛えた表情の自分が写っていた。

流石にこんな顔をして、何の関係性も無いというのは無理があるのかも知れない。

「えっと——、俺があいつを嫌っているだけで、本当にそれだけですから」

自分でも、何故こんな表情を作れるのか不思議だった。

ただの嫉妬心から始まった、不信感と不快感、それだけだった筈なのに。

知らないうちに、自分の内部に負の感情が溜まっていたのだろうか。

もし、『愛する人が凌辱された』とすれば、こんな危険な貌ができるのかも知れない。

「なるほどねーっ。あ、電話ー、ちよっと失礼」

ポケットからスマホを取り出して、美乃梨が「もしもしー」とコールに出る。

「おっ。ほーほー、ふむふむ、なるほど、うんうん、へー、はいはいはい、わかったせんきゅー、はいまたねーっ——ん？」

会話内容が全く伝わってこない通話が終わり、美乃梨はフーツと息を吐いた。

「今、誰と話してたと思う？」

「——、分かりません、分かる訳ないじゃないですかッ」

ヒントも無く、見えない相手の事を分かる筈がない。

「後輩の子と喋ってたんだけどさーっ、最後に柳龍之介の声が聞こえてきたんだよね」
顔が再度強張るのを感じた。

「実はねー、彼にも別の子がこうやって色々聞いているんだけどさーっ、彼、面白いねー」
ケラケラと笑う美乃梨に欠片も同意ができなかった。

それが、もし狂人的な意味だったとしても、柳が評価された事が無性に腹立たしい。

「彼もさーっ、ゆーちゃんの事は何も知らなかったらしいけど、最後に『絶対に詳しい事は言うなよ』って叫んでたよ、何だろね『詳しい事』って、私すごく気になるなー♡」

(あの野郎、巻き込みやがった——!!)

今になって、安易な気持ちで飲み会に参加しようと思った自分を恨めしく思う。

ただ会えるかとも言われて参加した結果、それが不正行為だと後で知らされ、挙句関係者にバレて問い詰められ、最後には共犯者だと誤認させられてしまった。

側から見れば、今の自分は全身から怒りの感情が漂わせているだろう。

「出鱈目です——、俺は本当に何も知らないし、むしろあいつの被害者なんですッ！」

「被害者でも加害者でも、知り合いでも兄弟でも何でもいいんだよねー。柳龍之介でもゆーちゃんでも、どっちかが私の知りたい事を知ってれば、それだけでいいの、わかる？」

どんな微かな手掛かりでも、決して見落とす事はないという意思表示。

美乃梨の細く歪められた眼には、そんな決意が込められている気がした。

「まあねー、私も簡単に話を聞けるとは思っていないからさー、だから今から私とゲームで戦って、もし私が勝ったら教えてくれるっていうの、どうかなーっ」

「——はい？」

何も信用してもらえないどころか、ゲーム対決を提案されるとは思わなかった。

「まず拒否権は無しね。今から説明する事全部ちゃんと聞かないと後悔しちゃうぞ☆」

ゴリ押しで会話を進行する美乃梨。

さっきまでの軽いノリは変わらないが、安易に言葉を挟めそうな雰囲気では無い。

「ルールその一、私がゆーちゃんにパイズリをします。ゆーちゃんが射精する度に人間

一人が死にます、生きている人間がゆーちゃんだけになったら、私の勝ちです」

頭が理解しようとせず、ただの文字としてしか飲み込めない、そんな言葉並び。

美乃梨の頭がおかしいのか、自分がおかしいのか、世界が狂った様な感覚に陥る。

「ルールその二、ゆーちゃんは目的地到着までに何度射精しても大丈夫です。到着までに、自分以外の人間を一人でも生き残らせる事ができれば、ゆーちゃんの勝ちです」

目の前の女は満面の笑みを称え、とても楽しそうに話している。

人の生き死にを、こんなにも笑顔で話せるのは普通の人間ではない。

「ルールその三、私のおっぱいとゆーちゃんのおちんちんが十秒間離れたら、バス内の人間を皆殺しにします。ゆーちゃんは罰としてその後で拷問します」

バカな単語と猟奇的な単語が文章の中で混ざって、歪な呪文を作り出す。

「ルールその四、私が勝った場合、ゆーちゃんの知っている事を全部『身体に聞きます』、

ゆーちゃんが勝った場合、ゆーちゃんの『殺処分』を取り消しにしてもらいます」

これは、何が起きているのだろう。

さっきまで楽しく話し、彼女の人柄に惹かれ始めていたのは一体なんだったのか。

——、『殺処分』、俺は殺される予定だったのか？

もし、飲み会の件がバレた事が原因だととして、それで人が死ぬのか？そんな馬鹿な。

「ふーっ、これで全部かなー、ルール考えるの大変で昨日徹夜しちゃったんだよねー」

ウキウキしている美乃梨とは対照的に、恐怖心で身体が震えてくる。

「なーんだ、信じて貰えないかと思ったんだけど、割と真剣に聞いてくれたんだねーっ」

心底怯えている俺を見て、嬉しそうに屈託無く笑う美乃梨。

「——今の話を、真剣に聞ける訳がないですよ」

「簡単に説明するとー、このバスに乗ってる人間は全員『殺処分』が決まってーっ、その殺し方は全部私に任されてるんだなーこれが、凄いでしょ☆」

そんな妄言は信じる事ができない、信じたら自分が殺される事になるのだから。

「そんな権利、与えられる筈が——」

「まーそこは説明するのめんどくさいから省きまーす、って事でねーっ、モニタードン！」

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）

声に合わせて、バスの前方の天井に取り付けられたモニターの電源が入った。そこには、女優とプレイに興じる乗客の姿が映っている。

多分、バスの中に設置された隠しカメラの映像だろう。

『もう、出ないよ……、休憩しない？』

『だーめ、もつと気持ちよくなるうーよー、私を孕ませる気で射精しよー？♡』

息を切らして消極的な男性に対し、食欲に精を求める女性が濃厚に交わっていた。

「私たちはサキュバスだって言ったの、覚えてる？」

覚えてるが、それは作品の設定の話じゃなかったのか？

まさか、本当に自分はサキュバスだとも言うのだろうか。

「ゆーちゃん信じて無かったんだーっ、まあ普通信じてないか、はっはっは」

美乃梨は、カラカラと笑いながらモニターの映像を見ている。

「いい感じに、バスの盗撮物っぽくなってるねー」

映像のクオリティに満足したのか、美乃梨は腕を組んでウンウンと頷く。

「——美乃梨さん、あなたが悪い人の様には思えません」

彼女と会話をする事によって、どうにか混沌とした状況を変えようとした。

本当に話すと凄く楽しくて、人柄に惹かれるほどに美乃梨は魅力的だと思えたから。

「悪い人間じゃないけど、悪いサキュバスかもよー？」

バア、っと子供を脅かすように振る舞う美乃梨。

「俺は、美乃梨さんはいいいサキュバスだと思ってます」

もう、彼女が人間でも悪魔でも構わない。自分の感じたものが嘘ではないと信じたい。

「——、調子狂うなあ……、ゆーちゃん、そんなんじや悪人に騙されちゃうよ？」

ハア、と小さく溜息を吐かれる。

「じゃあ、最初はお試しでー、クイズ問題にする？」

俺が我儘だとも言いたげな表情の美乃梨。

「——命を賭けたクイズじゃ、何の問題の解決にもなっていないじゃないか」

「問題です、お腹を空かせたサキュバスが、栄養満点の人間を前にする事と言えば？」

チツチツチツと、時計の音を出す美乃梨。

サキュバス、『男の精を糧とする悪魔』と言うことは、答えは食精——いや、吸精？

「吸精だ！」

「ぶぶー不正解です、ゆーちゃん問題は最後まで聞かないとー、『栄養満点の人間を前に

する事と言えば？吸精ですが、それを英語で言うって？っていう問題だよ♡』

脳が震える程に怒りが満ちて、指を強く握りしめる。「——ぶぶけるな……」

「正解は、エナジードレインでしたーっ、はい、スイッチオン！」

ピンポン、と間の抜けた機械音が鳴った。

モニターに映った女性が音に反応してニッコリと笑った。

『おっと——じゃあ、今から貴方を天国に連れてちやいます♡』

『はあ……はあ……、もう、充分天国だよ……、はあ……』

先程よりも激しく息を切らした男性が、困り顔で笑う。

『違ふよ、もつと気持ちがいい、本当の天国だよ♡』

対面座位で男に跨る女はそう言うのと、ペニスに臀部を何度も何度も叩きつける。

『す、凄いい、凄く締まってる、あは、あああああ、ああ、出ちゃう、あつ——』

『射して、射して、いっぱい射してええええええええええつっつ♡』

ビクンツ——、と女の身体が大きく震えた瞬間、男が痙攣するように震え始めた。

射精をしている時とは少し違ふ、極寒の地にでもいるかのような身体の揺すり方。

『うん、頑張ったね♡』

女が、男の頭をよしよしと撫でる。しかし男は何も言わず、女を支えていた腕がだらりと下がった。まるで——息絶えたかの様に。

「あの人は、死んだんですか？」

「えっ、死んだよ？」

とても、呆気らかと美乃梨は言った。

『美乃梨さん、終わりました♡、ご馳走さまです♡』

カメラに向かって、両手を合わせてウインクする女に背筋が凍る程の恐怖を感じる。

(——本当に、命を吸われたのか……?)

セックスをして人を殺せる人間なんている筈がない。

射精のし過ぎで致死に至る可能性があるというのは聞いた事がある。しかし、今は完全に女の身体が振動した瞬間に男は死を迎えていた。

認めなくてはいけないのだろうか、サキュバスの存在を。

「はい、じゃあ次のカメラドーン」

次の女は、男にフェラチオで奉仕をしている所だった。リアルタイムの光景だと思ふと、こんな非常事態でも脳は興奮しペニスも膨らむらしい。

処刑台に乗せられた命が、後少しで断ち切られる事になると分かっている。それでも。

『ぶちゆう……ぶちゆう、ぐちゆうぐちゆう——、ふいふおふいひひ?』

『——もう十回は射してるのに、気持ちいいよ——、何でだろうー、あああ』

男はもう何も考えていない、いや、考える事ができないのだろう。

ペニスの皮膚がふやける程に舐めしやぶられて、悦楽の虜になっているに違いない。

『もう少ししたら、死ぬ程気持ちよくなるよー、んちゅちゅっ、じゅるるるっ』

『はっ——、つつあああ、つああああああ』

男の口から喘ぎ声なのか、苦悶の声なのか判断がつかない言葉が漏れる。

さっきの男と同様に、じわじわと体力を奪われている様だ。

「さーで、ゆーちゃんいつまで見てるのーっ、こっちこっち」

モニターに視線を釘付けにされていたのを注意され、顔をぐいっと引つ張られる。

いつの間に席を離れたのか、目の前に上半身裸になった美乃梨の姿があった。

やはり、たつぷりと膨らんだ爆乳が一際目立っていて、何度見ても見飽きることの無い妖艶さと、包み込まれたくなる母性を感じる。

しかし今は、それよりも危うい要素が圧倒的に優っていた。

「ルールは説明したしー、実際に人間が死ぬところも見せたしー、もう始めていいよね」
何が始まるのか。そんなの決まっている、美乃梨の考え出した悪魔のゲームだ。

「ちよつと待って下さい、こんなの納得いく訳が……」

美乃梨が中腰になって胸の谷間をぎゅちりと締め、一度包まれたら二度と抜け出せなくなりそうな乳肉の扉を、腰を浮かせればペニスが丁度届く位置に配置した。

「名付けてー、パイズリデスゲームツ——いええええええい！」

これが美乃梨の本性だとしたら、とてつもなく残忍で悪魔的な愉快犯なのだろう。

「ほら、ルールその三忘れちゃったかな？おっぱいとおちんちんすぐにくっつけよ？♡」
十秒間、もし触れ合わせる事を拒めば、人間は皆殺し——。

「接触が認められないので、カウントダウン入りまーす！」

死の遊戯は始まった。すぐにでも、ペニスを美乃梨の乳と触れあわせないといけない。

「じゅうー、きゅー」

一度射精をすると、人が一人死ぬ。そんな不条理は許されていい筈がなかった。

ただ、相手は百戦錬磨のAV女優で、男を絶頂させた回数は数える事ができない。だとしたら、俺がパイズリをされたら美乃梨は何度でも射精させるだろう。

「はーち、なーなー」

一人も殺さずに、目的地にたどり着ければ言うことはないが、現実的ではない。

何人もの男優達が、一瞬で絶頂させられているのを俺は何度も映像で見た。

「ろーく、ごー」

見れば見るほど、美しい爆乳。これに包まれて、ただで済みそうな気は全くしない。

「よーん、さーん」

パイズリなんてされた事もない、それでも、生きる為には戦わないといけない。

もう迷う事はできない、美乃梨の双丘に男根を挿し入れなければ。

「にー、いーいーち」

そうすれば後戻りができない、でもやらないと。

そして、ガチガチに硬直したペニスを、ゆっくりと挿入した。

「——ンッ」

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～ (上)

ペニスの皮膚が未だ触れた事のない感覚に晒されて、腰が更に浮かび上がるほどの快感が身体中を駆け巡り、射精への臨戦態勢をすつ飛ばして精液が尿道を駆け上る。

脳の神経に、多量の快楽刺激が勢いよくぶちまけられ、痺れる様な感覚が皮膚全体に広がり、軽い痙攣が全身で引き起こされてペニスが簡単に精を吹き出しそうになる。

それを、俺は全身の筋肉を硬直させ、視覚刺激を塞いでどうにか耐えきる事ができた。どんな感触だったか思い出せないほどの一瞬の接触、それだけで敗北寸前だ。

「——はあっ、はあっ——、はあっ」

「おっ、凄いファーストタッチは耐えるんだ……、久しぶりだなー、えいっ♡」

「——、んうっ——、はあっあっっ——、んあうっ!!」

——びゅるるるるるるうう

そして、少し乳を揺すられただけで、あっさりと白濁液を真上に高く発射していた。

美乃梨はそれがわかっていたかの様に、舞い上がったザーメンを舌で掠め取る。

「ちゅるっ——いっひゃちゅめー、ごひひようひやまー、んー？あれれ、凄く顔が緩んじやってるけど、もしかしてパイズリ童貞だった感じ？良かったねー私で卒業できて」

「——、そんな」

こうも簡単に逝かされるとは、思っていなかった。

こんなに気持ちいい事が、あるなんて知らなかった。



一旦摩擦するのを中断し、尚も男根から漏れだす残り汁を乳房で受け止めている。

ただ受け止めるのではなく、乳を微妙に震わせる様に振動させる事によって、敏感になったペニスがギリギリ気持ち良く感じる摩擦で、尿道に残った精液を絞り出された。

いや、絞り出された筈なのに微量の射精がまだまだ止まらない。

小さい頃お漏らしをした時の様に身体が脱力して、尿道を閉ざす事ができない。

ピンポン、と例の電子音がもう一度鳴り、女優が合図を受け取る。

『ちゅぷっ——んっ、じゃあ最期の一発、最高に気持ちよく射しちやおつか♡』

『——、もっと、気持ちいい、い？』

『うん、人生で一番気持ちいい精液、射しちやお——んっ、ちゅぷ、んちゅう、じゅるるるっ、じゅぼっじゅぶう——、んっ、んっ、んっ、んっんっ、へふ？はひへ？はひへ？』

『だすよ、だす、よ——、だう、あああつあつあああつあああつ——』

男が叫びながら絶頂した。

女はペニスの根元まで啜えこんで、飛び出してくる精液をゴクゴク飲み込んでいる。

口を開けっぱなしにした男は、腰をヒクつかせながら上半身を揺らしていた。吸引の音が聞こえなくなり、それに合わせて男の揺れも止まる。全て、吸い尽くされたのか。

『やっぱりエナジードレインって、さいっこう……♡』

『ゆーちゃん、私のパイズリどうだった？』

屈託の無い笑顔で、自慢の技の評価を聞いてくる。

しかし、快樂と絶望が頭を交互に駆け巡って正常な会話ができない。

我慢できる筈がなかった、どうする事もできなかった。

精神の安定を保つ為、自分に責任を感じない様に暗示を掛けるしかない。

ようやく、尿道に残った精液が射しつくされたのか吐精が止まる。

『いっぱい射たね♡』

乳房と乳房の間に溜まった精液を、閉じた谷間を開いて見せつけてくる。

双乳の間に白濁の橋を架け、肌を白く染め上げる大量の精液。

一度の射精でこれだけ吐き出したのは生まれて初めてかも知れない。

『いやー、やっぱり『いっぱい射たね』って言葉いいよねー、ゆーちゃんもそう思う？』

今しがた人が死んだのに、どうして美乃梨は何も感じていないのだろう。

種族が違うからなのか、そもそも人間の生き死に興味が無いからか。

『喋る余裕ないなー。私のパイズリに耐える事だけしか考えられないもんね、わかるーっ』

一度解放されたペニスを、もう一度胸で包み込む美乃梨。

強くは動かさないが、微妙な摩擦でじんわりと快感を蓄積させている。

『人間が二人死んだけど、ゆーちゃんはぜんぜん悪くないよーっ？♡』

ギシッと身体が震え、言葉を拒絶する様に内蔵が悲鳴をあげた。

悪いのは全て、サキュバス。人間を二人殺したのは、サキュバス。

俺は、その引き金を勝手に引かされているだけ、それだけ。

俺は悪くない、筈なのに――。

身体中がその『死』を勝手に受け止めて、内部から壊れていくのがわかった。

「それじゃあねー、次の映像はーっ、これっ、ドン」

モニターの映像が切り替わる。

映ったのは、二人の女優が一人の男を責めている所だった。よく見ると、一人目を殺した女の顔と似ている気がする。

「あははは、確かにわかりしちやダメとは言ってなかったけど、欲張りさんめーっ
どうやら、本当に一人目を殺した女優が合流して、3Pになっている様だ。

『ひゃひゃひゃひゃ、こんな贅沢許されるのかあ？』

『ふふっ、本当に贅沢だよね、んちゅっ、ちゅぼっ――、ちゅう、ちゅぶちゅぶっ♡』

『私は、独り占めしたかったんですけどー、れええろえろ、ぺろえろ、ちゅっ♡』

一人は亀頭を口で咥えこんで激しい上下運動で刺激し、もう一人は竿を指の輪で決して逝かない様に責めながら、玉を自分の口内に仕舞い込んで舐めしゃぶっている。

『おおお、嫉妬するな嫉妬するな、二人でちんぼを取り合うでない、ひゃひゃひゃ』

小太りの中年が、二人の美女にペニスを愛撫され上機嫌になっている。

富豪がハーレムで豪遊している様で、見ていて気分が良いものではなかった。

「ゆーちゃん、すっごく羨ましそうな顔してるけどーっ、二人同時とか憧れてるの？」

確かに、アダルトビデオで見ていた時は憧れはあったが、今は男が二人の女に拷問さ

れている様にしか見えない――、羨ましがる筈がない。

ニヤニヤ笑う美乃梨は、ゆっくりとパイズリを再開した。

一度目よりも、二度目のパイズリはもう少しだけ時間が稼げるかも知れない――。

「――、勝手な事をッ――言うな……」

少し余裕が生まれた事で、ようやく言葉が口をついて出た。

自分ではこの状況に絶望している筈なのに、その言葉が心底腹が立ったからだ。

しかし、本当に自分が怒りの表情を表しているのか、何とも疑わしい。

「本当の事を言っただけなんだけど、まあゆーちゃんがそう言うなら、よいしょっ」

美乃梨が、乳擦りのパターンを変えた。

左右の乳を同時に上下させるやり方から、交互に上下させる方法に切り替える。

搦り上げる乳の動きと、擦り降ろされる乳の圧迫感が谷間で交差して揉みくちやになり、ペニスは予想できない刺激の連続にどんどん射精感を高めていく。

ただ上下していた時とは感触の差も、快樂の質も全く違う。これは別のプレイだ。

「――ふっ――、ぐう……うぐうっぐうう……」

刺激が緩やかなものから急に強くなり、抑え込もうとしても声が漏れた。

「ゆーちゃんさーっ、君立場が分かってないみたいだね——、んっ、んっ、んっ♡」

グチュグチュと、水分を纏った肉と肉が擦れ合う音が激しく鳴る。

精液と汗が混ざり合った水分が、美乃梨の谷間で厭らしい音を立て聴覚を刺激し、ただでさえ魅力的な美爆乳が交互に弾む光景は、視覚を通して脳を激しく犯していた。

「君は、私にパイズリされたら絶対に射精するんだよーっ、それでーっ、その度に人間が死ぬの。じゃあどうするのが賢いのか、ゆーちゃんにわかるかなー？♡」

緩むことのない胸撃、性感はもうすぐにも射精できる程に高まっていた。

段々と早く、巧みに動き回る両乳に、思考が何度も中断する。

「——、何を……」

「わからないなら仕方ないかー、ほら♡」

美乃梨の両手が、柔らかな拳を握る様にきゅっと丸められ、谷間の乳圧を強化した。

「——はっ、はっ——やめっ、あっ——っ」

更に窮屈になった肉圧に、身体が発射の準備を整える。

それを避ける為に、一時的にペニスを胸の谷間から逃がそうと身体を振るも、肌にいづく様な乳肉が周りを囲む様にしてそれを阻んだ。

「無理無理、私のおっぱいは一度挟んだら絶対逃がさないから——んっ、んっ♡」
完全にホールドされた状態で交互ズリが加速して、亀頭が常に快感を与えられ続け、

（駄目だ、どうしようもないくらいいきもちがいい——、もう、がまんできない……）

「あっ——、やめっ、やめろっ——、あっ、あっ、ああ——」

「じゃあ、無知なゆーちゃんには二発目を射してもらいましょーねっ、えいっ、えいっ、ほら、ほら射しちゃえ、気持ちよくなった分だけ、おちんちんみるく射しちゃえ♡」

無邪気で暴力的な乳愛撫と、人を小馬鹿にする様な言葉責めに我慢は限界に達した。

「つつっあああっああああああああああああああああ」

——ビュクビュクビュビュビュウウウウウ、

吐精中も、射精が終わっても、美乃梨は全くパイズリを止めてくれない。

「も、もう——、射ましたから——、止めてっ、うっ……っああああ」

乳搾を区切る様に制止すると、美乃梨は一旦動きを止め不愉快そうに眉をひそめる。

「ゆーちゃん馬鹿だねー、折角一回の射精でカウントしてあげてるのに、ここでいっばい射さなくてどうするのかなー、後何回射精するつもり？全部出し切りなよ、ねえ、後何人殺す？ねえ、もっともっと、何度も楽しみたいの？それでも私はいいけどさあ♡」

長時間の射精が許されるなら、それは積極的にするべきだと叱責さられてしまった。

与えられたヒントは、確かに正論ではあった。そして、それを行わない手はない。

多くの人間を救いたいなら、勝ちたいなら、それは俺に課せられた義務だった。

「——何で、俺は何も悪くないのに、こんな——、どうして……」

「——んっ、もつと、ずつと——、全部ッ——絞ってくだ、さい……」

「んふっ、いいよ成績優秀の君にはご褒美で、タマタマの中身全部射るまで擦ってあげる、ほらっ——、まだ射るでしょ？んっ、んっ、んっ——、ほらっ、気持ちいい？♡」

美乃梨は、試す様な目をしながらパイズリを続けている。

「——こんな事で、少しでも時間が稼げるなら……」

「——気持ちっ、いいです——、もつと、美乃梨さんに、絞って、もらいたいです……」
 そう言うしかなかった。

美乃梨は俺が自分に平伏し、従順になる事を求めている。そうすれば、少しくらいは時間を掛けて絞ってやる、と遥か上の立場から突きつけてきている。

これは勝者と敗者の決まった、時間制限付きのゲームなんだ。

どうあがいても、どう対策しても、どう転んでもそれがひっくり返る事はない。

だから、一方的なワンサイドゲームの試合結果を、少しでも良い物に変える事、俺は最初からそれをしなければいけなかった。

勝つ方法より、負けながらも勝機を見出す方法を考えるべきだった。

それなのに、その強者に無謀に刃向かう行為は、もはや愚の骨頂だろう。

「良い顔になってきた、っ♡もつと、射しちゃいなー、んっ♡射せる時に射しとけー♡」

——くちゅぐちゅ、ぎゅっちゅ、ぐちゅぐちゅ、ぬちゅっ、ちゅっ♡

「——、あっ……、っ、あああ、っ……、あああっ、くっ——」

——びゆるううるるうう、びゆるるるうう……

連続して射精したせい勢いは余り無い。

しかし、垂れ流す様な吐精は、遠くに飛ばす時とは違った快感があった。

(回数としては二回分だが——、パイズリでこれだけの量が出るのか……)

さっきよりも長く射精していたからか、濃さは置いて、量は前回を超える。

「おちんちん痛くなっちゃうからー、ここで一旦おーわりっ」

「——ありがとうございます……」

精神がおかしくなりそうだ。

人間を殺しているのは目の前の悪魔なのに、被害者が加害者に謝罪している。

命を賭け事の天秤に載せて、自分が快樂に負けるとそれが損なわれる。

全員を救うのはもう諦めていた。

いつのまにか、自分が生き残る為の思考にシフトしようとしていた。

「じゃあ、お馴染みのエナジードレインムービー、略して『EDM』をどうぞー」

再度、二人に下腹部をしゃぶり尽くされ恍惚とした表情の男が映る。プロの連携は流石の一言で、二人の女は互いにぶつかる事なく、ペニスを舌と唇と口内で蹂躪する。

『んちゅつ——、じゃあ最後、ダブルフェラと言えばアレ、やっちゃおう？』

『いいけどー、あれタイミング合わせるの結構シビアだよねー』

フィニッシュの相談をする二人を、以前の余裕が全く無くなった男が見つめる。まさか、目の前で処刑の方法が話し合われているとは、思ってもいないだろう。

『俺も——、歳かなあ……へへっ、二人の女とやった程度で、へばるなんて……』

多分、通常の愛撫でもエナジードレインはゆっくりと発動しているのだろう。

その後、体力がある程度消耗した所で、限界まで絞り尽くす本当のエナジードレインを行い、命の限りまでを一気に吸い尽くすという流れに見える。

『じゃあ、サンドイツチフェラ、いきまーす♡』

二人は、ペニスを左右から挟む様な位置に動き、竿に二人の唇が触れる。

顔と顔が当たりそうな位に二人が近づき、ペニスで歯磨きをする様に交互に上下した。

『ふはひのふひへほうひひふえらひほー♡』

『女の口を二つ同時に使う背徳感はどうですかー？♡』

ペニスが二種類の唇と舌に側面をねぶり倒され、男はえも言われぬ顔をしている。

『じゃあ、とどめさしちやおー♡』『じゃあ、ぜんぶだしちやいましよー♡』

二人の顔が、同じタイミングで上下スライドを始めた。

その官能的で美しい技巧に思わず喉が大きくなり、口の端に唾液が垂れた。

——じゅびゅつぷつぽつ——、ぶぶじゅぶぶつじゅぼつ——、じゅぶつぷつぽつぶじゅぶ——、じゅぶぶつぷつぷぶじゅおうぶ——、じゆるるるるるるる、じゅぼつ♡

『最後は、二人の口に出しちやおー』『いっばい出せるように、タマタマもマッサージ♡』

二人の手が男の玉を柔らかく搾る様に揉みしだき、亀頭を舌で同時に愛撫する。

すぐに射精が始まり、口の中や唇の周りに白濁液が一気に吐き出されていく。

『ちゃんと口の中を狙いなさい♡』『外した分だけ、タマタマをイジメちゃうから♡』

ぎゅつぎゅつと、二人の手が睾丸を絞るように握ると、男は呻き声を上げた。

その反動で更に精液が顔に掛かり、二人はにっこりと笑って更に強く握り締めた。

『あー、もう勿体無いんだから外さないでよ』『ほんと、命の大切さがわかってないね』

『ぎぎいぎいいいいぎいいいいぎぎつ——、ぎゃああつああ……』

男が口の端に泡を溢れさせ、痛みに打ち震えている。

さつきまでとは違い、快樂の中での『死』とは程遠く、痛覚まで痛ぶられている。

口周りに付いた白濁を舐めとりながら、交互にフェラチオをして尿道の精液を絞った。

『ちよつと、やり過ぎちゃったかなー、気持ちよく殺してあげないとなのねー』

『だって、何か偉そうでウザかったし、きつと生きてる間も女泣かせだよ、こいつ』

最後に、グツ——、と玉を握り潰し、二人してニコニコ笑い合っている。

『はい、次のカメラどうぞー』

プツン、と映像が切り替わると女の子がイラマチオされていた。

『んっ、ぐっ——、ふっふっ——んっ、んっんっ——、んぐっ——ッ』

『好きモノめ、ほらっ美味いか、ほらっ、おっおっ、しっかり吸い付いてきよる』

実際は逆だが、映像だけ見ると男が女を凌辱している様にしか見えない。

その光景は、『あいつなら殺されてもいいんじゃないか』という考えを浮かべた。

「ゆーちゃん偉いなー、私賢い子は好きだからサービスしちゃうかも♡」

美乃梨は何をサービスしてくれるのだろう。

今、映像に映っているクズを生かすとかだったら、サービスにならないじゃないか。

「次は、ゆーちゃんに動いてもらおうかなー、それ名案じゃない？」

「——俺が、動く？」

喉がゴクリと鳴った。

「私がぎゅーって、おっぱい抑えておいてあげるからー、そこにズボズボーって、簡単でしょ？それに、自分で速さを調節できるからー、長持ちさせる事もできるしー♡」

その提案は、凄く都合だと思ってしまった。

早く、アイツの息の根を止めてやらないといけない。

「——是非、お願いします」

そう言うと、美乃梨は嬉しそうに二の腕で爆乳をギュッと寄せた。

「ゆーちゃん、どーぞ♡」

自分の白濁で何度も汚したデカパイが、腕を揺らすとぶるんぶるん弾んだ。

（今回だけは、どれだけ早く逝っても、我慢もしなくていい——）

席から立ち上がって美乃梨の肩を持ち、がつつく様に胸の中にペニスを突き立てる。すると、それを待ってましたと言わんばかりに、乳肉で優しく受け止められた。

「いっばいっばい腰振って、おちんちんたっぷり気持ちよくなるーっ？♡」

ヌルヌルの乳ホールにペニスを突き入れる度に、竿全体が射精する程の快感を得る。

最初から全力でおっぱいを蹂躪して、自分が気持ちよくなる為だけの腰振りをする。

「いいよー、もつと気持ちよくなって、ほら、ちよつと乳首とかも擦ってみて♡」

言われるがままに、最高の谷間から名残惜しみながらも抜け出し、ピンピンに勃った

美乃梨の乳首と乳輪にぬるぬるの亀頭を押し付ける。

大きく前方に突き出したロケットおっぱいの先端目掛けてペニスを突き立てると、柔らかな乳肉にズブズブと埋まり、肉の塊を犯しているかの様になった。

谷間で挟まれる事も最高に気持ちいいが、硬くなった乳首と擦り合わせ、弾力溢れるおっぱいに飲み込まれる光景も、とても魅力的で脳が興奮物質を大量に溢れさせる。

「あんっ、私も気持ちよくなっちゃうじゃんかー、んっ、グリグリしちゃだめーっ♡」

しかし、即射精するには時間が掛かると思い、谷間でのピストン運動に戻った。

「ゆーちゃん、今度はすぐに射精したそうだねー、いいよー、手伝ったげる♡」
美乃梨が、俺の腰の動きに合わせて胸をバウンドさせて快感を乱れさせる。

突く度に、違う形のおっぱいが迎え入れ、複雑な快楽を飽きる事なく与えてくれる。
「おっぱいオナホ、突く度に味が変わるスペシャル仕様、すぐに逝っちゃうよー♡」
言われた通り本当に射精が近かった。

しかし、今は射精する事に何の罪悪感も浮かばない。

モニターに目を移すと、男は女の頭を掴んでペニスを啜えさせたまま、腰を動かさず
にずっと固定していた。女の口からは、吐瀉物が大量に溢れている。

呼吸が限界になると解放し、少し息を整えさせた後またペニスを差し込もうとする。

女が首を振って、いやいやをするがお構いなしに閉ざされた口を無理やり抉じ開け、
女の上げる苦悶の声を楽しむかの様に、鼻歌を奏でながらイラマチオを再開した。

「もう逝くんでしょ、いいよ思いつき突いて、思いつき射して♡」

美乃梨のテクニクもそうだが、自分から主体的に射精する快感は凄まじい。

おっぱいをオナホルの様扱うのも征服感があつて気分を高揚させる。

「――、逝くっ、あつ――、あつあつ、逝くっ――、射るっ」

――びゆくびゆくびゆく、びゆるるるるるるる、びゆくうびゆくうつ、ぶびゆる、
「すつごい、まだこんなに射るのー、ゆーちゃん性豪すぎ♡」

達成感のある射精を終え、何故だか勝利の余韻の様な物が脳を満たしていた。

『お――、まだそんな元気が――、ちよつと――、休ませてくれ――おいつ』

モニターに映る男は、ペニスを抜き出そうと腰を引くが、女は逃すまいと腕で縛り付
ける。そして形成が逆転し、男は女を引き剥がそうと力を使うが、もうそれも叶わない。

『あれだけ元気だったのに、もう降参ですか？ふふつ、んちゅ――、じゆるるるるるうつ、
じゅぱつちゅつ――、んちゅつ、れおれおろろ、もっほほ口に突っ込んでくだふあひ？』

『――やめろつ、ああああああ、溶ける、ああああつあああ、やめてくれえつ……』

因果応報だと思った。無理矢理に侵し、快感を食った罰だと。

しかし、座席に崩れ落ちて、その後もペニスを吸い付かれ精力を奪われて逝く様を見
た途端に、自分がとんでも無い事をしてしまった様に感じられた。

『じゆるるるるうつ、じゅぼんツ――、ふう、DMを演じるのも楽しいですね♡』

――、そうだ――彼女達は全員がAV女優。

女がひどく可哀想に見えたのも、男が憎むべき相手に見えたのも、全ては印象操作。
守るべきは女でも、人間でもなく、自分の命だと誓った筈なのに。

一時の感情に流されて、戦うべき敵の味方をしてしまった。

人間を間接的に殺めた事に対する罪悪感はまだ無かったが、それが自分の首を絞め
る行為に繋がるとは思っても見なかった。余りにも浅はかな自分にうんざりする。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）

「ゆーちゃん、五人目を殺した感想どうだった？自分が気持ちよくなるのと、それが原因で殺したい人間が死ぬのって最高の気分じゃない？私達サキュバスと一緒にだよ♡」

「……………」、そうですね……………」

段々と感覚が麻痺し始めていた。

人間が死ぬことがひどく当たり前に感じられて、射精した時の罪の意識も薄れている。

ペニスは段々と勃ちが悪くなってきている、それは体力的な問題でもあった。

精神が、身体が、疲れて機能を休めようとしている。

「何かずつと腕動かしてたら疲れてきちゃったなー、ちょっと休憩しよーっと」

身勝手、かつ自由奔放。美乃梨は何か縛られるという事はないらしい。

自分で作った時間制限のルールも、勝手に放棄して捨て去った。

ただ、会話の中に見たプロ根性の様なモノは間違いなく彼女の性格の一つだろう。だ

から、俺の事を相手するのは、そんな粗雑で適当な振る舞いでも十分だという事だ。

「そうだ、イツチーこつち来てーっ」

バスの中で誰かを呼びつけると、またも美乃梨クラスの爆乳をぶら下げた、黒髪清純

派（上裸）おっぱい女優の、甘宮^{あまみやいむ}苺がそのIカップ乳をぶるんと揺らして笑顔で現れた。

「パイズリ途中でしたけどー、みのりん先輩のお呼びにより、苺参上しました！」

ビシッと、敬礼するとまたしても半球型の乳房が揺れる。

「イツチー、もうすぐ出番だったけど、こつちでこの子の相手して」

「へっ、私エナドレできない感じですか!!」

「うん！」

何の躊躇もなく即答する美乃梨に、苺はガックリと肩を落とした。

「先輩はいつもそうだ、勝手に全部決めちゃうんだもん……………」

サキュバスにとっては、大好物のメニューをお預けされた位のショックだろうか。

さっきまでの笑顔が嘘の様に表情に陰りが見えている。

「後、五回この子を逝かせといてー、頼んだー」

胸をウエットティッシュで拭いながら、美乃梨は別の席に捌けていった。

「……………」

「……………」

苺が隣に座り気まずい時間が過ぎるが、少しでも時間が過ぎてくれるのを祈る。

「あーあ、やる気出ないなー」

苺は、身体とは不釣り合いの童顔を、ずーんと暗くして佇んでいる。

「十秒ルール、じゅー、きゅー、はーち、なーな、ろーく」

美乃梨が遠くの席からコールを始める。

「わかりましたわかりました、やりますから急かさないで下さいよー」

洪々、苺は席の前に立ちペニスを胸に挟んだ。美乃梨とは違う肉質に驚く。

「全然やる気でないですけど、やるからには全力でやるので、早く逝ってね♡」

全く覇気の無い言葉、雰囲気だけは作っているが心底どうでもよさそうだ。

「おっぱい気持ちいいですかー、いいですよー」

胸の感触はとて気持ちいいのだが、射精感が高まるかという話は別だ。

よくパイズリは気持ちよく無いという話を聞くが、この性技はテクニクと持っているおっぱいによって、どれだけでも気持ち良さに振れ幅があるのだと分かる。

「えへへへ………はあ」

雰囲気さえ保てなくなっていて、少し可哀想になってきた。

しかし、この子の相手をして時間が稼げれば、どうにか全員を殺される前に目的地に到着できるかもしれない。諦め掛けていた意志が少しだけ奮起しようとしていた。

「気持ちいい、ですよ、すぐに射てしまえばいいですよ……」

できる限り、気持ちの良さそうなフリをして、時間を引き延ばそう。

「本当ですかー、じゃあもつと良くしてあげますねー」

台本を棒読みするかの様な演技。

これなら、あれだけパイズリで射精した俺でも何とか耐えられるだろう――、

『あー、あー、早く終わったら超高級スイーツ奢ってあげるから、頑張ってー』

「――、超――、高――、級――、スイーツ？」

苺の手がピタリと止まった。

「――、――、先輩、二言はありませんか？」

『武士に二言はない！』

ゆっくりと、絞り上げる様に苺の胸が動き出す。

止まる訳ではなく、動く訳でもない、超スローのパイズリ。それは、視覚では決して伝わらない、身体の触覚を直接愛撫する様な、全く違う種類の性技だった。

「ごめんね、君に恨みはないんだけど、すぐに五回逝かせちゃうね」

「――、あつ、あ――、あつ――、あ、あつ――、ああつ、あつああああああ」

勿体つける様にペニスの頂点まで登っていく。その最中でさえ気持ち良過ぎるのに、もし、あの乳肉を上からズリ降ろされたら、しかもゆっくりと廻る様におとされたら。

「無理しないでね、私の超スローに耐えられた人いないから、楽にして……」

優しい声で、慈愛に満ちた表情で訴えかけられる。

演技なのか素なのかはわからないが、表情でペニスが反応するとは思わなかった。

「一回目、早かったね♡」

「――え」

まだ全然登り切る前なのに、ペニスはたっぷりと乳間に白濁を漏らしていた。

自覚の無い射精。

ゆっくりとした摩擦によるペニスへの圧迫が、知らず知らずの内に射精を促していた。

「君のせいじゃないからね、私のおっぱいでコレされたら、みんなそうなたっちゃうから」
尚もゆっくりと持ち上げられる爆乳に、ペニスが喜んで反応しザーメンを乱れ撃つ。

「せんぱーい、これ続けて射精させたらどうなるんですかー？」

『あー、一分位間を開けたら二回目のカウント入っていいよー、今ルール作った』

「はい、ってことなのでー、もうちよつとゆっくりしよっか♡」

おっぱいが登り切り、亀頭を中心に捏ねる様に精液ごとペニスを弄ぶ苺。

「こーねー、こーねー、まだ逝かないでよー、ぐーちゅぐーちゅ♡」

精液の粘つきがペニスに絡みついて、おっぱいの感触をより強化してしまう。

「だーめだよー、そんな逝きそうな顔して、一分経ったらすぐ射していいけど♡」

表情で判断できるのか、射精感が高まり過ぎると弱め、治まってくると強めに刺激し、ギリギリで逝かない状態を維持してくる。

A V女優の射精コントロール技術とでも言うべきか。

「凄くいい顔しちやってるよ、そんなに気持ちよくなって貰えると嬉しいかも♡」

はにかむ様な笑顔を浮かべながら、グリグリと鬼畜な乳責めをしてくる苺。

乳圧を微調整して、絶対に逝かない亀頭責めを繰り返していた。

「————ひっ、ぐ————、きつつ————、い……」

射精する為に身体を弛緩させても、決して逝けないというのはある種の拷問だ。

「ごめんね、すぐ逝かせてあげたいんだけど後ちよつとだからね、あ、オツケー、時間来たから逝こっか、亀頭こねこねで射しちやおっか、こーねこーね、ぐちゅぐちゅー、こーねこーね、ぐちゅぐちゅぐちゅ、射ちやう？いいよ、射して射して♡あつすごい♡」

「ああつああつあつあつあつあああつあつあつああ」

発射したばかりで一分の間隔しか空いていなかったのに、もう絶頂に至った。

「二回目ー、頂きましたー♡」

何かが違うと最初に包まれた時から感じていたが、それは体温だった。

苺は代謝が良いのかおっぱいが熱を持っている。オナホールは温めるとリアルな膣感を味わえると聞いた事があるが、体温のせいでおっぱいが生温かく絡みついてくる。

「あーん、谷間からみるく垂れてきちゃってる、ちよつと味見していいかな？」

じゅるじゅると音を立てながら、乳間に残った精液を飲み干していく苺。ペニスは乳の間に挟んだままで、全て吸い取った後は亀頭に口をつけて尿道の精液も吸い出した。

そのままの流れで、パイズリフェラが始まった。

「んちゅっ——、うん——、くちゅっ、じゅっ、じゅるるるう、おいしー、パイフェラ

初めて？気持ちよくなってもいいけどー、まだ逝っちゃだめだよー？」

一分という区切りは、『苺に必ず一分後に逝かされる』という現実を叩きつけられた。多分、次も一分後に逝かされてしまう。

「こうやってー、ひはでー、先つちよ苛めててあげるねー、れえれるー、ぺろぺろえろおー、えろえれるお、れるれるおー、ちゆるうる、気持ちいい?♡」

乳房でペニスを固定し、先端を颯る様に舌で刺激される。

胸の間から顔を出した亀頭が、与えられる快楽でカウパーをどろどろと漏れさせる。

「じゃあー、次は全部お口で飲んであげるから、私のパイフェラ味わってね♡」

頭をガツツリとペニスに近づけて、竿頭を口に含まれる。暖かな口内の中で舌がペニスをぐるぐると舐め周り、竿は汗と精液でベタついた爆乳に揉みくちやにされる。

「ふおふひはんひははは、射しちやおつか♡んっ——、ふっ、ふっ——、んちゅっ、じゆるるるるっ——、んっ、じゆるるるるるるる——、じゅぼっじゅぼっじゅぼっ♡」

「——あっう、はあっ——、いっ——、ぐう——ッ」
無慈悲な愛撫による吐精。

口と舌と胸の連携した動きは、精液をひり出す為の搾精器と化していた。

「んっ——、んっ——、んっ、ごくっ——、ん——、はあ……三回目、美味し♡」
射精が始まって、苺の乳房がびったりとペニスに吸い付いて、出し切るまでずっと吐精を促す様に微動して快感を与え続けて来た。全身がそれに合わせて痙攣する。

ゆっくりとお掃除バイズリしながら精飲し、次の搾精にシフトした。

「後二回かー、後はどういうパイズリがいいかなー、先輩に比べると全然パイズリのレパートリーないし、ふーむ、じゃあまた超スローで絞っちゃおうかなー」
ビクツと身体が拒絶反応を起こした、あの性技は始まったら最後まで逃げられない。

「エッチなローションでぬるぬるしてるから、さつきよりヤバイかも♡」
そう言って寄せていた谷間を開くと、まるで粘液の糸を引いた食虫植物の様だった。

その妖艶さは、どんな男でも視線を引き寄せられる、蠱惑的な中毒性がある。

「はい、いただきます♡」

次の一分後に向かって、パクんと乳に啜え込まれるペニス。

「ほら、ゆーっくり、ゆーっくり、根元から上がってくよー、ほーら、身体の奥から、どんだん気持ち良さが上がってくるよー、意識を集中してみてー♡」

駄目だ。意識を集中すればするほど、感度が増してしまう、意識を逸らさないよ。

「ほら、限界まで乳圧を強めてるから、絶対逃げられないよー♡」

「——あっ、あっっあ——、あっ——、ああっ——、ああ……」
またしても、腰が浮き上がるほどに快楽が身体全体を駆け巡る。

ただ、ゆっくりと絞り上げているだけに、何故これほどの快感を——、
「ふふ、もう限界だよねー、もう少しだけ待ってね、時間丁度に射精させてあげるね♡」

もう完全に射精の決定権は奪われていた。

射精がカウントされないタイミングで早めに出そうと思っても、絶妙に射精感をずらされて、結局は定刻の射精にすり替えられてしまうだろう。

「十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、はい、よくなりました♡」

——ぴゅっ、ぴゅるるう、ぴゅるるうるる、ぴゅるるるっ

そして、またも絶頂の自覚なく精液がおっぱいに注がれていく。また人が死んだ。罪悪感が、ゆつくりと脳を蝕んでいく。

「気持ちいいでしょー、後一回でお別れだから、最後は苺スペシャルで絞ったげる♡」

（——これ以上誘惑しないでくれ……）

甘宮苺、童顔爆乳の最高傑作とまで言われた女優。

その得意技で犯して貰えるなんて、幸せを感じてしまってもおかしくない。

（これだけ気持ちよくなれたら、もう死んでもいいの、かな……）

「じゃあ、また一分待とつかー、この縛り無かったら楽なのになー」

『もうそのルール無しでいいやー、めんどくさいだけだよねー』

その声は、まさかのモニターから聞こえてきた。

モニターの向こうでは、ペニスをパイズリしている美乃梨の姿が映っていた。さつき

まで自分が受けていた筈なのに、映像で見るとヤケにイヤらしく見える。

「あーっ、先輩それ私が担当してた人じゃっ！」

『そりゃー、イッチーが居なくなっただから代わりが必要でしょー、んっ、んっ♡』

豪快なパイズリで男のペニスを蹂躪する美乃梨。

さつきまでアレを直接受けていたせいで、心が男に嫉妬していた。

（——なんて、気持ち良さそうなんだ……）

「くーっ、なんたるパワハラだ——、超高級スイーツ絶対奢ってもらいますから……」

『わかってるから、早く逝かせちゃいなーっ』

美乃梨はさくっつと男の精液を搾り取って、指で掬い取って味わっている。

薄っすらと目尻に涙を浮かべながら、苺は歯を食いしばった。

「——苺スペシャル、いくよ？」

苺が、目を閉じてゆつくりと顔を俺の顔に近づけてきたので、思わず仰け反る。

キスをしようとしているのは分かったが、精液が付いているし嫌悪感が勝ったせいだ。

「大丈夫ですよー、とっても甘いですから♡」

言われると、確かに甘い香りが口元から漂ってきて、吸い込まれる様に口が合わさる。

「んっ——、くちゅっ、えろー、私の唾液飲んでくだふぁーひ、ちゅぷっ、んふ♡」

「——うっ——、なん、だ——、これ……、」

ペニスが更になくなる様な感覚、限界を超えて膨張を始めている。

またも得意技の超スローパイズリが再開される、『苺スペシャル』はキスをしながらの胸愛撫『パイズリキス』の事だった。

「じゃあ、そのまま射しちゃおっか、ちゅっ、んっ——、んふっ、ちゅっ、あ♡」

「あっ——、あっああっあっ——、あっああああっああああ……っ」

甘い液体を口に流し込まれ、舌で口内を蹂躪され、ゆっくりと胸が上昇していくと、身体が暴れる程に振れ続け、ペニスが胸内にザーメンを大量に漏らしまくった。

「最後になるかも知れないからー、もうちよっと挟んでてあげます♡」

ようやく、少しだけ苺のパイズリのカラクリがわかった気がした。

微動しながら細かくパイズリをして竿を登っていく性技、その正体は超振動のパイズリだった。例えるなら、バイブレーションで胸ごと振動させる様な感じか。

「くあっ——、くっ——、やめっ——、ああっ、くう——っ、うう……」

さっきまであれだけ出したのに、苺の甘い唾液を飲んでから精液の飛びが増していた。

「イッチーやり過ぎだよー、それじゃあゲーム終わっちゃうじゃんかー」

腕組みをして乳首を隠した美乃梨がゆっくりとこちらに歩いてきた。

「あっ、先輩エナジードレインはどうしたんですか？」

「ん？先に終わらせといたよー、どうせ射精するって分かってたしいいでしょー」

「——、先輩って本当に自由過ぎ……」

何というノールールだ。

もう射精をしたら処刑とか、そういう細かい事はどうでも良くなったらしい。

(この様子だと、こいつらが約束を守るかも怪しくなってくる……)

段々と焦燥感が身体を締め付け始めていた。

合計で十人が殺された計算だろうか。

乗客は二十人ほど乗っていただろうから、大体半数が命を落としたという事になる。

正直、もう誰が死んでも何も感じなくなっていた。

その代わり、自分が生きて帰れる可能性が少しずつ薄れていく様な感覚がある。

後、どれだけ時間が過ぎれば目的地に着くのだろう。

「あー、時間気になりますか？確か、あと十分位で到着みたいですよー」

きよろきよろと周りを見回していると苺が教えてくれた。

全く時間が分からない状況より何とか希望が持てる。

「——、後十分なら……」

「そうだ、イッチー残りの十回も頼んでいい？」

「はいっ？別に良いですけどー、刺激に慣れてきた感があって時間掛かっちゃうかも」

「それは大丈夫、私が協力してあげるからー、ね？」

そう言うと、美乃梨は胸をぶるんと寄せて近付いてきた。

ゆっくりと爆乳に顔が埋まっていき、乳房の谷間に埋まる様な形になる。

「苦しいよね、ゆーちゃん、ゆーっくり呼吸して、そう、いい匂いがするでしょ？」

「むぶぶむ、はああああ、はああああ、むぶぶぶむ……」

後頭部を掻き抱く様にして拘束され、爆乳がグリグリと顔の面に擦り付けられる。

顔を解放されようやく車内の空気を吸い込む。鼻から吸い込んだ、香水の様な体臭の様な甘い匂い。さっき、苺に近づいた時に吸い込んだ匂いと、どこか似ている。

「全部吸った？うん、偉い偉い、もう素直になれるよね、うんうん♡」

「——、身体が、熱い……」

全身が風邪を引いた時のような熱さと、倦怠感のある重さで満たされている。

頭もぼうつとしてきて思考が思うように回らない。

「ゆーちゃん凄く偉かったね、でもね、もう頑張らなくていいんだよ♡」

頭をよしよしと撫でられる。

抵抗しようと思っても身体が上手く動かせない。力が入らない。

「もう、抵抗する気も起きないでしょー、全部出してスッキリしちゃおうよ♡」

「な、何を、したんですか……」

明らかに、身体に異常が起きている。

「ん？まだ係りが甘いとはゆーちゃんの理性すごつ、まだ足りなかったのかなー？」

「またも、顔の前に爆乳が近づいて来る。あの香りは、危険だ。」

「それー、むにゆーむにゆー、顔気持ちいでしょう、おっぱい当ててるだけで射精しちゃった男の子もいるんだよ？もつと、いっぱい吸ってー、吸ってー、吸ってー♡」

解放されるまで、胸を左右から挟む様に押し付けられる。顔表面の感度がかつてない位に敏感になり、顔にも性感帯があるという事を思い知らされる。

「——、くつ——、るう——しい……」

「せんばーい、もう始めていいんですかー？」

「オッケー、じゃあスタート♪」

苺の胸がペニスに触れるのを感じた、しかも、触れただけなのにもう——えつ——、

「はい、一回目ー、連続射精もカウントしていいんですよねー、すぐ次いきます♡」

触覚の異常、触れられただけで身体の芯が痙攣を起こし、全身が震えている。

胸の感触を全て余さずペニスが感じ取って、今までの数倍は気持ちよくなっていた。

「ゆーちゃん、もう私達の体液が全身に回っちゃったから、我慢とか無理だよ？」

耳元で言葉を囁かれるだけで、ビクビクと腰を震わせた。

「あれ、先輩もしかして効きすぎちゃってませんか？もう二回目——」

「まあ時間ないしいっしょー、ほらゆーちゃん、おちんちんみるくだーして、びゅ、びゅうううっ、びゅううううっ、どびゅーっ、びゅーっ、どっぴゅんどっぴゅん、あ♡」

腰の痙攣に合わせて、ペニスが勝手に大量のザーメンを吐き出していた。もう駄目だ、身体が言う事を聞かない。

淫語で耳を犯されるだけで、簡単に射精してしまっている。

「せんぱーい、私おっぱいで包んでるだけなんですけど、私いますか？」

「ごめんごめん、壊れたおちんちんじめるの面白くなっちゃって」

苺がペニスの根元を握って乳首に擦り付けてくる。そのままグリグリと先端を苛め抜かれ、簡単に射精し、少し経ってからまた射精させられた。

口が唾液を漏らし続け、喘ぎ声を出すことができない程に何も力が入らなくなった。

「後はー、五人でゲーム終了かなー、最後アレやっちゃう？」

「アレー、いいんですか？」

目の前のやりとりも、ほとんど耳と目が勝手に知覚しているだけで何も咀嚼できない。自分の身体が人形にでもなったかのように、何かをしようと思う事もない。

いや、一つだけ脳を支配する感情があった。

（逝きたいもつと気持ちよくなりたい射精したいもつと快感が欲しいもつと激しい快樂）

「これだけおちんちんが敏感になった状態で私とイッチーがダブルパイズリしたら、この子どうなると思う？」

「えつと、常人なら快樂で狂って廃人になっちゃうんじゃないですか？」

「そうだねー、でもこの子の異常な射精量と強い理性、頑張ってくれそうじゃない？♡」

二人が、ペニスを中心に左右を陣取り、ゆつくりと乳肉同士を近づける。

（やばいやばいやばいやばい、あんなおっぱいふたつにはさまれたら——っああああ）

「極太おちんちんをお乳でギュってした、おっぱいサンドイッチの出来上がり♡」

「せ、先輩の乳首、私の乳首にくっつい——、てっ——、きてるんですけど……ん♡」

肉と肉がぎっしりと詰まった乳筒は、ペニスが窒息する位に竿の全長を覆い尽くした。

それと同時に、美乃梨は苺に対する愛撫もこなしている。

「ふふーん、やっぱりダブルにするなら、私達もエッチな空気を作らないとねー♡」

美乃梨は苺としっかり指を絡めて、口と口が触れ合いそうになるまで近づく。

「先輩待って、私今日はそんなつもりじゃ——」

「私がイッチーとキスしたくなかったんだから仕方ないじゃない、そのお礼ー、ちゅっ♡」

美乃梨が少し前に顔を突き出して、顎を引いた苺の唇を容易に奪い取る。その反動で、胸がずりんと揉み込まれながら擦られて、あっさりとペニスが精液を吐き出した。

「えろ——、ちゅっ、んちゅっ——、ふんはい、私の気持ち知ってるのに……ちゅっ」

「イッチーまだ諦めてないのー？ちゅっ、私そっちの気ないってーんちゅっ——ん♡」

二人が攻守を交代すると、乳の肉壺が大きく変形してペニスを飲み込む様に吸い付いてくる。それが行われる度に射精感が一気に押し上げられた。

二人がディープキスを始め、視界が恐ろしく淫猥な光景で満たされていた。お互いの口を必死に貪り合う二人の美女が、汗と唾液で濡れた爆乳同士を擦り合わせ、喘ぎ、体液を交換し、手を強く握り合って、同性という壁を超えて愛し合っている。相手を犯す様な視線で舌と舌を絡み合わせ、乳首と乳首を突き合わせて、その間にいる邪魔者を排除するために全力で乳肉を上下に躍らせる。

肉と肉は、時に同じ動きをし、時に絡むように弾み続け、二人は乳房でセックスを楽しんでいるのではと思う程に、肌と肌を入念に擦り合わせ続けた。

もう、誰かを射精させるという目的はどこかへいったのかも知れない。

しかし、それが誰かを射精させるという結果と結びついていない訳ではなく、むしろ逆で俺は常に二人の適当な動きで絶頂させられ続け、肉体も精神も愚弄された。

「——ひっ、ひっ——っ、ひっ——、ひいっ——、ひっああっあ」

自分達はディープキスを楽しみながら、乳肉は常にペニスを愛撫し続けた。

もう何も射ないと思っても、どこからか精液を引っ張つられて強引に吐精させる技術。

「先輩、もうこの人逝き狂ってますし、もういいんじゃないですか？」

「そっかー、でもまだ時間あるし、イッチーとキスしながらでもパイズリできるし」

「おちんちん邪魔なんですけど。簡単な刺激だけで精液射しますし、汚いですよー」

「サキュバスが男の精を拒んじやだめじゃないかなー、まあイッチーらしいか」

えへへ、と笑った苺は、ペニスを自分の胸に寄せて、高速のパイズリを始めた。

「五秒交代で、どっちが多く精液を射させるか勝負しませんか？先輩♡」

ズリズリズリ、ぐちゅぐちゅぐちゅっ——びゆるるっ、ぶびゆるるるっ、

「私が負けたら、この後私とエッチしてくれて？いいよーっ受けてたっ！」

——パンパンパンパンツ、パンパンパンパンツ——びゆるううっ、ぶびゅっ、

「先輩、大好きです、一生先輩の事を愛し続けます♡」

——ずりん、ずりゅっずりゅずりゅっ——びゆるううるう、ぶびゆるる、

「私は、先輩として大好きだよー♡」

——ずりゅっ、ずちゅっちゅっちゅっちゅっ——ぶっぴゅぶっぴゅ、ぶびゅびゅ、

「絶対諦めませんから、いつまでも先輩を追いかけますから♡」

——ずちゅっ、ぬちゅっ、くちゅくちゅ——びゅっ、ぴゅぴゅっ、びゆるるるっ、

「諦めが肝心なこともあるよー？」

——ずりずりずりずりい——ぶびゅっ、びゆるるるっ、ぶびゅっ、ぶびゅっうう、

「最後に私の番きましたッ、これで勝——」

『目的地に到着しました——』

「あ、着いたみたいねー」

「ええええええええ」

母がとぼとぼと席から離れ、美乃梨は手を振ってそれを見送った。

「あははー、ゆーちゃんダメだったねー、もう二十回以上射精しちゃったでしょー」

「————、こんなのめちやくちゃだ……」

全てが理不尽で無意味な行為の応酬でしかなかった。

「えー、でもゆーちゃんが私たちのおっぱいに屈しなかったら勝てたのにねー♡」

「男なら、誰だって射精しますよ……、あんな事されれば……」

「何よー、勝負の結果に納得がいかないって事ー？」

不満な表情をしているかと思えば、美乃梨はニヤけてこちらを見つめている。

まだ、別の地獄を見せる準備があるとでも言っているかのようだ。

「まあそうだよねー、ちよつと私もルールが適当だったかなーって反省してるんだー」

いや待ってくれ、これ以上もう何もしたくない、どうせ殺されるんだ。

「もし、ゆーちゃんがどーしても戦いたいわって言うなら、最後の勝負しよっか♡」

（嫌だ嫌だ、もう嫌だ、何もしたくない何もしたくない————）

しかし、それを断る事は生存を拒否するという事に他ならない。

（————、それでも、もうアイツらに弄ばれるのは嫌だ………）

「実はー最高のチップを用意したんだー、ゆーちゃん聞いてくれるよねーっ」

散々人命をチップにして楽しんだ悪魔が、それ以上の物を用意したと言った。

胃が縮み上がって急激に吐き気が湧き起こる。

この女は、今までロクでもない事しか口にしなかった。今度も、絶対に————、

「実は、まだみんな生きてるって言ったら、信じる？♡」

（ふざけている、ふざけているふざけている、ふざけるなふざけるな、ふざけるな————）

「後、ちよびーつと吸ったら死んじやうけど、ほんのちよつとだけ残しておいたんだー」

「————、いい加減にしろよ……」

「いいのかなー、そんな口聞いて。あれだけ必死に守ろうとした命じゃなかったの？」

失う度に精神を追い込まれたのに、それが嘘で、これから本当に死ぬだって？

しかも、その命全てが今、俺の命と一緒に天秤に乗せられたのか？

「それじゃあラストバトルと洒落込もうか、ゆーちゃん♡」

「嫌だ嫌だ、何でこんな目に……」

「我儘言っちゃだめだよー、ゆーちゃん。君は他の人間の命を預かってるんだから♡」

（勝手に乗せられた重りだ、そんな責任を負わされる理由なんてないじゃないか!!）

「俺は、俺だって、もう、勘弁してくれよ……」

そんな叫びも美乃梨には全く届かず、にっこりと笑ってスルーされた。

「じゃあ、生きて帰りたいみなさんのご意見でも聞いてみようかー♡」

美乃梨は自分の耳にしていたイヤホンを、俺の耳に強引に嵌め込み————、

大量の言葉がイヤホンを通して一気に耳に放り込まれ、思わず耳から外した。

（頭が痛い）

自分勝手な言葉が、怨嗟になって脳を刺すように知覚される。

「みんな助けて欲しいって♡ゆーちゃん、ここが頑張りどころだよー？」

「————、俺が、俺が助けないといけない理由は、ないじゃないか————」

「じゃあいい？殺して。私も仕事だからさー、それで済むなら簡単で助かるなー♡」

美乃梨の冷たい視線、凍えるほど冷徹な眼。

助けると言われると反抗できるが、殺していいと聞かれば肯定できない。

ただの人間に、命の取捨が簡単にできる筈がないじゃないか。

「————やり、ます……」

そう言うしかない。美乃梨と会ってからずっと全てを強要され続けていた。

ここまでの流れは全て計画しての事なのだろう。

そして、美乃梨は人心も全て掌握している。

こんな非人道的な計画を立てる事ができるのは、まさしく彼女が悪魔だからだ。

何故、その悪魔に命を奪われる事になったのかは、最後まで分からなかった。

「そうこなくっちゃ、ゆーちゃん大好き♡」

（俺は、お前の事が心底憎いよ————）

「ラストバトルのルールは単純明快、私の本気のパイズリを十秒我慢すること♡」

（————十秒？）

「もう私のおっぱい飽きちゃっただろうけどー、やっぱり得意なプレイだし？」

刺激というのは、強いものを受けると弱いものの知覚が薄くなる。

さっきまで受け続けていたのは、本当に魂を天国に誘う最高級の技だった。

二人掛かりのパイズリは一人では不可能な触感を作り出していたし、勿論今までで最大の性感を浴びていたと思う。

視覚的にも慣れ、刺激も前より薄い、そして時間も短い。

これは、美乃梨が最大級のハンディキャップを与えた、という事だろうか。

「私さー、結局は絶対勝てる戦いって好きじゃないんだよねーっ。だからー、ゆーちゃんと本気で決着を着けたらいいって思ってるの」

「————嘘は、無いですね？」

「ガチンコ勝負に嘘はつきません！」

せっかくこちらに勝算のある戦いを仕掛けてきたんだ、受けるしかない。

「今度こそ、耐え切ってみせますから」

「ふふ、それでこそ私がライバルと認めた男！」

ふざけた口上を述べた美乃梨の手には、小さめの瓶が握られていた。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）

「じゃん、美乃梨印のサキュバスローション、媚薬成分たっぷり配合♡」
それを、胸の谷間の部分だけにしっかりと塗り込んでいく。

両胸を持つてぬちよぬちよと擦り合わせると、潤滑油が音を立てて泡立つ。
「持つところに塗っちゃったりすると、手が滑っちゃうから、これ豆ね」
いつでもおちやらけることを忘れない美乃梨、何事にも動じない鋼のメンタル。

「じゃあ、カウントいっきまーっす、じゅーっ」

人を墮落させる肉帛が、ゆっくりりと、ゆっくりりとペニスに降ろされた。

——ぶひるるるるるるるるるるるるるるるる

「あははははははは、まあ当たり前だけど我慢できるわけないよねー♡」
挿乳してすぐの大量射精は、男のプライドを破壊し尽くした。

「すっごい量、ゆーちゃん最後まで元氣だねー♡」

元より、俺は勝つ気なんてなかったのかも知れない。

ただ、あの快楽を与える為に作られた神乳に包まれたかっただけなのかも知れない。

「ゆーちゃん、もうゲーム終わっちゃったから、ここから『身体に質問タイム』ね♡」
負けたら『身体に聞く』、そんなルールがあった様な気がします。

しかし、もうどうでもいい、みんな死んだ、俺も多分死ぬだろう。

「その顔は覚えてないって顔だなー、いいもん、簡単には殺してあげないからさー♡」
美乃梨が一瞬だけ別人、いや、別の存在に見えた。

「エナジードレイン——、受けてみたいでしょ、受けてみたいよね、ねえ？♡」

血の気が引く様なおぞましい笑み。サキュバスの本性、獰猛な悪魔の殺意。

「淫紋顕現——」

そう言うと、美乃梨の豊満な乳房に複雑な紋様が浮かび上がる。

「じゃあおっぱいでー、君の生命力をいただきます、びびびびびびびびっ♡」

「ぐん——、はあっ——、ひいっ——、ひいっ——、やめえっ、てえっ——」

間抜けな効果音からは想像もできない、ペニスへの刺激と急激な体調の変化。

下腹部が熱くなって、小便を放出している時の様な寒気が全身を覆っている。

乳が呼吸をしているかの様に脈打ち、何かを吸い上げる度に模様が妖しく輝いた。

「あむあむあむ、おっぱいが君の生命力おしいっ——って言ってるよー、やったね♡」

「——っはっあっあっあっあ——、はあはあ——、っっひっひい——っっっ」

胸を巧みに動かして性的な刺激を続けながら、身体の熱をゆっくりと吸われている。

「びびびびびび、まだ弱ドレインなんだけど、そんなに苦しいー？気持ちいいよねー♡」

「ぐん——、はあっ——、ひいっ——、ひいっ——、やめえっ、てえっ——」

弱い刺激とは到底思えない恐ろしい吸精。

射精とは違う別の絶頂感が、頭をギリギリと締め付けて呼吸が早くなる。

サキュバスバスター

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）



「ゆーちゃん、鏡子に近づいちゃだめだよー、あの子は特別なんだからさー♡」
乳を擦り合わせ、動きに合わせて生命力を吸い上げてくる。

「――、俺は――、彼女は――、好きだった――、だけで――、っ――」

「好意を寄せるだけでも凄いい罪だよ。どれ位の罪かと言うとー、こうっ、こうっ――、
そしてっ、こんなッ、かんじッ、ほらッ、どんなッ、悪いッ、事かッ、わかったー？♡」

――ぱんっぱんっ、ぱんっ、パンッ、パンッ――、パンツパンツパンツ、

「ひっ――、あつあつ――、ひあつ――、あああつ――、ひいっ――あああ」

煌々と光る淫紋。乳肉がペニスを包みながら跳ねて、精液と生命力を絞る。

性感の向上と共にドレインの威力が上がり、全身の力が脱力していくのを感じた。

「ゆーちゃんっ、君明らかに生命力が異常だよ、何者？私に教えてごら――ンッ♡」

「あああああつあつあつあつあああああああああああつあつあつあつあ」

ローションで粘ついた爆乳が暴れ、ペニスを通じて身体中の熱と力を根こそぎ奪い、
全身に倦怠感と疲労感、筋肉の衰えを感じさせた。

「私の目にはッ――、君がッ――、怪しくッ――、てっ――、しょうがッ――、ないの

――ッ、死にたくッ――、ないッ――、でしょッ――、全部ッ――、言いなさいッ♡」

「ひぐっ――、何も――、知りません――、本当――ですからっ、やめてえっあああ」

美乃梨は全身に力を込めてエナジードレインを増幅し、俺の身体から全てを――、

吸い取る寸前で、美乃梨は身体の動きを止め、はーっ、と大きなため息を吐く美乃梨。

「やーめたっ、君の精神力に根負けー、降参降参」

淫紋が消え、美乃梨はお手上げのポーズをした。

（——勝った？）

「多分だけど、私じゃ君を殺せない——、どれだけ吸っても吸いきれない」

美乃梨が初めて、心底悔しそうな表情で口を歪めた。

自分でも、何故これだけの射精を繰り返せるのか違和感があった。体力が人よりあつたという記憶もない。

そして、エナジードレインを受けた筈なのに、疲労感はあるが身体はちゃんと動く。

（——、サキュバスの射精を、どうにかできたのか？）

「——っ、——はあっ、——、じゃあ——」

「うん、これから君以外の人間を全員殺します（笑）」

胃袋をぶん殴られた様な衝撃。吐き気が込み上げて、呼吸がままならない。

それは当たり前的事だった。

俺が射精を一度した時点で負けは決まっていたのだから。

「——ひっ、——、——やめっ、——ろっ」

必死に訴えるが、美乃梨の冷たい眼光は一切揺らぐ、にこりと笑った。

「しょうがないよね、そういう勝負だったんだからさー」

美乃梨の言うことは何も間違っていない。

それでも、人の命を簡単に消される事に抵抗が起きる。

それは普通の人間なら至極当たり前の事だと思った。

「じゃあ、みんな順番に映してくからー、ちゃんとカメラ意識してよー」

モニターに、最初に見たペアから順々に映し出された。

それぞれ、様々な体位で、性技で、次々に絞られて残りカスになっていく。

男達は喜びや、悲しみや、怒りや、楽しみを抱えながら死へと向かっていった。

それは、人間の脆さ、弱さを突きつけ、絶対的な敗北を味あわせた。

今日二度目になる、胃の内容物の逆流。慌てて手で塞ぐと、手のひらを掠って何とか

押し戻せたが、口内に不快な味と細かな胃の内容物が残った。

人間が命を全て吸い取られる凄惨な光景。

エナジードレインという、幸福な悪夢。

ただの性行為が、死に直結するだけでこうも残酷な風景になる。

（——俺が、俺のせい、で？）

目元から涙が流れ、何も知らない人間の死を悲しんでいた。

そんな感傷を吹き飛ばす様に美乃梨のスマホの着信音が鳴り響く。

「はいもしもし、あ、そつちも終わったー？ふむ、ふむふむふむ、なるほどねー了解じゃあ、そいつ殺していいよ、めちやくちや苦しめて吸い尽くしてあげてー、じゃね♡」

悪魔の様な死刑宣告を晴れやかな笑顔で口にする美乃梨。

さつきまで抱いていた恐怖心が、更に大きく強くなるのを感じる。

「ふーっ、今日のお仕事とりあえずひと段落ーっ、お酒飲みたくなってきたー、ねっ」
指でジョッキのジュエスチャーを作る美乃梨。

本当に、この女にはついていけない。

こんな状況でアルコールを少しでも口にすれば、たちまち吐き出す自信がある。

最後の一杯と言えば聞こえはいいが、そもそも憎むべき相手と誰が飲むか。

「あ、そうそう、柳龍之介が嘘をついてた事がわかったから、ゆーちゃんの無実が決まりましたーごめんねっ、とりあえず、私ルールで君は今ここで死ななくて済んだよ？」

あつけらかんと美乃梨は言った。

「——死ななくて済んだ？」

俺は生きれる？それじゃあ、今までやってきた事は？

銃のトリガーを握らされて、上から更に指を重ねて撃ち放ち、罪を着せる様な横暴。

「喜ぶなよー。少しでも長く生きていられるんだから、そうでしょ？」

「——喜ぶ？何を？この後、また命を賭けて何かをさせられるんだろ？」

悪魔のおもちゃとして命を拾っても、どうせまた次の賭け金にされるだけだ。

「後、最終通告だけどさー。鏡子に関わるのはやめておいた方がいいよー、これは本当にゆーちゃんの為を思っているんだから、ねっ——あ、少し死んだフリしてて」

美乃梨の身体に付着した液体が、全て彼女の皮膚に吸い込まれていく。

脱ぎ放った服を着直し、髪型を窓ガラスで整えた美乃梨は笑顔でそう言った。

「はい、みんな撤収だよーっ。死体は処理班が後で来るから置いてー、運転手は催眠が掛けているから、静かに出ていくよーにっ」

「はいっ」

キャッキヤとはしゃぐ、女優の皮を被った悪魔達の声が聞こえる。

「もー、静かにしてって言ったのにさー、まあ簡単には起きないんだけどーっ」

「みのりん先輩、またホテルでー」

「イッチー、今日はMVPだったよー、お疲れーちゅっ」

「せせせせせせせせせせ、先輩、先輩、あああやっぱり好きだー♡」

「美乃梨さんのデスクゲームマジで面白かったー、また企画よろよろー」

「オッケー、楽しみにしといてー」

出て行く女優達一人一人と挨拶を交わしていく美乃梨、相当顔が広いのだろう。
最後の一人がバスを降りたらしく、美乃梨は俺の肩を叩いて立ち上がった。

「ああそうだ。君が守ろうとした人達ねー、強姦とか殺人とかで死刑が決まった極悪人ばかりだから、あんまり気にしない様につ、これマジね、ってことでじゃねー☆」

目を開き、告げられた言葉の意味を脳が理解したのだが、理性がそれを拒否する。

拒絶しても、確かにそんな風貌の人間や悪態をついていた人間は確かにいた。

勝手に脳がその言葉を解析して整合性があると認めてしまう。

「――、守る価値が無い物の為に、俺は何をしていたんだ――」

殺されるべき人間の為に涙まで流してしまった。

素性を知らなかった方が良かった、その方が自分の行動に意味を感じれたのに。

「――いや、そうじゃない、善良な人がこの中にいなかった事に、感謝すべきか」
頭がゆっくりと冷静になっていく。

人の死が悲しいのは、それが誰だったとしても、自分がまだ正気だという証明になる。

まだ心は壊れてはいない。希望が何も無くなっても、まだ自分にできる事がある筈だ。

(そうと決まれば、まずは支度をしないと)

あらゆる体液で汚れた下半身を、買っておいたミネラルウォーターで洗い流す。

備え付けのお絞りで残りを拭き取り、脱ぎ捨てられたパンツとズボンに足を通した。

後ろの座席を見渡すと、まさに死屍累々という言葉の通りだ。

色んな体液が混ざり合って、嗅いだ事ない異臭が漂っている。

サキュバスの体液が危険なのは間違いない、鼻と口を塞いで周囲を探る。

(もしかしたら、生きている人間だっているかも知れないじゃないか――)

「おい、着いたぞ、目的地だぞ、おいっ！」

後ろの座席にいる、頬が瘦けた男に呼びかけるが返事はない。

「着いたぞッ――、起きないと、起きてくれよ、頼むからっ！」

その反対側の席、口から泡を吹いている男に声をかけるが気づいてくれない。

「誰か、生きている奴がいたら、返事してくれ、誰かつ、誰かあああああ」

死ぬべき人間だとしても、生き残った人間がどこかにいて欲しいと願っていた。

またしても、目から大量の涙が溢れ出す。

「ふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな、ふざけんなあああああああああ」

両手を全力で振り下ろし、バスの座席に何度も叩きつける。

ぶつけようのない感情が、心の中でぐちゃぐちゃに混ざって零れ落ちた。

「――鏡子さん、会いたい……」

多種の絵の具が載ったパレットを掻き混ぜる様に、どんどん世界が暗くなっていく。

それでも、その人だけは、『杏奈鏡子』の姿だけは、心はどうにか奮い立たせてくれた。

「行かないと」

途方も無い絶望に包まれても、俺はそう呟いた。

エピソード

バスを降りると、ようやく新鮮な空気を吸い込む事ができた。

しかし、死体を見た後では素晴らしい景色を見ても何の感慨も浮かばない。

（どうして、こんな事に……）

あれだけの人間が息絶えているのを見るのは、できればこれが最後にして欲しい。

ホテルの中に行けば人がいる筈だ、とりあえずこの事件を誰かに伝えないと。

ただ、事は慎重を要するだろう。

バスの中で大量の人間が不審死をしていて、その中から偶然一人だけ生き残った自分は、もしかすると容疑者になってしまう可能性がある。

（馬鹿正直に言うより、誰かが発見するのを待つ方がいいんじゃないか……）

ふと、美乃梨の言葉が記憶から蘇った。

『処理班が後で来る』と言っていた気がする、とすると此処にいるのは非常に危険だ。

ここから今すぐ逃げるべきだ——、逃げる？

（いや、駄目だ……、田中の安否を確認しないとイケない）

もし、他の人間がある程度生かされているのなら——、田中は何も知らずにまだ撮影を続けるつもりだろう。全員、殺される事を知る術は無いのだから。

（どうにか危険を知らせて、ここから脱出しないと——）

「おい、貴様が出てきたのは、そのバスか？」

急に後ろから声を掛けられ、心臓が止まりそうな位の衝撃が身体に走った。

余りにも驚いたせいで、全身から汗が滲み出るのを感じる。

振り向くと、スーツ姿をした黒髪ロングの女が指を指して俺を睨んでいる。『そのバス』とは俺が乗っていたバスの事だ——、こいつは間違いなく関係者だろう。

ホテルの従業員の様にも見えるが、だとしたら高圧的な口調をする訳がない。

焦りを感じさせる様な早足で歩いて来る女は、小脇に抱えたバインダーをペラペラと捲りながら何かを確認している様だ。

「貴様の名前を言え」

徹底的な上からの口調、どうしてそんな劣悪な待遇をホテルの玄関で受けないとイケないのだろうか。そもそもお前の方が誰だと問いたい。

（——ここは、関係のない風を装うしかない）

俺が捕まってしまったら、田中や他の人間の命運も尽きてしまうのだから。

「見知らぬ人に、簡単に名前は教えられませんよ」

そう言うと、女は広角を上げて笑った。

「そうか、まあどの道死ぬのだからどちらでも関係ないな」

「——死ぬ？」

やはりこいつの中身も悪魔——、だとしたら一刻も早く逃げなければ。

「何を言っているのかわかりませんが、人違いでは？」

（少しでも視線を逸らしたら逃げる——、よし、名簿を見た今だ）

身体を反転させ、両足に力を込めて全力で走ろうと——、あれ——

「悪いが、貴様はもう逃げ出す事はできません」

足が、重りを付けられたかの様に動かない。

「逃亡は、自分がやましい事をしている証明になると思わんか、この阿保が」

「——っ」

何か反論をしようとしたが、呼吸はできないのに言葉が出てこない。

ゆっくりと近づいてくる女は携帯を取り出して耳に当てた。

「たった今、第二バスから生存者が降りてくるのが確認された——そうだ、全員処刑されている筈だったのだが、偶然生き残りを見つけた、ああ、移送用に人手を頼む」

今しがた拾ったばかりの命が、非常に危機的な状況に立たされている。

「少し待て、ここで貴様を殺すことは無いから安心しろ」

何を安心しろと言うんだ。人目に付かない場所に行けば何をされるか分からない。

しばらくすると、二人の美女が駆け足で現れた。一人は、痩身モデル体型、もう一人は少しむっちりとした豊満ボディ。どこかで見た事ある顔だが思い出せない。

（会う人間（悪魔）全てA V女優なせいで、誰に対しても既視感があるな）

「来たか、この男を私の部屋に運べ」

「了解しました。ったく誰だ、こんな危険な真似をしたやつは……」

「はい、暴れちゃダメだよー」

二人に胸を押し付ける様にして両腕を絡められる。傍目では美女を侍らせている様に見えるだろうが、実際の所は処刑台に運ぶ死刑執行人の補佐二人だ。

（これが普通のA Vだったら、楽しめていたのだろうか……）

二人に引つ張られると足は自然と動き出し、ホテル内に入りエレベーターに乗った。

「ねえ君、あのバスに乗ってたんだよねー、どうして生きてるのかなー。不死身？」

腕を拘束しながら、二人は唐突に下半身に触れてきた。

先程まで散々精液を撒き散らしておきながら、未だに刺激を受けて反応している。

「どうせ助からない命だ。誰がお前を生かしておいたのか話してくれれば、お前の好きな事をさせてやるぞ？」

エレベーターの数字を見ると、階数表示に何も映っていない。

「うふっ、このエレベーターちょっと壊しちゃったから、すっごくゆっくり登るの♡」
「だから、好きなだけ私達の身体を使って楽しめるといふ事だ、話す気になったか？」

淫魔というのはこうも常に発情しているのだろうか、こちらを見る眼が明らかに獲物を狙うそれになっている。

どうやって生き延びたのかと聞かれれば、自分の異常な生命力と美乃梨の気紛れが噛み合った結果だ。二人は仲間達の中から違反者を探し出そうとしているらしい。

あの女には見逃されたが微塵も感謝してないので、ここは素直に教えてしまおう。

（下手に嘘を吐いても、悪魔には簡単に通じないだろうし）

「美乃梨という人が『自分ルールで俺を殺さない』と言っていたと思います」

あつさりと自白すると、驚愕の表情で迎えられた。

「えー、私達の身体を味わってからじゃないの？むしろ先払いつて感じ？」

「お前、情報を餌に快楽を貪りたいとか、そういう発想は浮かばないのか……」

俺の言葉に呆果てる二人は、情報よりも身体を犯される事の方が本題だった様だ。

「それにしても美乃梨かー。また勝手な事してるけど、今回も絶対お咎めなすだよ」

「仕方がないだろう、あいつも鏡子と同じく損なう事ができない存在だ」

サキュバスの中でも、『階級や権力』という概念があるのは当たり前だと思うが、まさか『美乃梨』と『杏奈鏡子』が同格の存在だとは。

（——あれ？）

いや、それよりもどうして今まで『この事』に思い至らなかったのだろう。

美乃梨にサキュバスという存在を知覚させられて、それに確信を持った時に気付いてもおかしくなかったのに、ようやく『その事』が頭の中で形になった。

（杏奈鏡子もサキュバス——）

サキュバス数十人と同じ事務所に所属していて、その中で杏奈鏡子だけが人間というのは、凄まじい違和感がある。人間と悪魔が共存している訳がない。

だとすれば、彼女もサキュバスと断言してもいいだろう。

そもそも、サキュバスがAV女優をしているという事実についても、あまり考察していなかった気がする。

（——いや、その時はそんな事を考える余裕がなかったし、当たり前か）

まず、彼女達淫魔が、平然と交わっているAV男優達が存命の理由は何だろうか。

今回の様な使い捨ての男優ではなく、有名な男優達もSCV女優達と絡んでいる。

素人男優はモザイクが掛かるし、幾らその場で殺しても証拠すら残らないが、有名男優達が死んでしまったら、それは大きく騒がれる問題になるだろう。

そう、『杏奈鏡子』が男優の白眼を剥く演技で、炎上して路線変更をした時の様に。

（男優が白目、急な路線変更、杏奈鏡子はサキュバス——、もしかしてもしかして）

急に、頭の中で散らばっていたパズルのピースが一つ一つ嵌り始めていた。

そして、それは自分にとっての希望に繋がる筈だと、心が暖かく燃え始める。

「ねーねー、何か考え事してるみたいだけどー、私達は情報と引き換えに君に抱いて貰う予定だったんですけどー」

腕組みをしておっぱいを寄せる女。

「そうだな、じゃあお前が知りたい事を一つ教えてやる、それでどうだ……」
余りにも強引な提案に、自分が彼女達にとって極上の餌なのだと理解する。

「えっと、杏奈鏡子さんについてとか……」

「そ、それは無理だよー、っていうか詳しくないし、ねー」

「当たり前だ。彼女達について語る事は、私達にはできない」

淫魔達の中では語る事が禁忌とされていて、情報も秘匿されている。

悪魔の世界では、『王族』か何かに当たる存在、もしくは『上位に存在する一族』？
慌てぶりからも相当に危険な存在だとわかる、美乃梨の忠告はこの事か。

しかし、それは俺の仮説を強化してくれる貴重な情報となった。

「いいでしょ？ 私にも君の精液ちょうだいよー♡」

胸元を豪快に開き、白いブラジャーに包まれた大きな胸を見せて誘惑してくる。

「そうだぞ、折角の貴重な命なんだ、無くなってしまいう前に有効活用するんだよ♡」

ミニスカートをたくし上げて、いやらしい黒のランジェリーが披露される。

左右で展開されるハニートラップに心拍数が段々と上がってきた。

しかし、たった一人の人間に固執する理由が、何かある様な気がする。

普段から、人間を吸い殺す事が容易にできる悪魔が、これだけこだわる理由が。

「何でわざわざ俺を襲うんですか？ あなた達ほどの美女なら、誘えばどんな男でもついて来ると思ってますが」

そう言うと、彼女達は顔を見合わせて、

「あー、そこ気づいちゃった？」

「ふふっ、リップサービスも含めて、その事についてなら教えてやってもいいか」

ゆっくりと二人が耳元に口を寄せてくる。

「君さー、腕に付けてるっ——、んっ、リストバンドあるじゃん——じゅるっ、それは

君が私達に——じゅるるじゅるるじゅるるっ——、襲われてる理由なの——ちゅるっ♡」

情報を教えながら、両耳への愛撫を始める二人。

少しでも情報が欲しい今、ここは甘んじて受けるしかないだろう。

「そのリストバンドはな——えろえろれるる——、私達の力を解放してくれる——、ちゅぶちゅっぶ——、特別な——れえろおれえろれるる——、腕輪だと言う事だ」

「——んっ——、すいません——ちよっと、加減して——っ」

両側からの耳責めと同時に、シャツの上から左右の乳首を指で愛撫される。もう片方の手はジーンズの上から竿と玉を優しくマッサージしてきて、すぐに完全に勃起した。

あのリストバンドに、そんな力が込められていたなんて。

『解放』という単語、彼女たちサキュバスは何かで縛られている——、何に？

「だからね——、んちゅっ、じゅるるるっ、君みたいにそれを付けてる——、れえるおれえ、じゅるるるるっ、特別な人間は——、んう、私達にとつてご馳走なの♡」

「そうだぞ——、はあっはあっ、ちゅるるっちゅるるう、ただ殺してしまうのは——、はむはむはむはむう——、資源の無駄遣い、——あむあむ——、だと言う事だ♡」

「——、それじゃあ——、これを——、外せば………あっ」

二人の手がシャツの中にずりりと潜り込み、乳首を優しく摘んだり指の平で擦られる。ジーンズもいつの間にかファスナーが下されていて、手がパンツの中に潜り込み、一人は竿を指でゆくりと行き来し、一人は玉をくすぐる様に指先で愛撫してきた。

「ダメだよー、今すぐ気持ち良さそうな顔してるのに外しちゃだめー♡」

「そうだ、もっともっと、死ぬほどの快楽を味わって射精したいだろ♡」

手首から外そうとした瞬間、二人の手が乳首から離れて腕を拘束してきた。

ペニスを弄る二人の指が熱を帯びて、急に性感が増していくのを感じる。

「それを付けている人間だけは、私達が自発的に『エナジードレイン』をする事ができるのさ。ごめんねゅーちゃん、折角生かしてあげたのにそれ外さないと意味ないよね、つて、あらら、もしかしてお取り込み中だった？それとも途中乱入可能だったり？」

「「み、美乃梨さん!!」」

「よっすー、忘れ物取りに来たんだけど、ちよーっとタイミング悪かったかなー」

まさかの天敵の登場——、見られたらまずいのか慌てて手を引っ込める二人。

そもそも、密室になっていたエレベーターにどうやって入って来たのか、と思ったがこいつらは悪魔だ。もしかすると、漫画みたいに肉体を一時的に霊体の様な物に変える事ができるのかも知れない。

特別な力は幾つも見せつけられて来た、既に超常現象にも余り驚かなくなっている。

「二人とも何でやめちゃうのー？私別に二人がお手つきしてもチクったりしないよ？」

不思議そうな表情で首を傾げ、口の前でボタンを作りニッコリと笑う美乃梨。

「——こいつ、もしかして……」

「その代わりー、私がこの子を生き延びさせたって事、内緒にしててくれない？」

パンツ——、と両手を合わせて拝み倒す美乃梨。

成る程、そうやって自分のミスを揉み消す為に戻ってきたという訳か。

「「えっ、良いんですか!!」」

目を輝かせて喜ぶ二人を見て、美乃梨がうんうん、と頷く。

「——俺がバラしますよ、美乃梨さんの悪事」

ニヤツと悪どい笑みを浮かべ美乃梨に一泡吹かせようと試みた。

「ふふっ、ゆーちゃんさー、ちょっとは頭使えるかと思ってたけど、まーだ甘いね」
 こちらの表情を真似する様にほくそ笑む美乃梨。

「君の知り合い、ホテルで君の事をずっと探してるみたいだったから、もうすぐ来ますよって伝えておいたんだけど、心当たりあるかなー？」

（――田中ツ、まだ生きてるのか）

少しだけ、心配事が減って身体が軽くなる。

「すぐ顔に出るねー。分かり易くてそういう所好きだけどさー、分かってるよね♡」

嘲笑うかの様に頬をぶにぶにと突く美乃梨は、まるで全てを見通しているかの様だ。

その事を言ったら、『田中を殺す』と暗に伝えて来ている。

「って事で、二人とも好きなだけゆーちゃんと楽しんでやってねー、ばいばーい」

そう言うと、美乃梨の姿はゆっくりりと透過していき、背景に溶け込んだ。

「「キョーならー」」

左右の二人はペコペコと何度も頭を下げて、美乃梨の消失を見送る。

「ふーっ、一時はどうなるかと思っただけど、美乃梨さんは話がわかるなー」

「こういう手回しであいつに勝てる奴はいないな………、敵にしたくない」

汗を掻いたのか、二人はパタパタと手で仰ぎつつも、段々と距離を詰めてくる。

「どうやら、これから二人が本気で襲い掛かってくる様だ。」

「君さー、れろれるろ――、んちゅぶっ、絶対に勝てない人には――んちゅっ、逆らっちゃダメって――、んちゅば、ちゅパッ、お母さんに教えてもらわなかったのー？♡」

「そうだ――、はむはむ――、見ている私達の方が――はあむあむ――、ひやひやした

じゃないか――、ちゅっちゅっ、あむあむ、反抗的なのは嫌いじゃないがな♡」

身体を寄せて来た二人は、俺のシャツのボタンを一個一個外して完全にはだけさせ、

左右の乳首を二人で手分けして責め始めた。
 同時に違う愛撫をされると、そのギャップが飽きの来ない快感を与えてくる。

「君のおちんちん、んちゅぶっ、もうこんなに大きくなってよー、れろれるろっ、裏筋

擦ってるだけでーんちゅぶっちゅぶっ、先走りがいっぱい出て来ちゃってるっ♡」

「玉も――はむあむっ、ゆっくりだが上がってきて――んうむあむ、もう射精したくて

仕方ないのだろう――あむはむ、いいぞ、まずは一発私達の顔に出してみろっ♡」

ねちっこい乳首責めは、ペニスの感度を増幅し、絶頂する限界まで高まっていく。

「べえええええろっ――、んふっ、唾液いっぱいの手コキとー♡」

「れえええつえええろっ――、唾液たっぷりの玉揉みで♡」

「――ああつうっ、あなたたちは、何でこうも――、人間を――」

淫魔の体液が、ペニスの頭から竿、二つの玉をコーティングする様に流れ落ちる。

すると、単純な感触が過剰な刺激に変化して、理性を一気に溶かし尽くした。

「シコシコシコシコ♡シコシコシコ♡ほら柔らかい指にズボズボズボ♡口開いちゃってるよー？もっと先走り飛ばしてー♡私の顔まで飛ばしてーッ♡」

「ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ、ああ、ダメだ我慢できん——、あむあむあむあむ♡タマのこの臭い匂いが——はむはむ♡鼻を突くような臭いが、はあむはあむ♡」

ゆつくりとした手奉仕と唇で包むような玉舐めが、底上げされた性感によって、信じられない様な快楽を生み続ける。

もうペニスは射精のスタンバイを終えていた。

「あ、射ちやう？♡射しちやう？♡いいよ、私の口と、顔と、全部にぶっかけてー♡」

「いいふお♡その無様な顔であむあむ♡お前の命を♡ふあっふひ私達に♡注ぐんだ♡」

「——っあっあああああっああああああ」

——びゅるるるびゅるるるるるる、びゅくるるるるるる、びゅるびゅるびゅる

「ふあ、すっごい射る♡もっとなちゅっ、ひようはいひようはい♡ああ、喉に♡」

「お前、口で塞いだら私の分が、あああむっ、じゅるるるじゅるる、ふおへはひひ♡」

顔射と、口内発射では物足りなくなり、すぐに吐精中のペニスにしゃぶりついてくる

二人。変わる代わるペニスと玉舐めを交代し、尿道に残る全てを射し切るまで続いた。

そこから、二人は精液を口と口で交換しあい、ゆつくりと味わいながら飲み干す。

多少の脱力感が身体を満たした。

「ちゅぶっ、美味しかったあ………、でもー、これからが本番なんだよー♡」

「ごくっ——、全然満足してないから、覚悟しろよ？♡」

肌に着した精液を全て舐め取って、今度こそ本番が始まる様だ。

「もう、いいじゃないですか………」

性行為への抵抗、数時間レイプされ続けた結果、求められる事にうんざりする。

「ダメだよー、まだちゃんとエナジードレインしてないんだからー♡」

「そうだ、エナジードレインをするまではお前を解放しないからな♡」

飽きる事のない精への渴望、何が何でも俺を殺すまで吸い切るらしい。

「——、解放、してくれ……」

「だーめ♡ほらほらー、おっぱい見せてあげるから、頑張っておちんちん勃たせて♡」

ブラジャーを剥ぎ取って乳輪の大きな爆乳を曝け出す。

「もっと頑張れるよな？この脱ぎたての下着で抜いてやってもいいぞ♡」

パンティを脱ぎ去り、指であやとりをする様に秘部に当たる部分を見せつける。

腕を掴まれて掌に大きな胸を当てがわれ、ペニスに生温かい下着が巻き付いた。

もう一度最大限に勃起してしまえば、再び俺は二人に強姦されてしまう——、

——ギギギギギギギギ、

「——、お前達。大事な任務中に盛っているとは——発情した犬か何かか？」

大きな音を立ててエレベーターの扉が開いた。

黒髪ロングの女が顔を怒りに震わせて扉の向こうに立っている。

「——、どうやら、エナジードレインは受けずに済んだ——のか？」

俺の異常な生命力について、美乃梨以外に知られなくて良かった。

「ごくつ——あのー、えっとー、これはそのお……」

「んぐつ——魔が差したと言いますか、はい……」

心底怯えきった表情で、二人の淫魔は口の中に残してあった精液を嘔み下す。

「御託はいい。服を着せてとつと私の部屋に運べ」「はいただいま——ッ!!」

肌蹴た服をスルスルと着せられ、乱れた髪型を整え、口元もハンカチで拭われる。

今度は二人が指を恋人の様に絡めてきて、やはり逃げられない様に連れられた。

部屋の前に着くと、二人はそそくさと立ち去ろうとするが——、

「お前達、後で説教するからそのつもりでな」「お、お手柔らかにお願いしますっ」

二人が走り去り、ようやく室内にたどり着くと中には誰もいなかった。

後ろからゆっくりと長髪の女が入室し、部屋に二人きりになる。

「長旅で疲れただろうシャワーでも浴びてくるがいい——、その後で話をしよう」

いきなりの思いもよらない提案に緊張が一気に緩みかけるが、慌てて警戒心を最大限

に引き戻した。俺は殺される筈じゃ無かったのか？

（どういう事だろう——すぐに殺されると思っていたが、実際は違うのか？）

ここで断る事もできるが、抵抗する事に今はメリットを感じる事ができない。

もしかすると、この後また長髪の女に襲われるという可能性もある。

しかしシャワーを浴びていれば、もうしばらくは命を繋ぐことができるかも知れない。

「——わかりました、恩情感謝します」

着替えは持ってきていないが、身体は汗や色んな液体が乾いてひどく気持ちが悪い。

綺麗な服に着替える事は諦めて、とりあえず身体だけでも清潔にしようと思った。

衣服を全て脱衣籠に収納し高級感のある浴室に入る。

蛇口をひねり、温水が勢い良く噴き出して来た所に身体を傾けると、全身に蓄積した

疲労感が一気に流れ落ちていく様な、そんな爽快感と温かさによる安堵がもたらされる。

（——気持ちがいい、性的でも悪魔的なものでもない、ごく自然な開放感だ……）

ただひたすら湯を浴びているだけで、今の自分に起きている不遇が無かった事になっ

たかの様な、そんな幸福感と——、生の実感が得られた。

（——俺はまだ、生きている）

いつまでもシャワーだけ浴びている訳にもいかず、頭髪を洗い、全身を洗い、もう一

度シャワーを全身に浴びせて身体を温めた。

季節は夏だと言うのに、その水の暖かさが生命の温もりとなって心を癒している。

——コンコン、

浴室の扉がノックされて、磨りガラスの扉に女のシルエットが写る。

どうやら衣服は着ている様で、清めたばかりの身体を貪られるという事はなさそうだ。

「終わったか？」

「——はい」

「そうか、すまないが扉を開けさせて貰う」

「——？」

内鍵を閉めていなかったたので、容易に浴室の扉は開け放たれる。

「——え？」

全身を見られた事による羞恥心も少しだけ湧いたが、それよりも——別の要因が心を恐怖で縛り付け、温まった筈の身体が一気に震え始める。

女は手に日本刀を持ってこちらを見下ろしていた。

「——そのまま目を閉じて座っている、すぐに終わる……」

日本刀を鞘からスラリと抜き放ち、切っ先をゆっくりと俺の頭上に添える。

明らかに刀の心得がある達人の如き捌き方に、心臓が握られる様な圧迫感を感じた。

——それは、切腹をした後で、その痛みを断ち切る為に行う『介錯』の様だ。

（ああ——、浴室に向かわせたのは血が室内に残らない様に、という事か）

もっと警戒すべきだったのか——、いや、結局は別の痕迹が残らない方法で殺さ

れていただろう。だとしたら、最後に身体を洗い流せたのは不幸中の幸いだろうか。

「ちよつと待ってください、俺は何も悪い事は……、本当に何も……」

裸で命乞いとは何とも見窄らしい光景なのだろうか。

それでも、ただで殺される訳にはいかない、可能な限り生き延びる責務がある。

（——ここにいる人達を、少しでも救う為に動かないといけないんだ……）

「貴様は淫魔という存在を知ったのだろう？ならば生き長らえる事は不可能だよ。もしここから逃げおおせても、魔族からも、そして人間からも追われる立場になるだろう」

女は目を閉じて精神を集中している。もし逃げようものなら、その瞬間に斬り伏せる事ができると、何も言わず、その堂に入った構えが語っていた。

「——そんな、ここに来る前はそんな事全く知らなかった。それに、淫魔という存

在を教えて来たのはあなた達で、それを知ったから殺すなんて、横暴じゃ——」

「あまり騒ぐな。殺し損ねると余計な苦痛を感じる事になるぞ？」

刃先が首筋を軽く撫でられてチクリと痛みが走る。余りの恐怖に口が凍りついた。

「貴様の事は調べさせてもらった」

俺の素性なんて特に大した事はないだろうに、何を調べたと言うのだろう。

（——美乃梨と同様、鏡子さんの飲み会現場で待ち伏せしていた件？）

「覚えていないだろうがな、貴様は既に淫魔と遭遇している。それも二度、二度だ」
 全く身に覚えのない話をされて、目の前の女が嘘を吐いている様にしか思えない。

いや、杏奈鏡子が淫魔だとすれば確かに二回会ってはいるが、それだけで殺されるならもっと多くの人間が死んでいる筈だ。という事は――、

（俺は、サキュバスの姿をした鏡子さんを、二度も目撃したというのか？）

――ビリッと脳が痛みを生じて、勝手に何かを思い出そうとしている。

何を？そんな事は決まっている、サキュバスとの遭遇を思い出そうとしているんだ。

「頭が痛むか。それだから貴様は死ななければならぬんだ、確実にな」

少し悲しげな、そして苦しそうな声で長髪の女は言った。

俺は二度も淫魔を目撃していて、それを忘れていた。いや、忘れさせられた。

その記憶を、奴らに意図的に消されていた――、そういう事か。

「淫魔と二度遭遇した者は必ず殺す事、これは人間に定められた『法』だ。残念ながら、我々は法に縛られている側という事になる。貴様に私怨は無いが、すまない――」

（――何だって？）

驚くべき事実が女の口から次々と語られる。

多分、俺を生きて帰す事はないと決めているからこそ教えてしまった。

自分の命が危機に晒されているのにも関わらず、思考がパズルを組み上げていく。

淫魔が人間を脅かす存在として隠れ潜んでいた訳ではなく、人間が淫魔の存在を匿い、

それが一般人には知られない様な仕組みを作った――何のために？

（――人間が、淫魔を利用している？何に――）

「できるなら、私の身体で安楽死させてやりたい所だが、時間がない」

確かに、その鍛え抜かれた身体で絞られれば、男はひとたまりもないだろう。

「貴様の命は私の記憶の中で永遠に生き続けるだろう、では――」

ゆっくりと刀が振り上げられ、浴室灯の淡い光が刀身を美しく染め上げる。

「然らばだッ――！」

（――、死んだのか――、田中――、父さん母さん――、すいません――）

俺は振り下ろされる刃を待つ間、その走馬灯の中で一つの希望を導き出した。

彼女がAV業界から引退しようとしていた意味を解きほぐす。

杏奈鏡子は、『人間との共存』を願っているのではないだろうか。

できる事なら、その願いを叶える為の彼女の力になりたかった。

しかし、そんな淡い願いが確実に消え去るのを感じ――、それでも、よく聞いて

いた愛らしい声が耳に届いた。落とされた筈の首が、ゆっくりと向きを変える。

「――私は納得できません」

杏奈鏡子、俺の想い人がそこに立っていた。

幕間「とある人間」

時間は少し遡る。

昼食をファストフードで済ませた柳龍之介は、夏場に相応しいTシャツ半ズボンというラフな姿で駅前のターミナルにいた。

「おっせー、まじでおっせー」

待ち合わせ時刻を過ぎてても迎えが現れない事に腹を立て、スマホを弄り始める。

しかし、その怒りを堪忍袋に貯め込まずにいられるのは、『おたのしみ』が柳を待っているからだろう。

鼻歌を交えSNSに興じていると、ターミナルに一台の白いワゴン車が到着した。

「柳龍之介様ですね、どうぞこちらに」

スーツ姿の女性が扉を開く。胸元がガバツと開いているせいで、漫画でよく見る様な社長秘書を彷彿とさせる巨乳美女が現れた。

「何だよこのボロい車、俺は高級車でのお迎えを希望した筈だが？」

明らかに不機嫌な表情で柳は地面に唾を吐く。

「申し訳ございません。その件ですが、柳様を『おもてなし』させて頂く為には手狭だという事で、こちらの独断で変更させて頂きました」

女性が謝罪すると、溢れた乳肉がたつぷりと柳の視界に飛び込んで来る。

「はっ——、おもてなしねえ……、俺はてつきり誘拐でもされるのかと思っただぞ」

いきなり相手の懐に入る事の危険性を、柳は当たり前のように理解している。それは、今までの人生経験や勘に寄るものだが、敢えて乗り込むのも『柳』という人間だった。

「お前、どっかで見たことある顔だな——成程接待か、悪くねえじゃねーか」

整い過ぎた美顔に、スーツから零れ落ちそうな美巨乳。男を籠絡するのに特化した肉体に柳は舌舐めずりをする。だが、ニヤケ顔になって簡単に落とされる気は無かった。

明らかなハニートラップに対して、デメリットを考慮する事を一切排除している。

「——おっと、二対一ならさすがに不利か？」

「こんにちはー、龍之介様あー」

ワゴン車に乗り込むと、何の為の準備か既に座席が変形されて、人が三人川の字で寝れるスペース（フルフラット）が作られている。

更にそこには、既にうつ伏せになったキャミソール姿の女性が乗り込んでいた。

「馴れ馴れしいなてめえ、つてお前、『七重藍澄』じゃなか！」「そだよー、いえーい」

急にテンションが上がる柳を見て、嬉しそうに足をバタつかせ無邪気に笑う藍澄。

「つて事はお前、『白沢千恵子』かよ、えつ、『甘宮莓』もいる感じ？たまんねえなあ」
呼ばれ、にっこりと笑う千恵子。

サキュバスバスツアー

～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）

「申し訳ありませんが、苺は別の仕事がありまして――、ですが同じ目的地に向かっていきますので、現地に着けば会えるかと思われませう」

「B S S 全員集合ー♪」「テンションアがるなー♪」

柳と藍澄は波長が合うのか同等の勢いで喜びを表現した。

「運転手、出してください」

ワゴン車が目的地に向かって出発した。

「それにしても、ここまでのVIP待遇を受けられる身分じゃないんだがなー」

いつの間にか柳は、千恵子の膝枕の上に頭を置き足を伸ばしてくつろいでいた。

藍澄はというと、柳の顔と向かい合う形で横向きに寝転がっている。

「龍之介様あー、藍澄が添い寝してあげてるのに不満ありですかあー？」

「不満はない、疑問はある」

顎に手を当てて何かを考えている柳。

「龍之介様が、私達との移動になった事について説明が必要でしょうか」

「あー、別に聞いても仕方ねーけど、どうせ暇だし言ってみー」

目の前に超絶美少女がキャミソール姿で横たわっているのにも関わらず、柳は一切興味を示さずスマホを弄っていた。

「鏡子様の入院した病院を探し当てた事が理由です、心当たりはありますか？」

少しだけ身体がピクッと反応したが、それでも表情が何一つ変わらない柳。

「あー、お見舞い企画なー。あの日の記憶が全くねーし、病院にいたと思ったら何故か気が付いたら家にいたんだよなー。マジで意味不明、お前達何か心当たりないかー？」

質問に質問で返され、少し困惑した表情の千恵子。

「龍之介様あー、お見舞いを企画するなんて優しいんだー」

「その質問――、もしかして、お前達それに関わってねーだろうなー？」

「龍之介様、お話を戻してもよろしいでしょうか……」

少し焦った様な表情になった千恵子は、慌てて笑顔を取り繕った。

そして、話が飛んでうやむやになった議題をどうにか戻そうとする。

「あん？別に隠してるわけじゃねーぞー、俺は金を払っただけだ。他は何も知らん」

「そ、そうでしたか……」

本当に何も知らない様子の柳に、二人は戸惑いを隠す為に笑顔で向かい合う。

「どっちかって言うとなー、そういう情報が大金で買えちゃうのがわりーよ、な？」

「そだねー、藍澄達も狙われない様に気をつけないとだねー、キャハハ」「ギヤハハ」
「やらけらと笑う二人を余所に、千恵子は次の質問を吟味している様だった。

「ちゃんと応答してくれるかも分からない相手に、何を尋ねようか、と。」

「唯野優司、という人物に心当たりはありますか？」

今までの会話の中で一番大きな身体の揺れ。

「ハハ、誰からその名前を聞いたんだよ。マニアじゃないと知らない珍獣の筈だが」
見た目は変わらず飄々としているが、言葉に含まれる敵意が今までの比ではない。

「やはりご存知でしたか、一体その人物は何者なのでしょうか」

「俺も名前位しか知らねーなあ、興味ねーし」

すると、携帯の着信音がたましく鳴り始めた。

「おいおい、接待中に着信鳴らすとはサービスがなあってねーな」

「申し訳ございません——、少し失礼します」

慌てて携帯を操作し始める千恵子を、冷めた目で睨みつける柳。

「千恵子です、はい、はい、収穫はありませんでした——、成る程、はい、はい」

淡々と受け答えるのを、柳は会話内容を想像しているかの様に見ていた。

そして、何かを思い付いたのかニヤリと笑う。悪巧みをする子供の様な無邪気な笑顔で、柳はまだかまだかとタイミングを見計らっている。

「先輩、それでは——」「絶対に詳しい事は言うんじゃねえぞ！」

通話を切る瞬間に、柳はその言葉を大声で会話に無理矢理振じ込んだ。

急に柳が吠えた事で二人は身体を飛び跳ねさせる。

余りの音量に、通話の相手にも、その周辺にも声が届いたかも知れない。

「あの、龍之介様。今のはどういった趣旨の……、詳しい事——とは？」

通話終了の画面を見つめる千恵子は、柳の突飛な行動に目を丸くしていた。

「いやー、何か受話器の向こう側に奴がいる様な気がしてなあ、違うか？」

「——、それは、その、お答えできかねます」

はぐらかす千恵子に、どうせ凶星だろうと口を曲げる柳。勿論、その予測は当たっているのだが、柳はその正否には興味を抱いていなかった。

「まあいいや、今のは適当に言ったただだから変な勘繰り入れんなよ？」

堂々と言い放つ柳。

「龍之介様って、もしかして物すごい面白い人？」

目を輝かせて、天然記念物でも見つけたかの様に興奮する藍澄。

「そうだぞー、俺より面白い事する奴はなかなかいないぞー、藍澄ちゃんお眼が高い」
きやつきやと燥ぐ二人を見て何かを思案する千恵子。

柳に嘘を吐いた気配がない。

その意味深な言動が、千恵子に混乱をもたらしていた。

「にしても、接待が待ってるのかと思いきや取り調べとはねー、困った困った」

「申し訳ございません、私共は少々身の回りの危険に敏感でして……」

千恵子は美乃梨に言われ、杏奈鏡子の周辺を嗅ぎまわる輩を探していた。

「確かに、入院先が情報屋に出回っちゃう様じゃ、心配にもなるだろうなー」

「情報屋ですか——」

「さっきも言ったろ？金で居場所を買ったんだよ、もうそいつとは接点ねーけどなー」
情報の売買が危険と理解し、複数回の付き合いはしないという主義なんだろう。

「そうですか、情報感謝します」

美乃梨の中で危険人物とされている『柳』は、実行犯ではあるがその奥にいる主犯ではない。その話題を持ち出しているのか、千恵子は迷っていた。

まだ隠している情報があるのでは？と考えた結果、千恵子は次の段階に進む。

「龍之介様、大変失礼致しました。私達の身体を目的地までの間ご堪能下さい」

「龍之介様、私達とイイコトしましょー♡」

急にムードを作り始めた女達に首を傾げながらも、柳の目は好奇に歪んだ。

「なんだなんだー、ようやくお楽しみの時間かよー、待ちくたびれたぜー」

スーツから伸びるタイツ越しのすべすべした太ももを頭で堪能しながら、柳は藍澄の幼児体型をキャミソール越しに撫で回した。

「——んっ、そこ、気持ちいい、けど——、そこばかり触らないのー」

藍澄の未発達な微乳の先端を、ノーブラなのをいい事に指で布上から愛撫する。

「いやー、胸のちっちゃい子の乳首弄るの最高だなー、ちっちゃいなー、あはは」

「ちっちゃいちっちゃい言うのやめてよー、藍澄気にしてるんだけどー」

暇潰しに丁度いいのか、柳はやましい感情よりも苛めっ子根性丸出しで弄り続けた。

「はは、すまん、ちびっ子」

「千恵子ちゃん、この人苛めっ子だよー」

「ふふっ、楽しそうですね、私も混ぜて頂けますか？」

車の振動に合わせて揺れていた乳肉を、ブラジャーごとスーツから零れ落とした。

「おー、絶景だなーこりゃ。でも俺はこっちの小さな山を登る方が楽しいやー」

そう言っつて、誰もがむしゃぶりつきたくなる、たわわに実った果実を放置する柳。

自信満々で乳を放り出したのにも関わらず、それを意にも介されなかった事は、千恵子にとって大きくプライドを傷つけられる結果となった。

「——っ、柳様、お情けを……」

悔しさに塗れた表情の千恵子は、その感情をどうにか押さえ込み言葉を振り絞る。

「あー？必死だなー、物乞いでももつと上手にオネダリできるぜー？」

そんな渾身の仕草も柳の心には全く刺さる事はなく、反撃までされる始末。

最後に、藍澄の乳首をデコピンして柳は上半身を起こした。

「俺さー、与えられるのって死ぬほど嫌いなんだよな、反吐がでる。逆に無理矢理だとか、奪ったりだとか、そういう方が好きなんだよ——、こうやってッ」

そう言った瞬間、柳はズボンのポケットに隠し持っていた手錠を使って、藍澄の両腕を瞬間的に縛り付けた。

「あー、ちえこ君ちえこ君、俺は乱暴はしたくない。なので抵抗しないでくれ」

「藍澄！あなた一体な——、に——、を？」

「バチーン、と車内に大きな音が鳴り響いた。

「ほらもー注意したのにー。ありがとう抵抗してくれて、女を殴る口実ができた！」

猫騙しを受けたかのように放心状態になった千恵子は、なす術なく手錠を嵌められる。

腕を封じ、二人の身体を座席に倒した柳は、その二人の右足と左足を手錠で繋いだ。

「なんつーか、俺に罫を仕掛けるのはやめた方がいいって事、オーケー？」

手慣れ過ぎた動作、二人の女を行動不能にするのに大した労力は必要なかった。

「離してよ——、この手錠外しなさいよッ！」

藍澄が手足をバタつかせて抗議するが柳は気にも留めない。

ズボンからナイフを取り出し、刃を軽く当てて千恵子のタイツを引き裂いていく。

「うんてんしゅさーん？下手な事するとこの二人傷物にしちゃうから、間違っても今手に持つてる携帯電話で連絡しないようにねー、わかったー？」

必死に頭を振って肯定する運転手を見て、柳はニツと笑った。

「いやー、俺って天才だからさー、身の危険とか何となくわかっちゃやうわけ」

タイツが、魚の皮の様に剥けて生足が曝け出された。その艶のある肌の一つの傷も付いていないのは、柳がナイフの使い方を相当に極めているという事の証明だろう。

続けて反対の足も同様に処理し、切られたタイツの生地を左右で固く結び付ける。

「ちびっ子は弱そうだから腕だけでいいやー」——「こいつぶざけてる……」

藍澄が敵意むき出しの目で柳を睨みつける。

「ぶざけてるのはお前らだろう？女二人で男をどうしようつてのが甘過ぎる。俺をどうにかしたいなら、もっと真剣に取り組むべきだったとは思わないのかい？」

ナイフを指先に立てて遊ぶ柳は、けらけらと笑いながら千恵子の頭に足を乗せた。

「——っ、その身のこなしは、確かに予想外でしたね……」

「お褒め頂き感謝の極みでございます、お嬢様方」

様付けで呼ばれていた事をあてつける様に、二人の執事のように振る舞う柳。

「それでは千恵子お嬢様、本日のご予定はいかが致しましょうか？」

「……私の事は好きにしているので藍澄には何もしないで下さい」

「お姉ちゃん——」「バカっ——」

思わぬ言葉が聞こえて柳は唇を尖らせた。

「成る程ねー、二人いや三人？は姉妹だった訳かー、でも顔似てねーなー連れ子か？」

ニヤニヤと目を綻ばせる柳を見て、千恵子は口元を苦く歪めた。

「まあいいや。で何て言ったっけか、えーっとえーっと、うーんうーん、思い出した、私の事は放っておいて、妹を死にたくなるほどレイプしてあげて下さい、だな！」

「——ひっ、やだ——やだっ」

「ふざけないで、私を——、ッ——げほっげほおげほっ」

うつ伏せになっている千恵子の背中に、柳は思い切り踵を振り下ろした。

「お前さー、静かにしてくれねーか。何度も邪魔されるのが本当に嫌いなんだ」
骨を痛めたのではと心配そうな視線を送る藍澄。

「よーし、お姉ちゃんがちゃんと歩いてお家に帰れる為に、何でもできるよなー藍澄ちゃん、妹だもんなー」

手招きをする柳は踵でグリグリと千恵子の背骨を踏み、痛みに喘ぐ声を聞いてペニスを大きく勃起させた。

「しゃぶれ、お前得意だろ？姉妹揃って女優やっただから、それ位はできねーとな」
自分でズボンを脱ぐ事はせず、下腹部に顔を寄せた藍澄に準備させようとする柳。

手慣れてはいるが、動揺しているせいか上手くファスナーを下ろせない藍澄。その慌てぶりを見て、自分がどれだけ畏怖されているかを感じ取り、更に勃起させる。

「慌てるな慌てるな、ゆっくりでいいぞー、その代わり俺が目的地に着くまでに逝けなかつたら、そうだなー、お姉ちゃんの頭だけ窓から捨てるからなー」

一層不安を煽られた藍澄は、全力疾走したばかりの様に息を激しく切らせながら、何とかズボンを下ろす事に成功した。

「——、おしゃぶり——、させて——、頂きます……」
パンツをずり下ろして、バキバキに硬くなったペニスを見て息を呑んだ。

「なんだよー、さつきはおしゃぶり大好き淫乱少女って感じの演技だったのにさー、急に父親に性的虐待を受けた娘みたいなプランに変えちゃって、前の方が良かったなー」
全ての物事が安直に片付けられるのを嫌う節でもあるのか、演技指導に入る柳。

「ご、ご主人様のおちんちん、おしゃぶりさせて頂きます——あむう♡」
「それそれーっ、アダルトビデオって感じのやっすい演技、そのB級感最高ー！」

何かに不満を持つ度に指摘し、指示通りにこなされると抜き下ろす。
それが『柳の美学』とでも示す様に、終始そのスタイルを貫いていた。

「——んっ、んっ——、ちゅぶちゅぶ——、んっ——、ちゅばっ、どうですかあ、きもふい、ふいふいふえふふあ？」

「お前何言ってるか全然わかんねー、日本語ちゃんと喋れよ、なあ」

「——んごふう——、はあっ——、ふっ——、ごぶあっ——、ぐう——、んぶあっ——、んんぐう——、はあ——、んぐっ——、やえてえ……」

柳は藍澄の頭を性玩具の様に両手で持ち、長い間ペニスを口内に押し込み、少しだけ空気を吸わせ、またじつくりと差し込んだ。

「おいおいおいおい、もつとしっかりしゃぶってくれよー、萎えてきたぞー」
萎えている様子は無く、むしろその太さに藍澄は苦しんでいる様に見える。

「——じゅび、——んぷっ——、ばぜ——、——んぶっ、ひゃんと——、ひはふ……」
息継ぎの練習をさせるかの様に、何度もイラマチオを繰り返す柳。

苦しんだ表情ながらも、舌を必死に動かしてペニスに奉仕を続ける藍澄。

「しつかし、こんな事しても全く興奮できねえなあ——、ん、名案が浮かんだぞ」
そう言うと、柳は千恵子の髪を持って自分の足元に動かし、無理やり仰向けにした。

「健気な妹ちゃんに大チャンスをやろう。これからお前は一度もコイツから口を離さずに俺を逝かせてみる、そうしたら二人とも無事にお家に返してやる」

ようやくペニスを口から引き抜かれた藍澄は、餌付きながらその話を聞いていた。

「しかしだ、もし射精させる前に口を離れたら、その時はお姉ちゃんに辛い罰ゲーム。目にナイフを刺してもう一回チャレンジ、何と二回もチャンスがある、優しい！」
嬉々として語る柳に二人の表情は絶望に包まれ、何も言葉を発せなくなっていた。

「楽しいゲームだったのにノリがわりいなあ……、テンションあげるよ——なッ」
柳は逆手に持ったナイフを勢い良く振り下ろし、千恵子の眼球と触れるギリギリの所でピタリと止めた。その奇跡的な芸当に大きく目を見開く二人。

「はい、もう一度」

「や、やったー、ゲームだー、楽しむぞー、いええええええええい」
歪な笑みではしゃぐ藍澄、余りの恐怖に怯えたのか千恵子は涙を流して拍手をした。

「さあ、最後の呼吸になるかも知れないからなー、腹いっぱい吸えよー」
怯えた表情でゆつくりと呼吸をする藍澄と、それを見てにやにやと笑う柳。

「藍澄、おちんちんいただきまーす、んちゅっ——えろう、んちゅっちゅばっ、じゅるるるるるるう、じゅっぶじゅっぶ、ちゅるるるう、んっぶ——、んうッ——!!」

再開した藍澄の頭を手で固定して、腰を突き上げる柳。容赦なく口を蹂躪する柳は、藍澄を顔型のオナホルの様に、自分の感じる挿入法を色々と試し始めた。

「——っ、ようやく良くなって来やがったが、もつと中に襲とか付けとけよなー、気持ち良くなる為の工夫をしてみせろってんだ、なあ、なあッ、なあああ!!」

「んぶっ——、づっ——、おぶッ——、っむう、っむううう、っづううう……」
「鼻からまだ吸えるだろー？何甘えてんだよ、姉ちゃん死ぬぞ？お？おう？」

必死で鼻呼吸を繰り返す藍澄を見て、口元がだらし無く蕩ける柳。心底、今の状況とSMプレイを超えた蛮行を楽しんでいる。

それを平然と行う柳の脳は、多分普通の人間の精神構造とは違うのだろう。

「——ぐうぐうぐうぐう……、むぐうぐうぐうぐうぐう……」

どんだん口内で膨張する柳のペニスは呼吸不可能なくらいに喉を塞ぎ、藍澄は呼吸困難に陥って嘔吐しているが、その声を聞いて余計にテンションが上がる柳。

「——ぐうううううつ、ぐおおううううう——、むぐううううううう……」

口の端から泡が溢れ始め、どろつとした唾液が大量に流れ落ちる。

「お姉ちゃんさー、黙って見てないで応援してあげたらどう？ そうだなー、掛け声は

『頑張れ、頑張れ』とかどうよ、いいねっ、決定——、じゃあスタート！」

「——頑張、れ、頑張れ……」

恐怖のせいか言葉は掠れ、千恵子の表情は歪んでいる。

「かーっ、てめーら姉妹揃いも揃って——、同じことを言わせんなよ、なあッ！」

とうとう、指で藍澄の鼻を摘み上げて鼻の穴を塞ぎ、完全に呼吸ができなくなる。

「むううううううう——、むううう、ぐうぐう、ぐうううつ、むううつ、ぐううつ」

柳は藍澄を窒息させながら、顎で千恵子に『もつと元気良くやれ』と合図する。

「頑張れ、頑張れ♡」

「そーだそーだ、よし手振りも付けて、よし、もつとはっちゃける、そうそう！」

「頑張れ、頑張れ♡」

両手を交互に掲げながら、大きな乳房を揺らして必死のエールを送られる千恵子。

「やべえやべえ、カオス過ぎるっ、ぎやはははははは、良くなってきたぞー、おい、

今から口にたっぷり出してやるからなあっ、それを飲み干すまで口開けんよー」

目から涙を溢れさせ、必死に頭を上下させて柳を射精させようとする藍澄。

それを馬鹿げた言葉で応援する千恵子。

姉妹の凄惨な扱い。もし、姉妹の親がこの様子を間近で見せられたら、余りの光景に

発狂して血の涙を流してしまうだろう。

「いっくぞー、最近ご無沙汰だったからメツチャ出るけど口から漏らすなよー、っと」

「ぐっ——、ぐうううううううう——、ごくっ、ごくっ、ぐっ——、ぐお——」

顔をしかめて、口の中に出された濃厚な白濁液を必死に喉に落とそうとする。

しかし、粘着きがひどく、絡みついて中々滑り落ちてくれない。

「まだまだ出る——、おい、ちよっと出過ぎじゃねえか、止まんねえ、おいつ、口

を離せ——、っ——、息が苦しいんだろっ——、離せよおい、てめえっ——」

苦しみに喘ぐ藍澄——、

目からは涙が溢れ落ち、口からは唾液が泡立って溢れ、性液を苦しみながら呷る。

側から見れば、それは間違いなくそう見えた。

しかし、その瞳の奥底では、愉悦の感情が強く渦巻いている事に柳は気付かない。

「——、ふざ、けんな——、力が、はいらねえ——、っそのナイフに、触る——、な」

無表情で千恵子はナイフを奪い盗ると、誰も座っていない助手席に放り投げる。

「じゅるるるるるるっ——、じゅるるるるるるうっつうっつ——、じゅるるるるるるっ」

いやらしい汁音を豪快に立てる藍澄は、絞る様に口を窄ませてペニスを吸い付く。

鼻から呼吸ができるようになり、自分からペニスを根元まで咥えこんで蹂躪し、精液を次々に喉を鳴らして飲み下した。いつの間にか、険しかった筈の目尻は緩んでいる。

「——、どういう事だ——、力が入らないどころか、抜けて——があっ」

「——んふふ♡じゅるるるるるるるるう、んにゅっ♡じゅるるるるるるるるううううじゅるるるる」

射精が止まりかけても、藍澄のしつこいフェラチオが無理矢理にこじ開ける。

ぷにぷにとした頬っぺたの内側で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になったペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

た。ペニスを優しく扱っぺたの内で亀頭を洗う様にごしごしと擦り付けて、敏感になっ

口に指を突っ込んで、適当に舌や歯茎を掻き混ぜる様に触れる千恵子。

「あがつ——、がつ、がつ——はあつ、つつ——ぐッ——うおえつ——」

それを噛み千切ろうと口を動かすも、千恵子の指の力の方が強く顎が動かない。

「とりあえず——、五月蠅いですし、これ切り取っちゃいますか？」

「千恵子、そしたら何も喋れなくなるってば」

舌を指で引っ張り、反対の指でハサミのジュエスチャーをする千恵子。

「でも、碌な事喋りませんよこのゴミ、情報も本当に何も知らなそうですし」

「そだねー、確かに何も知らないだろうなー。変に頭回るみたいだから嘔吐きだしい」

情報を持っているかどうかより、その真偽が疑わしいとその価値を見直されている。

「情報を訂正して美乃梨さんに連絡しといてえー」

「今掛けています、美乃梨さんですか？欲しい情報は持っています、それに最後のシ

ヤウトに関してもブラフかと思われ、はい、はい、了解しました」

元々、籠絡した後に拷問して吐かせる予定だったが、不必要と判断された様だ。

「——、おいテメエら——、ムゴッ——、ほはへは、おまえらひんへんは？」

意趣返しで、口にシルクのパンツを突っ込まれた柳は、やはり勘が異常に鋭かった。

そして、その言葉をきっかけに二人の眼の色が変わる。

「こいつ、やっぱり殺そうか」

「そうですね、このゴミはここで処分するのがいいでしょうね」

捕食者の顔になり、舌舐めずりをして獲物を見下ろす二人。

「さーて、どうやって搾っちゃおうかなー」

「これ以上暴れられても困りますし、今すぐに殺すべきではないですか？」

剥き出しになった手入れされ無毛の女性器を、ゆつくりとペニスに近付ける藍澄。

「——むぐつつう、ごがあうううう、むがあああつ、むぐうあう」

鼻で呼吸しつつ、どうにか口に詰まった下着を取り出そうと奮戦する柳。

「だって、折角エナジードレインできる相手なんだから、しとかないとねッ——あ♡」

騎乗位になって性器同士をくちゅくちゅと擦り合わせ、焦らしつつも即挿入した。

「はあ……、それじゃあ私は何をすれば？」

「おちんぼが——あつ、ギンギンになる様にいっ——、サポートよろしくう、んっ♡」

腰をゆつくりと落としたのは最初の一度だけで、その後は高速ノンストップで尻を叩

きつけ、ギチギチに窄んだ膪がペニスと密着し襞がカリを何度でもめくり上げる。

「——ふぐうっ、ぐっ——ふっ——、ふっ——、あつうぐう——、むぐう」

柳は、射精する度に全身が疲労感に包まれるのを感じていた。そして、筋肉が落ちて、自分が女子供にですら力負けする程度に、体力が無くなっているのを理解する。

だから、次に自分が射精してしまったら、命を失うのではないかと予測していた。

「——早く射しましょう？もう抵抗する事も叶わないのですから、悔しいでしょう？散々身体と精神を弄んで来た女に、なす術も無く蹂躪されるのは、屈辱的でしょう？」

千恵子は、横になって耳元で柳の精神のガードを崩す為の言葉を囁き始めた。

先程まで、普通の愛撫では一切の性感が上がらなかった柳だったが、一度目の射精で決じ開けられて、今では普通に全身が感じ始めて、むしろ徐々に開発されてきている。

「あ♡ドンドン硬くなって来たあんっ——、でも、結構♡耐える♡じゃん♡あっ♡」

「——うッ、——うっ——、かあっ——、があっ——、んうぐうっ——ぐううっ」

藍澄は、単調なりズムを徐々に変化させる様に腰をくねらせ、時に小刻みに、時にゆつくりと大振りに、巧みにペニスを喜ばせ続けて射精するギリギリまで追い詰める。

「あら、なかなか耐えていましたが、射精してしまうのですか？いいですよ？射したいなら射しても、気持ち良いなら、射精するのが当たり前なのですから、早く射して？」

冷静に、暗示を掛ける様に淡々とした言葉で責めて、許して、精神を削る。

「ん♡射精寸前のッ——、ガッチガチの——、おちんぼッ——、さいっこうッッ、

もう逝っていいよ、私のキツキツまんこでッ、人生で一番気持ちいい射精しちゃお？♡」

「射して、射して、射して、射して、射せ射せ射せ射せ射せ射せ射せ射せ♡」

肉体と精神が同時に極限まで高められて、ペニスは呻く様に大量の先走りを漏らす、それでも完全な射精には至らずに、寸前で堪える事に何とか成功した。

「——んっ、んぐぐうっ、むぐううううっ——、ごくんッッ、ぷはあっ」

「こいつッ、私のパンツ飲み込んだんだけど!!あれ、お気になのに……」

「それは、自分の下着を突っ込んだ藍澄が悪いのでは？」

柳は口に詰められていた布を、なけなしの力で喉を通し、無理矢理に腹に下した。

尋常な人間なら、喉に詰まらせて窒息死していただろうが、男は尋常ではなかった。

「——っ、ふう——、まさか最後の晚餐がパンツだとはな、俺くらいだろ、まじで」

生命を吸われげっそりと顔を細らせた柳は、それでも軽口を叩き続ける。

「あんたっ——、生意気——、早くッ、射精してッ、楽にッ、なればッ、ねえ♡」

ムキになった藍澄は柳のシャツをビリビリに破り捨て、肌を露出させる。

「乳首、凄く感じるでしょう？こうやって優しく摘んだり、擦ったり、女の子みたいに身体をビクつかせて、射精のスイッチ入っちゃいますね？お耳も、なめふあふへ♡」

両乳首を細指が擦る様に愛撫して、千恵子の長い舌が耳穴を穿る様に潜り込む。

「——、なあっ——、俺はっ——、死ぬんだろ——っ、まあ死ぬわな——っ、流石に」

「死ぬよ♡早く♡金玉の中♡空っぽにして♡自分の馬鹿さを♡後悔してっ♡死ぬっ♡」

「そうです♡これ以上我慢しなくても、いいんでふふあふあ、れえろえろえろ♡」

フィニッシュに向かって全力で腰を落とす藍澄。千恵子は耳を蹂躪し理性を溶かす。

「——、最後に、キスしてくれよ、俺を安らかに眠らせる為の、口付けを……」

「はあ？」

首を傾げ、目の前の男が何を言っているのか、測る様に訝しむ藍澄。

「いいじゃないですか、最後は口から全て吸い上げてしまえば、望み通りにね♡」

「そうだぞっ——、死ぬ前の人間の言うことは——、聞いとく、もんだっ——」

最後まで上から喋り続ける柳は、虫の息になりながらも顔は笑顔だ。

「千恵子までっ——、嫌じゃないっ——けどっ、早く逝ってよね——、んっ♡れえろ、んっ♡舌出して♡ん♡ちゅっ♡死んでよ♡んっ♡早く♡ね♡ん♡気持ちい？♡んっ♡」

舌を絡めるディープキスを始めた二人、老人の様に痩せ細っても、人として、餌として、藍澄はしっかりと恋人の様に濃厚なキスをする。

「んうむ♡はむう♡もつと♡ちゃん♡と♡舌動かして♡私を♡気持ちよく♡させて♡ん♡ちゅっ♡唾液飲んで♡えええろお♡ほら♡ごつくんして♡よくできました♡ちゅ♡」

藍澄の体液を全て体内に取り込んだ結果、更に柳の身体が震え始める。

「ほらあ♡れえろ♡あむ♡早く逝きなさい♡もう出したくてしょうがないでしょ♡」

柳の腰が痙攣を始めて、小刻みにぐりぐりと押し付けられる藍澄の膣に、早く射したい、早く射したいと懇願をしている。もう、限界だった。

「——イクッ——、ああっ——、イクッ——、いくっ、あっ——あっ」

「間抜けな顔♡死ね♡死ね♡死ね♡きもちよーく、逝って♡逝って♡逝って♡ええ♡」
熱々な二人を見て、千恵子は見ていられないと顔を逸らした、瞬間——、

「——、ありがとう、死んでくれ」

座席の隙間に忍ばせていたもう一本のナイフを、無音で取り出して逆手に持った柳。

「死ぬのはあんたでしょうが——、こんなに逝ったのに、まだそんな口を……」

どこにそんな力が残っていたのだろうか、僅かに残っていた微力を火事場の瞬発力で増幅し、藍澄の首の急所に狙いをつけて研ぎ澄ました感覚で振り下ろす。

「藍澄、危ないッ——！」

ようやく気付いた千恵子が叫ぶがもう遅い。

「へ？」

藍澄の間の抜けた声が千恵子の耳に届いた時には、ナイフの刃先は辿り着いていた。

「ちっ、ずりいな——、絶対俺の勝ちだったろ——っ、もう——、無理っ——だ」

悔しそうな声、自分の全力を出しても届かなかったという、諦めの声。

刃は藍澄の柔肌を傷つける事はなく、それどころか包み込む様に変形していた。

刀身の捻じ曲がったナイフが柳の手から滑り落ちる。

柳のペニスには既に散々精液を漏らしていて、藍澄の膣からどろどろとした半固形の白濁液がたっぷりと漏れ出していた。

両腕がだらりと落ち、全身に力が籠る事はもう無さそうだ。

「あはは、君凄いなー。まだ私を殺そうとしてたんだー、でもごめんねー、私の身体は魔力を帯びると自由に形が変わるんだよー、ほらおっぱいもドーンって♡」

急にばるんっ、と小さかった藍澄の膨らみが爆乳に変化する。ロリータな雰囲気と、アンバランス過ぎる豊満な乳房が危険な魅力を産み出していた。

「ロリ巨乳?! いや、ロリ爆乳じゃん——、っ——、ふざけんな、最高じゃねえーか」

「何、そういうの好きなの? じゃあ死ぬ前におっぱいで顔包んであげるねー♡」

「私もGカップはあるんですよ? 先程は突き返されてしまいましたけど♡」

柳の顔を両側から包み込んで口と鼻を塞ぐ様になると、呼吸が不可能になった。

「——むぐうつうつうつむぐぐうつうつうつうつ——」

ビクビクと全身を微動させ、空気を求めて顔を動かそうとしても乳肉が塞ぐ。

「幸せだねー、おっぱいとおっぱいに挟まれて死ぬの、男の夢って言うでしょー♡」

「お乳とお乳の甘い匂いをいっぱい吸い込んで、赤ちゃんみたいに乳首をちゅって♡」
柳の口に千恵子の乳首が差し込まれ、それをがむしやらに舌で舐める柳。

「——むうつぐ——、むうつぐ——、むうつぐ——う……」

段々と舌が動かなくなつて、身体が少しも動かなくなつて、呼吸もしなくなつて——、柳は生命活動を停止した。

何も言わなくなつた柳を見て、ようやく一息を吐く二人。

「優秀な人間とは言いませんが、とても危険な因子を排除できたのは成果でしたね」

「そうだねえー、いつか私達の敵になつてたかも知れない、か」

少し名残惜しそうな視線を送る藍澄は、骨と皮だけになつた柳を見て少し笑つた。

「この子、柳龍之介って言うんだっけ」

名前を口に出して、自分がそれを憶えていた事に驚く。

何を思つたのか、藍澄はカサカサになつた皮に口付けをする。

「姉さんどうしたんですか? もしかして情が湧いたんです?」

「情——、私達サキュバスにそんな感情があるわけないでしょーが」

それもそうかと、千恵子は自分の口から飛び出した言葉に疑念を抱いた。

「ふあああああつ、ねっむい……、やっぱり食後はお昼寝だよねえ」

「いつも寝てる気がしますが。吸精してないので私の方が疲れてますけど」

欠伸をして寝転がる藍澄に対して、溜息を吐いて愚痴を零す千恵子。

「あはははは、気にしない気にしない……、すやあ……すやあ……」

狸寝入りをして誤魔化す藍澄に再度溜息吐きながら、千恵子も休む事にした。

藍澄と千恵子は目的地に着くまでの間、その屍を囲む様にして浅い眠りに沈む。

あとがき

やっと、上巻を終わらせる事ができました。

当初、「サキュバスバスツアー」は四百ページほどで終わる予定で、上下に分ける筈では無かったのですが、いつの間にかポリウムが増えて、こういう形になりました。結果としては、第四章の濃度がかかなり上がり、自分の描きたかった事が表現できたので、良いことづくめだったのですが、労力も上がる訳でまあ大変でしたね。

今作は、長編小説として書いているのですが、『抜けるポイント』を沢山用意して、ストーリーを楽しみつつ、どこかで抜いて貰えばなーと思っています。

メインターゲットにしているのは、やはり『M向け』なのですが、その中でも様々なシチュエーションの中で、『別の性癖』にも刺さる様に沢山のシチュエーションを用意しました。

プレイは、『パイズリ』や『耳舐め』、『乳首舐め』や『言葉責め』、かなり自分が好きな物が複数回出てくると思いますが、自分がどういうシチュエーションで、どういう風にされたいか、したいかというのを追求しているのです、今後も目にすると思います。

それでも、何回出てきても、『その時その時が、最高のプレイ』になる様に、被る事を恐れないで、全てのプレイを妥協せずに書いていこうと思っています。

ハズレの濡れ場を用意する気はないので、抜けない箇所は実力不足という事です。キャラクターに関してですが、言葉での書き分けが難しく、同じ様な喋り方をしてしまう場合が多々あると思いますが、できる限り癖をつけて判別し易くを心掛けます。

それでも、やはり分かりにくい箇所はあると思いますが、地の文で誰が発言しているのか分かりにくい部分は補足していきますので、大丈夫だとは思っています。

個人的な意見なのですが、DMの方でも女の子が責められているシーンが好き、という感情を持っていると思います。シチュエーションと設定さえ固めて仕舞えば、色々なプレイを楽しんで頂けると思いますので、いつもと違う性癖を刺激されたという事があればとても嬉しい事です。

読者の方の中で、人気が高くなったキャラは本編とか、番外編でも活躍させたいと思っていますので、そういう意見、感想がありましたらどんどん下さい。

本作品が、処女作では無いのですが、完成まで持っていたのは今作が初めてなので、至らぬ点が多々あると思いますが、全力でこれからも書いていきます。

長く書いていきたいと思っていますので、私のファンになって頂けると嬉しいです。これからも、エロい物を一番に突き詰めて、長く楽しんでいただく為にストーリーも二番手になりますが、磨いていきたいと思っています。

長くなりましたが、今後とも応援の方をよろしくお願いします。

2018年、3月27日、一式龍一

サキュバスバスツアー
～淫魔と温泉旅行、一泊二日～（上）

